

ISSN1341-397X

年

報

平成二十四年度

年 報

平成24年度



平成25年 5 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

公益財団法人
山形県埋蔵文化財センター

ISSN 1341-397X

年 報

平成24年度

2013年5月13日 発行

発 行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3246

山形県上市市中山字壁屋敷5608

☎023-672-5301(代)

印 刷 ㈱大風印刷

序

平成24年度における当センターの事業については、関係機関の御支援・御協力をいただきながら取り組みをすすめてきた結果、計画した事業のすべてについて円滑に実施することができました。その概要について申し上げますと、はじめに、調査事業においては、延べ21遺跡の発掘調査と報告書作成のため整理作業を実施し、3冊の発掘調査報告書を刊行いたしました。

本県における近年の発掘調査の傾向は、県公共事業の減少が引き続き見られ、国による新直轄事業の高速交通網整備に伴う事業もピークをむかえたことから、今後予想される高速道路の県境部分の整備や県の公共事業等の事業量を的確に把握しつつ、調査体制の整備に努めていかなければなりません。また、私どもの重要な施策である埋蔵文化財保護の重要性の周知や、埋蔵文化財を通して古代の人との心の交流の場を県民の皆さんに提供する事業については、引き続き県民の皆さんの目線に留意しながら、責任ある発掘調査を基本とした調査研究に取り組んでまいります。

次に、普及啓発事業につきましては、ホームページでの情報発信や調査遺跡における発掘調査説明会の開催、広報誌「埋文やまがた」の刊行などを通して、埋蔵文化財の調査研究の成果を県民の皆さんにお知らせしてまいりました。

今年度は、昨年度に引き続き、普及啓発事業実行委員が中心となり、さまざまな普及啓発事業を計画、実施してまいりました。中でも、遺跡発掘体験、体験講座、遺跡見学と3回にわたり開催した「ふるさと考古学講座」では、考古学の面白さや古代人の知恵や工夫に触れる機会をもつことができ、多数の参加者の方々から満足いく内容であったという声を頂くことができました。特に夏に実施した体験講座は、上山城30周年記念事業とのタイアップ企画として開催されました。上市市・上山城管理公社との共催でおこなったもので、「上山よいとこ再発見」と題し、特別展示や公開講座もあわせて実施され、好評を得ることができました。平成20年度から開催している「山形県埋蔵文化財センター参観デー」は、内容を充実しながら、企画展示、センターの業務内容の紹介、勾玉作り、整理作業などの考古学体験を実施したところ多くの来場者がありました。

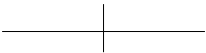
また、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館との共同展示や、山形空港ビル・山形県障がい者保養所東紅苑での「出前展示」を行い、県民の皆さんに出土品を公開し、当センターの事業への理解や文化財保護の重要性について広く普及を図ったところです。

さらに、学校現場からの依頼を受けた「出前授業」は24校で実施したほか、職員を派遣しての講演や調査研究発表等を実施してまいりました。

最後に、平成24年4月1日より「公益財団法人」として新たなスタートを切った「山形県埋蔵文化財センター」ですが、「公益」という言葉の重みを職員一人ひとりが胸に刻み、次世代を担う子供達を中心に、地域の伝統文化の大切さや、誇りと自信の持てる地域づくりの一環として、さまざまな機会を活用して、県民共有の文化遺産としての価値ある埋蔵文化財を後世に伝えていくため、職員一同、一層研鑽を重ねていく所存であります。

平成25年3月31日

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 相馬 周一郎



目 次

I. 管理運営概要

1. 沿 革	5
2. 組 織	
(1) 役員及び評議員	5
(2) 職制及び人員	6
(3) 組 織	6
(4) 職 員	7
3. 施 設	8

II. 事業概要

1. 調査業務	9
(1) 調査遺跡一覧	10
(2) 調査遺跡の概要	
山形城三の丸跡 第10次	12
山形城三の丸跡 第11次	16
山形城三の丸跡 第12次	19
蔵増宮田遺跡	20
馳上遺跡 第4次	22
馳上遺跡 第5次・西谷地b遺跡 第3次	24
森の原遺跡 第3次	27
八反遺跡 第2次	28
蟬田遺跡	32
田向2遺跡 第2次	36
清水西遺跡	38
押出遺跡 第5次	42
2. 普及・啓発・研究等業務	
(1) 研修等	
①全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣	46
②埋蔵文化財担当者専門研修への派遣	46
(2) 普及啓発	
①普及啓発実行委員	47
②センター公開事業	47
③ふるさと考古学講座	48
④研修講座	49
⑤外部展示	49
⑥学校への協力	50
⑦来所者	51

⑧調査説明会	52
⑨職員派遣等	53
⑩資料貸出	54
⑪資料掲載許可	54
⑫出版物	55
⑬ホームページ	55

(3) 情報処理

収蔵図書データベース	55
------------	----

(4) 調査研究発表

高畠町押出遺跡第5次発掘調査出土のクッキー状炭化物 ー縄文時代前期の"クッキー"に迫るための良好な資料ー 大場 正善	56
西海淵遺跡と西田遺跡の墳壙群について 小林 圭一	58
古墳周縁域の交流について ー太平洋側の動向と山形県域の特質ー 草野 潤平	66
古代東北の火山噴火と遺跡からみた災害規模 ー青森十和田a広域火山灰を通してー 植松 暁彦	72
埋文センターよ、もっと中学生もお得意様に！ ～山形県の中学生の歴史教育における埋蔵文化財センターの役割～ 川崎 康永	76

I 管理運営概要

1. 沿 革

山形県には、土地に埋蔵された埋蔵文化財や史跡、有形文化財、民俗文化財などが数多く残されています。これらの文化財は、長い歴史の中で生まれ、育まれ、そして今日まで守り伝えられてきた貴重な県民の文化遺産であり、これを保護・活用し、次世代に確実に継承していくことが大事です。

平成16年に策定された第5次山形県教育振興計画では、「いのち」、「まなび」、「かかわり」の三つがキーワードとなっています。埋蔵文化財については、広い「かかわり」の中で、社会をつくるという基本方針のもと、「感性あふれる地域文化の創造」という視点から、保護と活用にあたることとされています。

平成5年4月に、埋蔵文化財の保護と県土の開発を両立させて調和を図るため、山形県の出資によって「財団法人山形県埋蔵文化財センター」が設立され、平成24年度には公益財団法人に移行しました。当センターでは、埋蔵文化財の調査研究を通じて、県民の文化生活の向上と地域文化の振興に寄与することを目的として、

1. 県内遺跡等埋蔵文化財の調査研究
2. 埋蔵文化財の発掘調査
3. 埋蔵文化財の活用と保護思想の普及

の三つを基本とした各種事業を推進しております。

近年は埋蔵文化財の教育的価値を認識してもらう視点に立って、主に「発掘調査報告会」や「ホームページによる情報提供」、「出前授業」、「外部展示」などの普及啓発活動についても力を注いでおります。

2. 組 織

(1) 役員及び評議員

役 員

理事長	相馬周一郎	山形県教育委員会教育長（平成21年3月22日就任）
専務理事	三浦 秋夫	財団常勤役員
理 事	佐藤 鎮雄	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館長
理 事	今 晴夫	やまがたスポーツパーク株式会社常務執行役
理 事	佐藤 禎宏	山形考古学会長
理 事	松田 洋一	公益財団法人山形県生涯学習文化財団専務理事
理 事	小関 正弘	山形県教育庁文化財保護推進課長
監 事	椰野 哲郎	税理士有資格者
監 事	駒林 雅彦	山形県教育庁総務課長

評議員	長澤 正機	最上地域史研究会理事
評議員	鈴木 啓司	公益社団法人山形県私立学校総連合会常務理事
評議員	小野 忍	酒田市文化財保護推進員
評議員	角屋由美子	財団法人米沢上杉文化振興財団学芸主査
評議員	鈴木 恒雄	有限会社三木屋本館取締役相談役
評議員	須藤 義幸	山形県農林水産部農村整備課農山村整備主幹
評議員	井上 和則	山形県県土整備部道路課長

(2) 職制及び人員

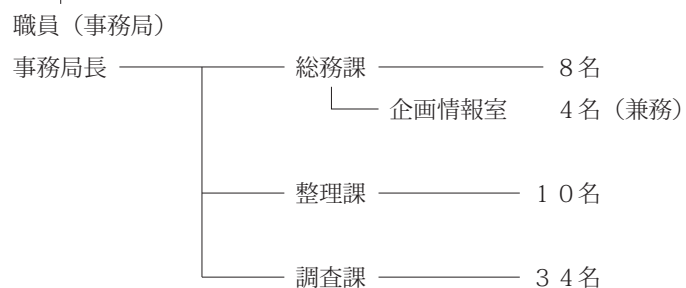
事務局長	1名
課長	2名
考古主幹	1名
課長補佐	1名
係長	2名
専門調査研究員	3名
主任調査研究員	7名
調査研究員	15名
調査員	15名
事務員	4名
専門員	1名
計52名	

(3) 組織

役員(理事会)

専務理事(常勤) ——— 理事長(非常勤)

職員(事務局)



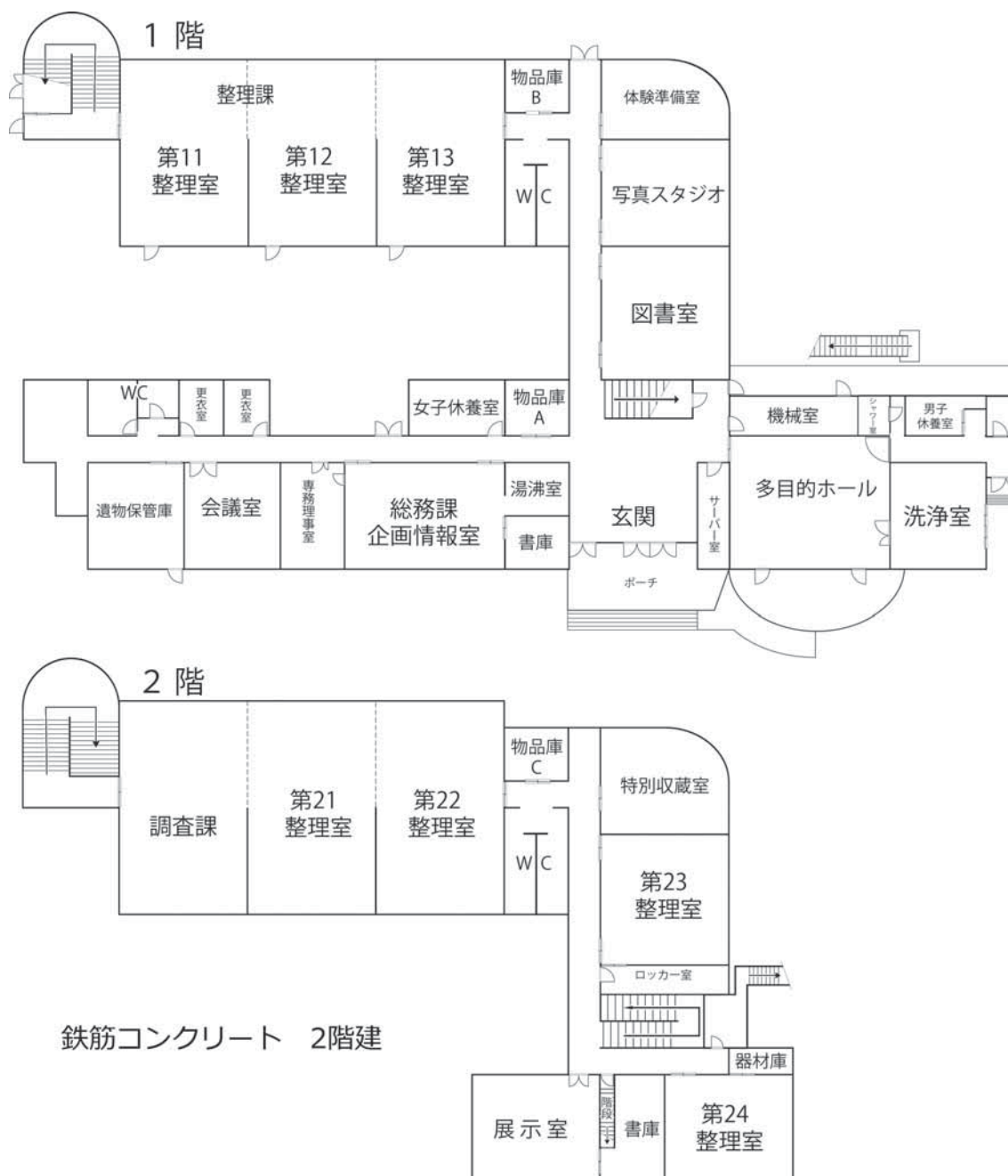
(4) 職員

課 名	職 名	氏 名	所 属
総 務 課	事務局長	小笠原正道	
	課長補佐	須賀井新人	財団職員
	総務係長	高桑 弘美	財団職員
	施設管理専門員	佐藤 恒	
	事務員	井上 紀子	
	事務員	渡邊 睦子	
	事務員	坂井 裕美	
	事務員	秋葉 絢子	
整 理 課	課 長	黒坂 雅人	財団職員
	主任調査研究員	水戸部秀樹	財団職員
	主任調査研究員	向田 明夫	県教育職派遣
	調査研究員	菊池 玄輝	財団職員
	調査研究員	渡辺 和行	財団職員
	調査研究員	伊藤 大介	県教育職派遣
	調査員	五十嵐 萌	
	調査員	瀨田 純	
	調査員	後藤枝里子	
調 査 課	課 長	斉藤 敏行	
	考古主幹(兼)課長補佐	伊藤 邦弘	財団職員
	専門調査研究員	齊藤 主税	財団職員
	専門調査研究員	氏家 信行	財団職員
	専門調査研究員	小林 圭一	財団職員
	企画調整係長	原田 英明	財団職員
	主任調査研究員	植松 暁彦	財団職員
	主任調査研究員	齋藤 健	財団職員
	主任調査研究員	菅原 哲文	財団職員
	主任調査研究員	高桑 登	財団職員
	主任調査研究員	高橋 敏	県教育職派遣
	調査研究員	大場 正善	財団職員
	調査研究員	草野 潤平	財団職員
	調査研究員	天本 昌希	財団職員
	調査研究員	川崎 康永	県教育職派遣
	調査研究員	小笠原伊之	県教育職派遣
	調査研究員	庄司 昭一	県教育職派遣
	調査研究員	小野 健二	県教育職派遣
	調査研究員	長谷部 寛	県教育職派遣
	調査研究員	江波 大	県教育職派遣
	調査研究員	尾形 知哉	県教育職派遣
	調査研究員	東海林弘和	県教育職派遣
	調査研究員	市川 光紀	県教育職派遣
	調査員	山木 巧	
	調査員	吉田 満	
	調査員	高木 茜	
	調査員	安部 将平	
	調査員	山田めぐみ	
	調査員	佐藤 智幸	
	調査員	岩崎 恒平	
	調査員	高柳 俊輔	
	調査員	渡邊 安奈	
	調査員	板橋 龍	
調査員	齋藤 和機		

3. 施 設

公益財団法人山形県埋蔵文化財センターは、平成24年11月末まで、山形県上市市弁天二丁目15番1号にて業務を行ってきたが、耐震構造上の問題と施設の老朽化のため、12月1日より、山形県上市市中山字壁屋敷5608番地に移転した。

現在当所の施設は、以下の通りとなる。



Ⅱ 事業概要

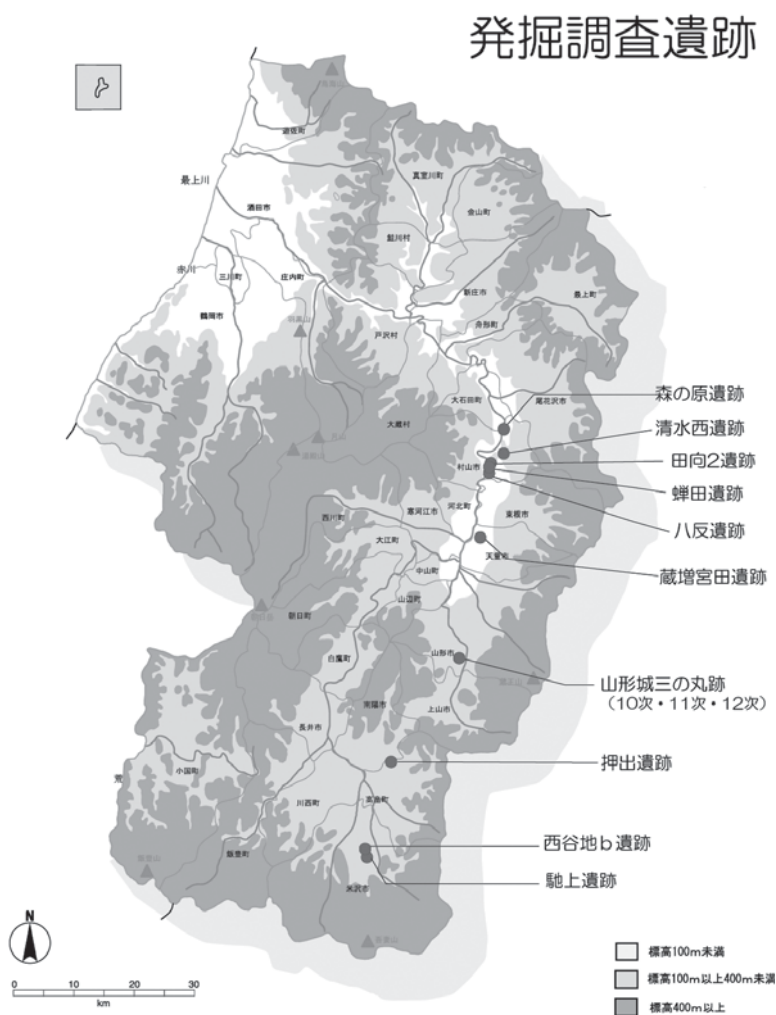
1. 調査業務

平成24年度は、国土交通省および山形県から委託を受け、道路建設などに先だつての発掘調査と整理作業を実施しました。

発掘調査は延べ13遺跡について行い、調査面積は35,549㎡になります。出土品は土器等751箱が出土文化財の認定を受けました。

報告書作成のための整理作業は延べ21遺跡について実施し、そのうち4遺跡3冊の発掘調査報告書を刊行しました。

- 1 やまがたじょうさん まる
山形城三の丸跡（第10次）
- 2 やまがたじょうさん まる
山形城三の丸跡（第11次）
- 3 やまがたじょうさん まる
山形城三の丸跡（第12次）
- 4 くらぞうみや た
蔵増宮田遺跡
- 5 はせがみ
馳上遺跡（第4次）
- 6 はせがみ
馳上遺跡（第5次）
- 7 にしやち
西谷地b遺跡（第3次）
- 8 もり はら
森の原遺跡（第3次）
- 9 はったん
八反遺跡（第2次）
- 10 せみ た
蟬田遺跡
- 11 たわかい
田向2遺跡（第2次）
- 12 しずにし
清水西遺跡
- 13 おんだし
押出遺跡（第5次）



※本書中の「調査遺跡の概要」の記述内容は概要の報告であり、発掘調査報告書の刊行をもって本報告となります。

(1) 調査遺跡一覧

NO.	遺跡名	所在地	主な時代	遺跡の種別	調査期間
1	山形城三の丸跡10次	山形市	奈良・平安・中世・近世	城館跡	5月14日～7月27日
2	山形城三の丸跡11次	山形市	奈良・平安・中世・近世	城館跡	5月21日～11月30日
3	山形城三の丸跡12次	山形市	奈良・平安・中世・近世	城館跡	6月11日～10月5日
4	蔵増宮田遺跡	天童市	古墳	集落跡	6月4日～10月16日
5	馳上遺跡 4次	米沢市	古墳・奈良・平安・中世	集落跡	5月30日～11月16日
6	馳上遺跡 5次	米沢市	古墳・奈良・平安・中世	集落跡	5月30日～11月16日
	西谷地b遺跡 3次		奈良・平安	集落跡	5月30日～10月31日
7	森の原遺跡 3次	村山市	縄文・平安	集落跡	7月2日～9月14日
9	八反遺跡 2次	東根市	縄文・平安	集落跡	5月14日～12月20日
8	蟬田遺跡	村山市	平安・近世	集落跡	5月22日～11月30日
10	田向2遺跡 2次	村山市	奈良・平安	集落跡	5月23日～8月10日
11	清水西遺跡	村山市	旧石器・縄文	集落跡	5月23日～11月13日
12	押出遺跡 5次	高畠町	縄文	集落跡	10月15日～12月20日
13	押出遺跡 4次	高畠町	縄文	集落跡	
14	西谷地b遺跡 1・2次	米沢市	奈良・平安・中世	集落跡	
15	沼袋遺跡	東根市	平安・中世	集落跡	
16	北原2遺跡 1・2次	村山市	縄文・平安	集落跡	
17	北原4遺跡	村山市	縄文・平安	集落跡	
18	森の原遺跡 1・2次	村山市	縄文・平安	集落跡	
19	今宿大谷地遺跡	大石田町	縄文	集落跡	
20	稻荷山館跡 3次	米沢市	中世	城館跡	
計					

	調査面積 ：平方m	文化財認 定数：箱	起因事業〈委託者〉	業務内容			調査経費 ：千円
				発掘	整理	報告書	
	816	70	県保健福祉センター東棟（仮称）新築工事〈子育て推進部〉	○	○	○	35,905
	4,200	37	一般国道112号霞城改良〈国土交通省〉	○	○	—	98,262
	910	35	山形法務総合庁舎親営事業〈国土交通省〉	○	○	—	38,034
	2,230	115	主要地方道天童大江線〈県土整備部〉	○	○	—	47,842
	2,150	5	東北中央自動車道（米沢～米沢北）建設〈国土交通省〉	○	○	—	50,131
	3,068	15	主要地方道米沢高畠線〈県土整備部〉	○	○	—	27,969
	2,000	4	一般県道大石田土生田線〈県土整備部〉	○	○	—	35,797
	8,550	150	東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	○	○	—	191,091
	6,000	121	東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	○	○	—	85,977
	2,300	5	東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	○	○	—	37,386
	2,800	22	東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	○	○	—	53,535
	525	172	国営かんがい排水事業米沢平野二期農業水利事業〈農林水産省〉	○	○	—	25,269
			国営かんがい排水事業米沢平野二期農業水利事業〈農林水産省〉	—			
			東北中央自動車道（米沢～米沢北）建設〈国土交通省〉	—	○	—	18,425
			東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	—	○	—	37,974
			東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	—	○	○	13,984
			東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	—	○	○	
			東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	—	○	—	22,319
			東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設〈国土交通省〉	—	○	—	10,948
			国道13号米沢拡幅〈国土交通省〉	—	○	○	12,092
	35,549	751					842,940

(2) 調査遺跡の概要

やまがたじょうさん まる 山形城三の丸跡 (第 10 次)

遺 跡 番 号 201-003
調 査 次 数 第 10 次
所 在 地 山形市十日町
北緯・東経 北緯 38 度 14 分 54 秒・東経 140 度 20 分 6 秒
調査委託者 山形県子育て推進部子ども家庭課
起 因 事 業 山形県保健福祉センター東棟 (仮称) 新築工事業
調 査 面 積 816 m²
受 託 期 間 平成 24 年 4 月 27 日～平成 24 年 3 月 31 日
現 地 調 査 平成 24 年 5 月 14 日～7 月 27 日
調査担当者 天本昌希 (現場責任者)・齋藤和機
調 査 協 力 山形県県土整備部建築住宅課営繕室、山形県村山総合支庁保健福祉環境部村山保健所保健企画課
遺 跡 種 別 城館跡
時 代 近世・近現代
遺 構 堀、井戸
遺 物 陶磁器・土器・土製品・瓦・木製品・金属器・石製品 (文化財認定箱数：70 箱)



遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

山形城跡は、現在、国史跡となっている本丸・二の丸と、その周辺を取り囲む三の丸を含め、東西 1,617 m、南北 1,553 m の範囲が遺跡として登録されている。三の丸は現在の山形市街地の中心地にあたり、道路の拡幅等多くの開発事業が行われている。埋蔵文化財センター

では、受託した山形城三の丸跡発掘調査の調査次数を、年度ごと、調査原因となった事業別に順次振り分けており、今回の調査で第 10 次を数える。

第 10 次調査は、2012 年度の山形県子育て推進部子ども家庭課による保健福祉センター東棟 (仮称) の建設に伴う発掘調査である。山形市十日町一丁目の現村山保健所の敷地内において、2012 年 5 月 14 日より開始し、同年 7 月 27 日まで実施した。調査面積は、816 m²で、SD1 と SE2 の 2 つの遺構を検出した。

検出遺構

SD1 は、調査区東側を縦断する山形城三の丸の東堀跡である。検出できた範囲は、長さ 30 m、幅は上端で 12 m、軸は南北、東 25 度の方向に走る。壁面は西側のみを検出し、東側は立ち上がりを確認できないまま調査区外へ伸びる。深さは最深部で現地表面から 5.3 m、確認面から 4 m を測る。底面から西壁面は、35 ～ 40 度の斜度で立ち上がり、そのまま土塁につながっていたものと推測される。護岸のためか、西壁面に木杭列が確

認できた。底面の幅は、検出できたもので 3.6m 程度あり、堀全体の断面形状は、逆台形の箱堀になる。堀底面および壁面には、20 ～ 50 cm 大の川原石が不規則ながらも一定の密度をもって面的に存在しており、この上面をもって床面、壁面とした。

覆土は、全体的に黒褐色を基調とし、色調や土質、含有物などから 1 層～ 10 層に細分し、遺物の取り上げは、上層、中層、下層、最下層の 4 つに大別した。1 層＝上層は、粘土質のシルト層で、堀の埋め立てにより堆積した層と考えられる。攪乱の影響を大きく受け、境界が曖昧なところも多い。一部に円礫が多数出土しているが、攪乱によるものと思われる。2 ～ 4 層＝中層は、砂質層で粗粒砂層と細粒砂層が互層状に堆積しており、洪水などによる堆積がうかがえる。5 層～ 8 層＝下層は、火災による廃材を廃棄した層と考えられ、大量の木製品のほか、焼けた樹木なども出土している。9、10 層＝最下層は、粘土質のシルト層に灰白粘土層が何層にも薄く堆積し縞状になっている。水成堆積によるものと考えられ、滞水と乾燥を繰り返しながら少しずつ堆積していったことがうかがえる。調査区全体を見ても、この土層中の縞模様が途中で崩れることがないため、溝洫えなどの掘り直しは行われていないと判断できる。

SE 2 は、SD 1 に重複する石組の井戸跡で、SD 1 が埋没した後につくられている。堀の覆土中で立ち上がるもので、飲用水としていたかは別として、女子師範学校及びその付属施設で用いられたものだろう。

出土遺物

上層からの出土遺物は、磁器をみると、瀬戸美濃系のものが大部分を占め、在地の磁器も相当数含まれると思われる。端反碗や小皿が多く、同一の器形、文様のものが多数出土している。他にも薄手酒盃や爛徳利、急須などが多く出土する。陶器は大堀相馬の三彩土瓶や断面 T 字形になる鉄釉掛け流しの中甕、笹絵徳利などが出土している。大量の遺物は、不要品の廃棄によるものと考えられ、三の丸堀の埋戻しに伴うものと判断できよう。出土遺物には平清水のインク瓶など 20 世紀以降の遺物も少なからず出土している。堀の埋立て後の土地利用により紛れ込んだものとも解釈できようが、相当量混在していることから、堀跡は、埋戻し後も窪地としてのこっていた可能性も指摘できる。

その下に堆積する中層の出土遺物量は、上層に比べると遺物量は大きく減るものの、木製品が出土するようになり、磁器は肥前系のものが増えるようになる。

下層の出土遺物は、磁器製品をみると、肥前系のものが大勢を占め、瀬戸美濃系のものは客体的となる。碗の器形は丸形碗や半筒碗、半球碗、広東碗などと様々なものが見られる。陶器は大堀相馬の丸碗や京・信楽の杉形碗、唐津の皿などが、木製品は漆器碗や下駄などが数多く出土している。また、火事で焼けたと思われる大量の炭化材の中には、いくつかの荷札も含まれており、城下の商店の屋号や人名などが記されている。

最下層から出土した遺物は、多くはないものの、初期伊万里の磁器の丸碗や皿、唐津の溝縁皿などがまとめて出土している。また、床面とした川原石を可能な限り外し、三の丸堀の構築年に接近する遺物を探したが、出土したのは、陶器の胴部片 1 点のみであった。

なお、出土遺物の中に近世以前のものは、1 点も確認できなかった。調査区は、隣接する東側の敷地に比べ、1 m 以上の段差をもって低くなっており、土地造成時に深度の浅い遺構ごと削平されている可能性がある。

まとめ

今回の調査は、三の丸堀跡の調査として最大規模のものであり、これまでの調査成果と合わせて、より具体的な三の丸堀の形状や規模を復元することが可能となった。また、火災廃棄層とした下層の出土遺物は、城下に暮らす人々の生活を物語る重要な資料といえる。この層の形成要因となった火災の年代を示す資料として、「明和九年…」と墨書された建材や、「明和 5 年…」と刻まれた硯が出土していることから、18 世紀末を上限とすることができる。調査区周辺での火災記録は、1819（文政 2）年の大火をはじめ、19 世紀前半に数多く残されているが、近隣の調査区でこの火災層は検出されていないため、記録に残らないような小さな火事によるものという可能性もあるだろう。

近・現代遺跡は、各地で調査事例が増し、蓄積が進むにつれ、歴史資料としての価値が高まっている。山形城三の丸跡は、近世城郭としてだけでなく、山形の近代化を語る上で欠かすことのできない重要な資料である。今後の調査成果に期待したい。



写真1 SD1 完掘状況（北から）



写真2 SD1 断面（北から）



写真3 SD1完掘状況近景（北から）



写真4 中層調査状況（東から）



写真5 下層火災廃棄層検出状況（西から）



写真6 調査風景（南から）



写真7 上層出土遺物集合



写真8 下層出土遺物集合



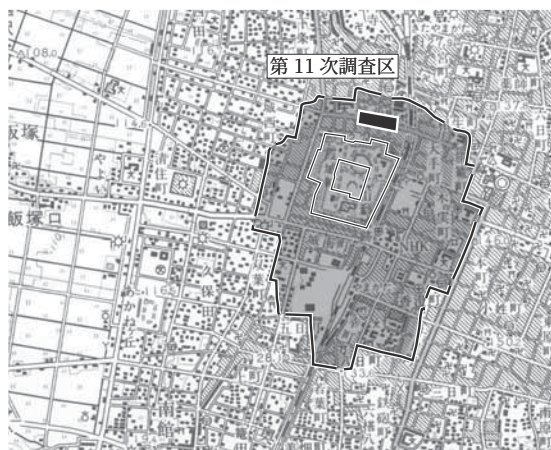
写真9 最下層出土遺物集合



写真10 出土木簡集合

やまがたじょうさんのまるあと
山形城三の丸跡（第11次）

遺跡番号 201-003
調査回数 第11次
所在地 山形市城北町一・二丁目
北緯・東経 38度15分33秒・140度19分52秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 一般国道112号霞城改良事業（城北町）
調査面積 4,200㎡
受託期間 平成24年4月6日～平成25年3月29日
現地調査 平成24年5月21日～11月30日
調査担当者 小林圭一（現場責任者）・川崎康永・小野健二・東海林弘和・市川光紀・高木茜
調査協力者 山形市上下水道部・山形市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 城館跡
時代 古墳時代・平安時代・中世・近世
遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・井戸跡
遺物 土師器・須恵器・縄文土器・陶磁器・金属器・銭貨（文化財認定箱数：37箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城跡（本丸・二の丸）を取り囲む東西1,617m、南北1,553mの広大な城館跡で、文禄・慶長年間（1592～1615年）に最上氏第11代当主の最上義光が、三重の堀を構えた城郭として整備したといわれている。国内では5番目の広さで、奥羽地方では最大の城であったが、最上氏は元和8年（1622年）に第13代義俊が改易され、それ以降鳥居氏から水野氏まで計10氏が山形藩主として転封・入部を繰り返し、石高も57万石から5万石まで削減さ



写真1 D-2区全景（東から）

れてきた。山形城は最上氏改易以降も幾度か改修されたが、維持することが困難な広さで手入れが行き届かず、幕末期の水野氏5万石時代には三の丸のほとんどが水田や畑になっていたといわれている。

今回の調査は、国道112号の拡幅工事に起因するもので、昨年の第9次調査に続いて実施された。国道112号に沿った区域を市街地の区画毎に5つの調査区（A～E区）に区分して実施した（図1）。

遺構と遺物

遺構が最も多く検出されたのは東端のD区（図2、写真1）で、奈良・平安時代の竪穴住居跡が4棟、時期不

明の礎石を持った建物跡1棟、その他に近世の溝跡や土坑を調査した。竪穴住居跡は一辺が4～6mの方形で、深さが10cm程度と浅く、主軸は4方位を向いている。いずれも出土土器から8世紀代の住居跡と考えられ、ST631 竪穴住居跡内（写真2）の土坑からは完形の内黒の甕が出土した。礎石を持った建物跡は、かなり上面から掘り込まれたと考えられるが、時期を特定するには至らなかった。ただし古代の竪穴住居跡（ST301）を切って構築されており、住居跡よりも新しいことは確実で、主軸方向は近世の屋敷の区割りに沿っている。2列に並んだ8基の柱穴は、南北方向に約2mの間隔で4基が配列され、東西の間隔は約4mを測る（写真3）。柱穴の直径は1～1.3mで、建物の柱が沈下しないように30～50cm大の扁平な石を礎として敷設していた。

その他の調査区では、石組み施設を持った近世の井戸跡が7基検出された。いずれも開口部の掘り方は直径3m程度を測るが、石組み施設内の直径は1m程度で、直径30～50cmの大きい石の間に小さな石を埋め込む堅

固な作りとなっており、深さが地表面から3mに達した井戸（SE487）もあった（写真4）。また底面に木材を井桁に組んで、その上に円形の石組み施設を持った井戸（SE802）も検出された（写真5）。SE487からは中国漳州窯の青花大皿の破片（17世紀前半）、またB区の井戸跡内（SE868）からは16世紀後半の瀬戸美濃の折縁皿が出土しており、井戸跡の一部は最上氏の代に機能していた可能性が考えられる。

まとめ

今回の調査では、奈良・平安時代～近世・近代まで各時代の遺構・遺物が検出された。特に近世の石組み井戸跡が7基調査され、調査区域が生活の重要な場所になっていたことを確認することができた。この区域は扇状地の扇端で水が湧きやすく、しかも地盤が砂質土で構成されることから、崩落防止のため石組み施設を持った井戸が構築されたと考えられる。また近世の陶器・磁器の中には、16～17世紀代の中国産の磁器や瀬戸美濃で焼かれた陶器も含まれていた。



写真2 ST631 竪穴住居跡



写真3 礎石を持った建物跡



写真4 SE487 井戸跡



写真5 SE802 井戸跡

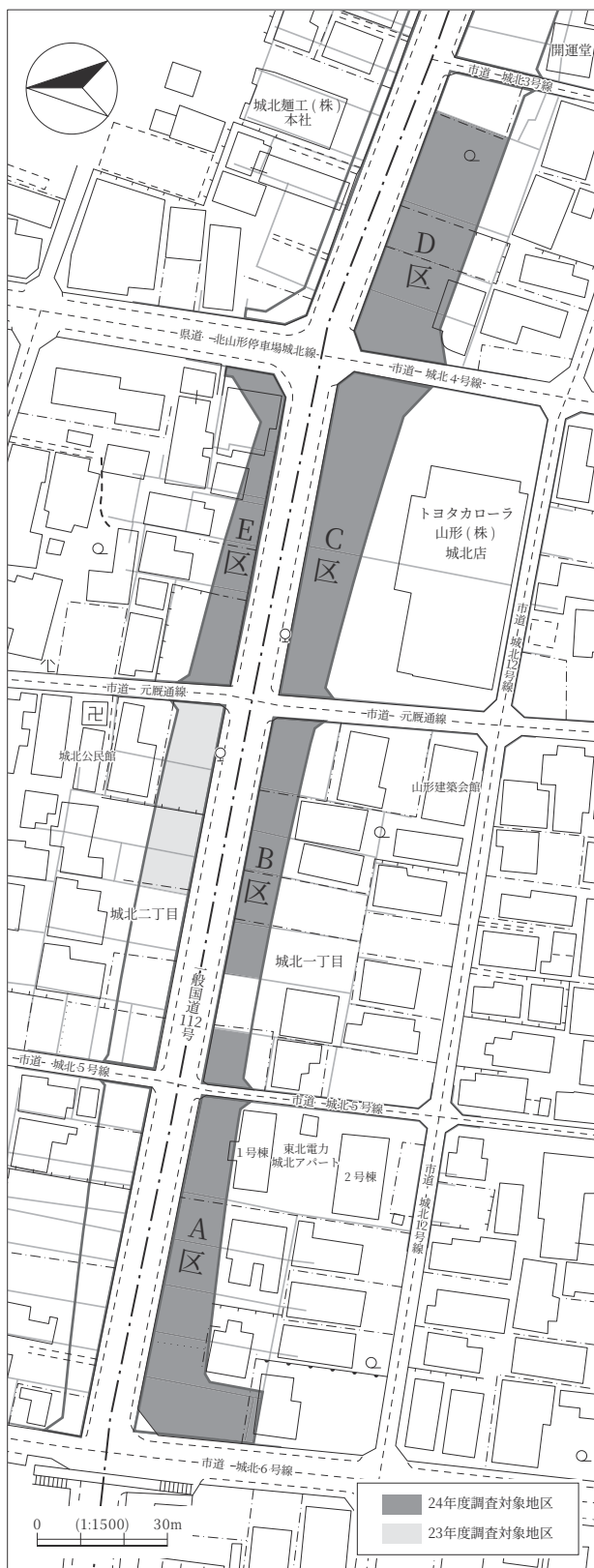


図1 調査区概要図

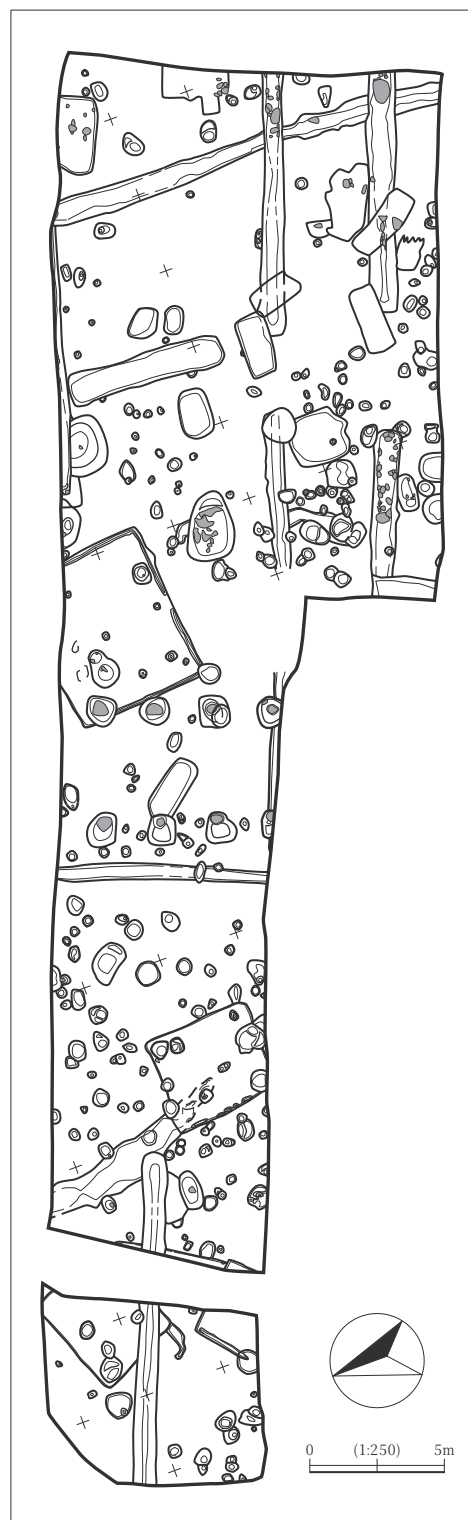


図2 D区遺構配置図

やまがたじょうさんのまるあと

山形城三の丸跡（第 12 次）

遺 跡 番 号 201-003
調 査 次 数 第 12 次
所 在 地 山形県山形市大手町
北緯・東経 38 度 15 分 19 秒・140 度 20 分 01 秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局
起 因 事 業 山形法務総合庁舎新営事業
調 査 面 積 910 m²
受 託 期 間 平成 24 年 5 月 25 日～平成 25 年 3 月 29 日
現 地 調 査 平成 24 年 6 月 11 日～10 月 5 日
調査担当者 氏家信行（現場責任者）・山田めぐみ
調 査 協 力 山形地方検察庁
遺 跡 種 別 城館跡
時 代 近世・近代
遺 構 土坑・溝跡・ピット
遺 物 陶磁器・かわらけ・石製品・金属製品（文化財認定箱数：35 箱）



遺跡位置図（1：50,000）

山形城は市の中心部に位置し、三の丸を含めると東西 1,617m、南北 1,553m、面積約 235 万 m²の広さを有する城で、最上氏 11 代当主の最上義光が整備した城郭といわれている。

今回の第 12 次調査は、最上義光記念館や山形美術館が隣接する山形法務総合庁舎の敷地内で、古地図や石碑などから、かつての山形城家老、水野家の屋敷が存在した場所でもある。

調査の結果、明治時代初めから昭和 37 年まで建っていた山形刑務所（旧山形県監獄署）の影響か、地表面か

ら 1.5m 以上の掘削が認められたが、地表下 1.6～1.8m の深さから土坑や溝跡、ピットなどがの遺構が検出された。古銭や骨などが出土したものもあったが、大半の遺構では遺物の出土が無く、その時代や用途は不明である。

遺物は、調査区の埋め土から大量の瓦が出土し、中には元禄年間の山形城主であった堀田氏の家紋（木瓜紋）や火災除けとして描かれる巴紋（ともえもん）があるものもある。その他、陶磁器や古銭、砥石、硯、焼き台、礎石や山形刑務所に関係すると思われる煉瓦や茶碗、湯呑みなど近世・近代のものが出土し、当時の、この周辺の人々の生活の様子が窺える資料が得られた。



写真 1 調査区中央部完掘状況（西から）

蔵増宮田遺跡

遺跡番号 210-152
調査回数 第1次
所在地 山形県天童市大字蔵増字宮田
北緯・東経 38度21分57秒・140度20分20秒
調査委託者 山形県村山総合支庁建設部道路課
起因事業 主要地方道天童大江線 蔵増(2)工区 道路改築事業(天童市蔵増地内)
調査面積 2,230 m²
受託期間 平成24年5月11日～平成25年3月29日
現地調査 平成24年6月4日～10月16日
調査担当者 齋藤健(現場責任者)・渡邊安奈
調査協力 天童市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所・三郷堰土地改良区
遺跡種別 集落跡
時代 古墳時代
遺構 河川跡
遺物 土師器・須恵器・木製品・石製品 (文化財認定箱数:115箱)



遺跡位置図(1:50,000)

調査の概要

蔵増宮田遺跡は、村山盆地中央部にある天童市西部に位置し、最上川右岸の立谷川扇状地と乱川扇状地にはさまれた氾濫平野に立地する。周囲には、古墳時代後期の国指定史跡西沼田遺跡が680m南にある他、東北中央自動車道建設時に調査された蔵増押切遺跡、板橋1、2遺跡、的場遺跡などの古墳時代前期から中期の遺跡も1,600m圏内に収まるなど、古墳時代の遺跡が集中する地域である。

今回の発掘調査は、23年度に県文化財保護推進課によって実施された詳細分布調査の結果を受けて、遺物や遺構が確認された2,230m²を対象に実施された。

遺構と遺物

調査の結果、調査区からは建物跡など明瞭な生活痕跡を示す遺構を検出することができなかった。

確認されたのは、堆積土の状況から同一河川とみられる深い河川跡2か所(SG3、7)とその上に形成された浅い河川1か所(SG2)である。調査区西側は低湿地となっているが、水田跡などは確認できなかった。しかし、低



写真1 土器集中出土地点(南から)

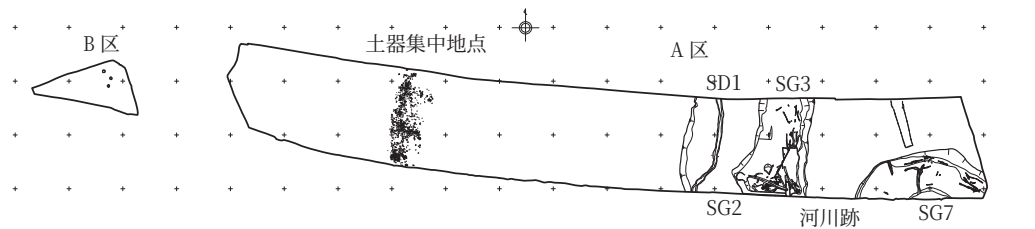


図1 遺構配置図(1:1,000)

湿地との境界のゆるい傾斜部分からは、集中的に投棄された土器群を確認できた。あとは時期不明の溝跡1か所(SD1)のみである。

浅い河川跡の堆積土は一部深い河川跡を覆うように検出されたが、出土する遺物にそれほど大きな時期差は無いようである。従って深い河川跡が急速に堆積した後に浅い河川が形成されたとみられる。

深い河川跡からは多くの土師器の他にも鋤、鍬、横槌などの農工具、織機の一部や糸杵、紡錘車などの紡織具、槽や曲物の底板などの容器、弓などの木製品が出土した他、杭材も多数出土した。大型の横槌は激しく摩耗した痕跡があり、掛矢として使用されていたとみられる。細部まで丁寧に仕上げ実用品とは考えられない小型の横槌も1点出土した。鋤は平鋤2点、鍬はナスビ型曲柄鍬2点と直柄横鍬を1点確認している。弓は半分欠損しているが、握りの部分に樹皮を装飾的に巻付けたほか、表面に何かを塗布している。

また、川岸には杭を打ち込んで木材を固定していたような地点も確認でき、なんらかの護岸施設か足場として設置した可能性も視野に入れて検討する必要がある。

低湿地との境界の土器群は、極めて近い時期に連続的に投棄されたとみられ、器種は坏、高坏、鉢、壺、甕など多種にわたる。須恵器は、歪みが激しく口縁部が欠損

した大型の甕のみ確認できた。

まとめ

今回の調査で、蔵増宮田遺跡からは明確な生活痕跡を示す遺構は確認できなかったが、土器が大量に投棄された地点と河川跡を確認することができた。

河川跡からは、土器だけでなく木製品も出土しており、特に農工具の点数が目立つ。

出土した遺物は、いずれも古墳時代中期のもので、近接する古墳時代後期の西沼田遺跡とは直接的なつながりは無いとみられるが、平成10～11年度に発掘調査した、成生地区にある的場遺跡とほぼ同時期と想定される。

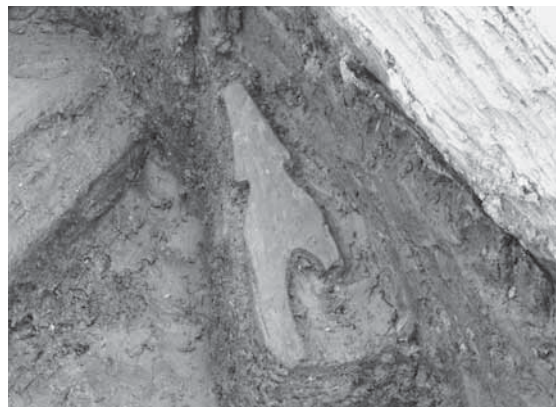


写真3 SG3河川跡出土ナスビ型曲柄鍬



写真2 河川跡俯瞰全景(北西から)



写真4 SG3河川跡出土土曲底板

はせがみ 馳上遺跡（第4次）

遺跡番号 202-560・202-562／米沢市遺跡番号 353・354

調査回数 第4次

所在地 米沢市大字川井字元立・道下

北緯・東経 北緯 37 度 55 分 24 秒・東経 140 度 8 分 6 秒

調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所

起因事業 東北中央自動車道（米沢～米沢北間）

調査面積 2,150 m²

受託期間 平成 24 年 4 月 6 日～平成 25 年 3 月 29 日

現地調査 平成 24 年 5 月 30 日～11 月 16 日

調査担当者 草野潤平（現場責任者）・山木巧・佐藤智幸

調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・米沢市教育委員会・置賜教育事務所

遺跡種別 集落跡

時代 奈良時代・平安時代・中世

遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・畝跡・土坑・柱穴・流路跡

遺物 土師器・須恵器・土製品・陶器・古銭（文化財認定箱数：5 箱）



調査の概要

馳上遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地上に立地する集落遺跡である。これまでの調査で、古墳時代と奈良・平安時代を中心とする生活の痕跡が確認され、北側には中世に属する遺構も少数ながら見ついている。とくに大型の建物跡が多く存在することや、硯・墨書土器など特徴的な遺物の出土から、古代の役所に関連する遺跡の可能性など、一般的な農耕集落とは異なる拠点的な性格を持つ集落と考えられる。

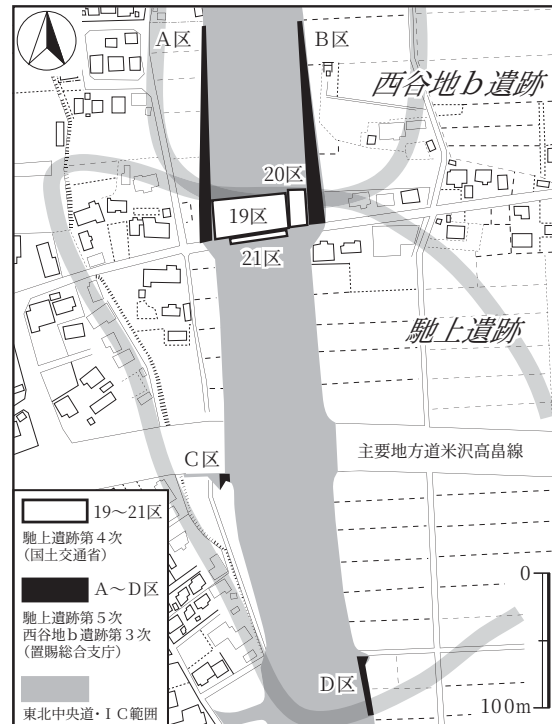


図1 平成24年度調査区概要図 (1:5,000)

今年度の調査区は、平成12年度と平成21・22年度に実施した馳上遺跡第1～3次調査区（南側）と平成21・22年度に実施した西谷地b遺跡第1・2次調査区

(北側)に挟まれた位置にあり、既設の用水路・水道管を避けて19～21区を設定した(図1)。

遺構と遺物

調査では竪穴住居跡1棟・掘立柱建物跡2棟のほか、溝跡・土坑・柱穴などが検出された。主要な遺構・遺物は、調査面積の最も大きい19区に集中する(写真1)。

19区の中央付近で確認された竪穴住居跡は一辺約5.5mを測り、南東方向に煙道が伸びる。住居跡の覆土は浅く、床面上にカマドの構築材料と考えられる粘土が散乱していたことから、上方が大きく削られるなど後世の攪乱が著しいものと判断される(写真2)。攪乱を免れて出土した土師器高坏や、底面に木葉痕のある土師器鉢などの特徴から、8世紀前半に位置づけられる。

調査区内では大小多数の柱穴が検出されたが、調査時点で認識できた掘立柱建物跡として、竪穴住居跡の北側に桁行2間×梁行1間、19区西側に桁行3間×梁行1間の側柱建物跡がそれぞれ認められる。とくに19区西側の側柱建物跡は、柱穴の直径・深さが70cmほどで、

奈良・平安時代に建てられたものと考えられる。

中世以降に帰属するものでは、永楽通寶など複数種の古銭が出土した土坑や、東西方向に並行して走る4条の溝跡などが挙げられるが、総じて遺物の出土量は少ない。

20区では南北方向に走る溝跡1条を検出し、これより東側には多数の柱穴が認められた(写真3)。溝跡で区画された中世の屋敷地を構成するものと考えられる。

調査範囲の狭い21区では、遺構の広がりについて断片的な情報を得るにとどまったが、北東方向に伸びる溝跡や土坑のほかは小規模な柱穴が多く認められ、19区とおおむね同様な状況であった(写真4)。

まとめ

今回の調査で馳上遺跡北端の様相が明らかとなり、北側の西谷地b遺跡と密接な関係をもつことがあらためて確認できた。出土遺物については過年度分を含め詳細な整理・検討が必要であり、遺構分布の濃淡や時期的変遷、エリアごとの性格の違いなど、両遺跡を包括した集落全体の展開過程に迫ることが今後の課題である。



写真1 19区全景（東から）



写真2 竪穴住居跡の床面検出状況（南東から）



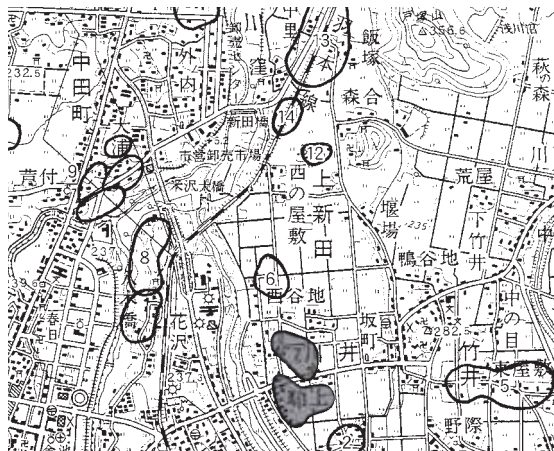
写真3 20区全景（北から）



写真4 21区全景（西から）

はせがみ 馳上遺跡（第5次）・にしやち 西谷地b遺跡（第3次）

遺跡番号 202-560・202-562・202-571／米沢市遺跡番号 353・354・A352
調査回数 第5次（馳上遺跡）・第3次（西谷地b遺跡）
所在地 米沢市大字川井字元立・道下
北緯・東経 北緯 37 度 55 分 28 秒・東経 140 度 8 分 4 秒～北緯 37 度 55 分 12 秒・東経 140 度 8 分 12 秒
調査委託者 山形県置賜総合支庁建設部道路計画課
起因事業 主要地方道米沢高畠線川井 I C 工区（米沢市川井地区）
調査面積 3,068 m²
受託期間 平成 24 年 5 月 16 日～平成 25 年 3 月 31 日
現地調査 平成 24 年 5 月 30 日～11 月 16 日
調査担当者 草野潤平（現場責任者）・山木巧・佐藤智幸
調査協力 米沢市教育委員会・置賜教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 古墳時代・奈良時代・平安時代・中世
遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・畝跡・土坑・柱穴
遺物 土師器・須恵器・青磁・土製品・石製品・木製品（文化財認定箱数：15 箱）



遺跡位置図（1：50,000）



写真1 調査区遠景（南西から）

調査の概要

今年度は、東北中央自動車道建設に伴う馳上遺跡第4次調査と同時に、追加インターチェンジ建設に伴う馳上遺跡第5次・西谷地b遺跡第3次調査も並行して実施した。調査区の大部分は西谷地b遺跡の範囲に該当する。

馳上遺跡の北側に隣接する西谷地b遺跡は、南側でこそ奈良・平安時代の遺構・遺物も目立つが、遺跡の中心時期は中世に帰属する。平成21年度の第1次調査では、多数の柱穴群を濠が取り囲む武家屋敷が確認され、さら

に翌年の調査では屋敷地を区画する溝跡から伊達家の家紋が入った漆椀など、当時の暮らしぶりを伝える様々な遺物が発見された。今年度は、馳上遺跡北端を含む南北に細長いA区とB区、および馳上遺跡第1次調査が行われた県道1号沿いのC区、馳上遺跡南端に位置するD区の計4ヶ所を調査した（馳上遺跡第4次の図1参照）。

遺構と遺物

A区では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑・柱穴など多様な遺構が検出された。竪穴住居跡の

うち、全形のわかるものは調査区中央付近で重なって見つかった2棟のみで、とくに約3m四方の住居跡からは古代の土師器長胴甕などが土圧で押し潰された状態で出土した(写真2)。また調査区北端では、重複する竪穴状遺構が確認された。調査範囲が狭いため詳細は不明だが、5世紀末葉前後の土師器高坏・埴などが出土し、西谷地b遺跡第2次調査区西側の河川跡を含め、遺跡形成期の遺構・遺物が集中するエリアの一つとして注目される。

竪穴住居跡の南側では、9世紀代の総柱建物跡(2×2間)と側柱建物跡(3×3間)を確認した。とくに側柱建物跡の柱穴には、一部を打ち欠いた内黒の有台皿を柱穴の中ほどに水平に埋めたものもあり、建物廃絶後に柱を引き抜いて土器を埋納した痕跡と考えられる。

東側のB区は、古代の土器を包含する河川跡が大部分を占め、完形に近い甕の羽口も出土している(写真3)。西谷地b遺跡や馳上遺跡では焼土・炭化物を多く含む土坑が確認されており、羽口はこうした焼成遺構で鍛冶を行う際に使用された後、廃棄されたものと考えられる。



写真2 A区竪穴住居跡 遺物出土状況(北から)

河川跡の堆積土上には小型の柱穴が多数認められ、その柱穴群を区画するように走る溝跡から内耳土鍋や下駄、漆器などが出土した。平安時代までに埋没した河川跡の上に中世の屋敷地が営まれたものと判断できる。

C区では小型の柱穴や畝跡など中世以降と考えられる遺構が密集して検出されたほか、調査区北東隅において竪穴住居跡が部分的に確認された(写真4)。床面上で出土した須恵器坏などから、9世紀前半に位置づけられる。

馳上遺跡範囲南端のD区では河川跡・溝跡・土坑・柱穴が検出されたが、遺物の出土量はごくわずかで、平成21・22年度に行われた西側隣接地区の調査成果と同様、生活の痕跡が希薄である点を追認した(写真5)。

まとめ

今回の調査によって、西谷地b遺跡の中世の遺構は遺跡範囲の北側および東側に中心があり、北西側には古墳時代中期末～後期初頭の集落が展開したことが把握できた。また馳上遺跡南側の集落の様相についても過年度成果を追認・補強する材料が得られたと言える。



写真3 B区河川跡出土 甕羽口



写真4 C区全景(東から)



写真5 D区河川跡(南東から)

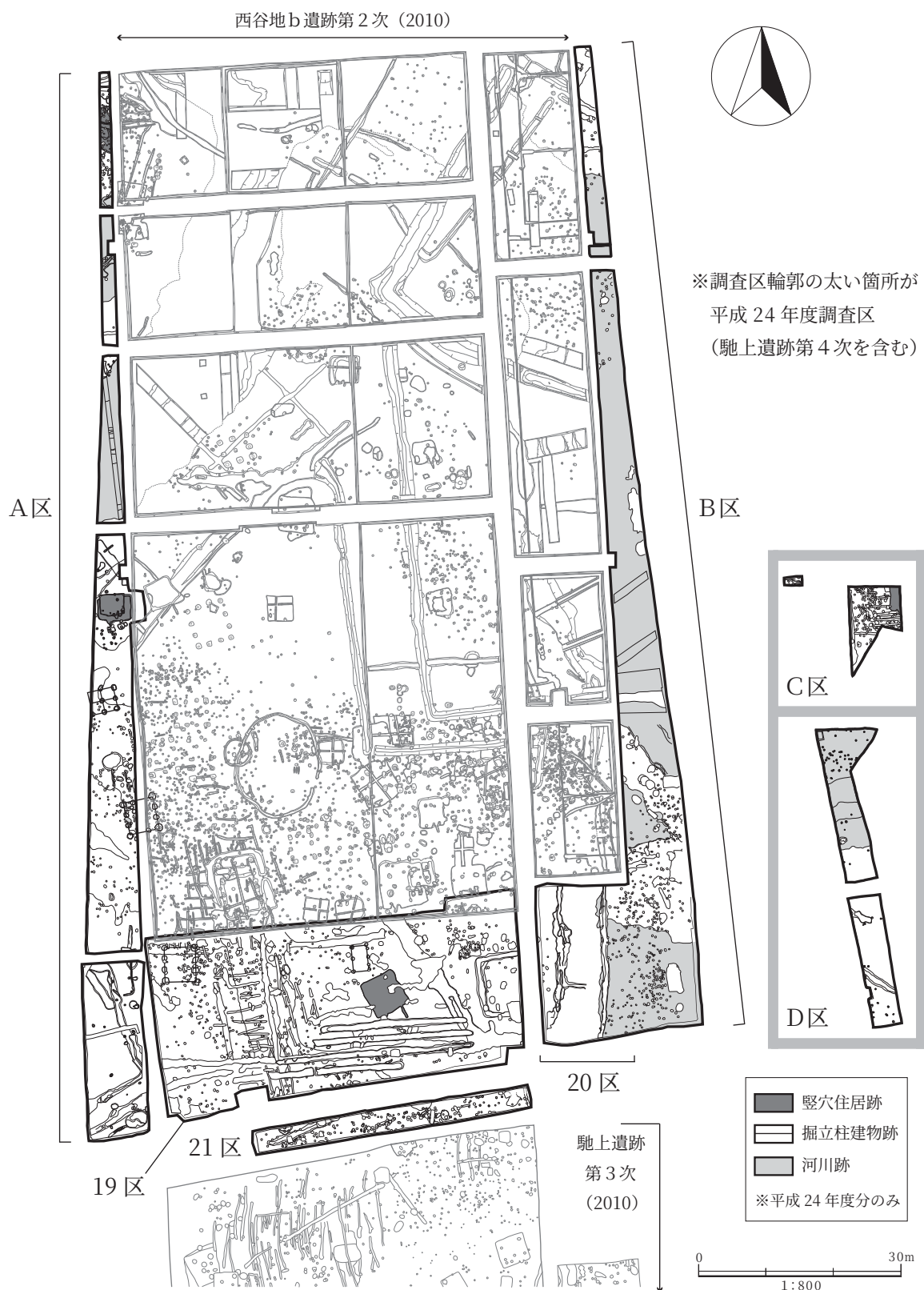
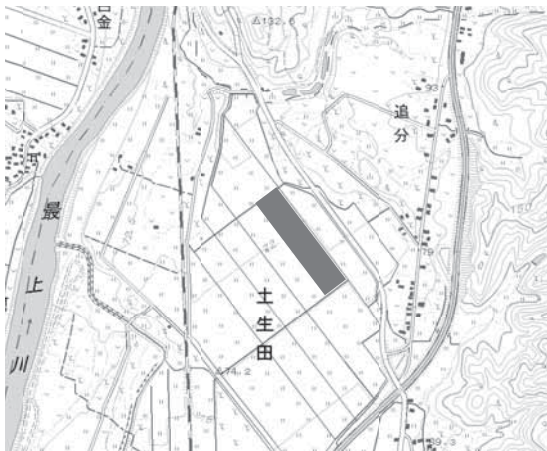


図1 遺構配置図（1：800）

森の原遺跡（第3次）

遺跡番号 208-048
調査回数 第3次
所在地 山形県村山市大字土生田字鼠田
北緯・東経 38度33分34秒・140度23分53秒
調査委託者 山形県村山総合支庁建設部北村山道路計画課
起回事業 道路改良事業 一般道大石田土生田線
村山大石田インターチェンジ設置工事
調査面積 2,000 m²
受託期間 平成23年5月7日～3月29日
現地調査 平成23年7月2日～9月14日
調査担当者 大場正善（現場責任者）・岩崎恒平
調査協力 国土交通省・NEXCO 東日本・村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 縄文時代・平安時代・中世
遺構 土器片集中・河川跡・土坑・湿地跡
遺物 土師器・須恵器・縄文土器・石器・陶磁器・古銭（文化財認定箱数：4箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

森の原遺跡は、村山市北部の土生田字鼠田に所在する。遺跡から西約1.2km離れたところには、最上川が流れている。地形的に遺跡は、山形盆地の北端、最上川の三難所よりも下流に発達する氾濫原の中に立地している。

今回の調査は、平成22～23年度の調査区の東西に隣接し、インターチェンジを設置する2か所（1区、および2区）、約2,000 m²が対象となる。なお、隣接する平成22年度の1次調査は、本線部分に沿って走る取り

付け道路部分、そして平成23年度の第2次調査は、高速道路本線部分となる。

遺構と遺物

2区の北側では、黒色粘土（黒色の泥）が堆積した湿地跡が発見され、11世紀後半の北宋で発行された「元祐通寶」という古銭が1点出土した。2区の北側、湿地跡の下に、915年に十和田湖から噴出した灰白色火山灰（To-a）と考えられる火山灰をはさむ、小規模な河川跡（SG1011）が発見された。また、2区の中央部では、幅約2m、深さ約1mほどの鍋底状を呈した大きな土坑が3基発見された。

さらに遺跡全体を覆う堆積層からは、最上川の氾濫によって押し流されてきた土砂（泥流）が重なっているのが確認された。1区の南側では、土砂堆積の1つである黒色土層の中から、縄文時代晩期に位置づけられる土器片や破損した磨製石斧など、多数の遺物が狭い範囲で分布しているのが発見された。また、2区の南側では、珪質頁岩製の石のカケラや石器未製品、玉髄製石鏃が出土した。遺物が出土した地層は、氾濫によって堆積したものであり、遺物が集中している場所の近くには、住居跡などの遺構があった可能性がある。

八反遺跡 (第2次)

遺跡番号 211-029
調査回数 第2次
所在地 山形県東根市大字長瀬字八反
北緯・東経 38度28分9秒・140度21分33秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道(東根～尾花沢間)
調査面積 8,550 m²
受託期間 平成24年4月6日～平成25年3月29日
現地調査 平成24年5月14日～12月20日
調査担当者 高桑登(現場責任者)・高橋敏・小笠原伊之・江波大・長谷部寛・高柳俊輔・板橋龍
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・水土里ネット東根村山・東根市教育委員会・村山市教育委員会・村山教育事務所・山形県教育委員会

遺跡種別 集落跡

時代 縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世

遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱穴

遺物 土師器・須恵器・石製品・陶磁器・金属製品・古銭・石器 (文化財認定箱数: 150箱)



遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

八反遺跡は最上川右岸の自然堤防上に位置する。遺跡周辺の果樹園や畑、水田の地割には最上川の旧河道の痕跡が残されており、一帯が最上川の氾濫原であったことがわかる。旧河道に沿って沼袋遺跡、長瀬本橋跡等、古代から中世の遺跡が分布している。地元の伝承では、遺跡の周辺に壇状の地形が8箇所あったとされ、「八反」の地名の由来となっている。

調査区中央を横断する農道より南をA区、北をB区

としている(図1)。平成23年度にA区1面、平成24年度にA区2・3面及びB区1面の調査を実施した。平成25年度にB区2面の調査を実施予定である。

遺構と遺物

昨年度の調査で、A区1面は中世後期の墓域であったことが確認されている。今年度の調査でB区1面(写真3)でも集石遺構や板碑を廃棄した土坑(写真6)などが見つかり、遺跡北半部のB区まで墓域が広がることが確認された。A区北端部及びB区全域には礫層が分布し、礫層上面で中世後期の遺構を確認している。

A区2面では調査区南端部の河川跡に沿った微高地上に古墳～平安時代の遺構が分布している。A区北東部には中世前期の遺構が多く分布する。古墳～平安時代と中世の遺構分布域の間はやや低地となり、遺構が希薄である(図2・写真3)。

中世前期の遺構では溝、柱穴、井戸等が見つかった。溝は幅約2m、深さ1m以上、長いものでは長さ90mと規模が大きい。北側で確認された直角に曲がる溝の内側及び周辺からは多数の柱穴や井戸が見つかっており、溝に囲まれた屋敷地の存在が想定できる。溝や井戸からは中世前期の遺物が出土している。

SD3084 溝は河川跡付近で幅約 5 m、深さ約 2.5 m と掘り広げられており（写真 7）、その底面からは手づくねかわらけ、須恵器系陶器、白磁等、12 世紀頃の遺物が出土している。

古墳～平安時代の遺構は、河川跡に沿った微高地上に多く分布し、重複が著しい（写真 8）。平安時代の竪穴住居は掘り込みが浅いものが多いが、奈良時代の竪穴住居は遺存状況が良好で、カマド周辺から多くの遺物が出土する（写真 9）。古墳時代は遺物が多く出土するものの、遺構は明確ではない。古墳時代の竪穴住居と考えられる遺構から勾玉や管玉、白玉、石製模造品等（写真 11）が出土している。未製品や石材も出土しており、石製品製作遺構の可能性がある。

平安時代の竪穴住居から子持須恵器（写真 12）が出土している。古墳の副葬品として出土する例が多いことから、河島山古墳等、周辺の古墳との関連が伺える。

第 2 面の下約 80cm の深さで縄文時代の遺構面が確認されている。土坑、溝、石器の集中地点（写真 13）等が見つかった。その他、石錘、石皿等が出土している。土器の遺存状態が悪く時期は明確でないが、石器の形態等から縄文時代早期の可能性がある。

まとめ

今回の調査では、縄文時代から中世前期までの遺構、遺物が見つかった。

縄文時代は石錘の出土等から、漁労に関わる小規模な集落であったと考えられる。古墳～平安時代の集落は、河川沿いの狭い微高地に展開していた。中世前期になると、大規模な溝の掘削によって遺跡北半の低地に居住域が広がり、屋敷地が営まれる。その後、遺跡の北半部に



写真 1 遺跡遠景（北から）



写真 2 遺跡近景（南から）

分布する礫層の存在から、この地を洪水が襲った可能性がある。

洪水後の中世後期には、人々の生活の痕跡は希薄になり、この一帯は墓地として利用されることとなる。

近世の遺構や遺物は確認されていないことから、墓地も中世には廃絶し、その後は耕作地として利用されたと考えられる。



図 1 調査区概要図（1/5,000）

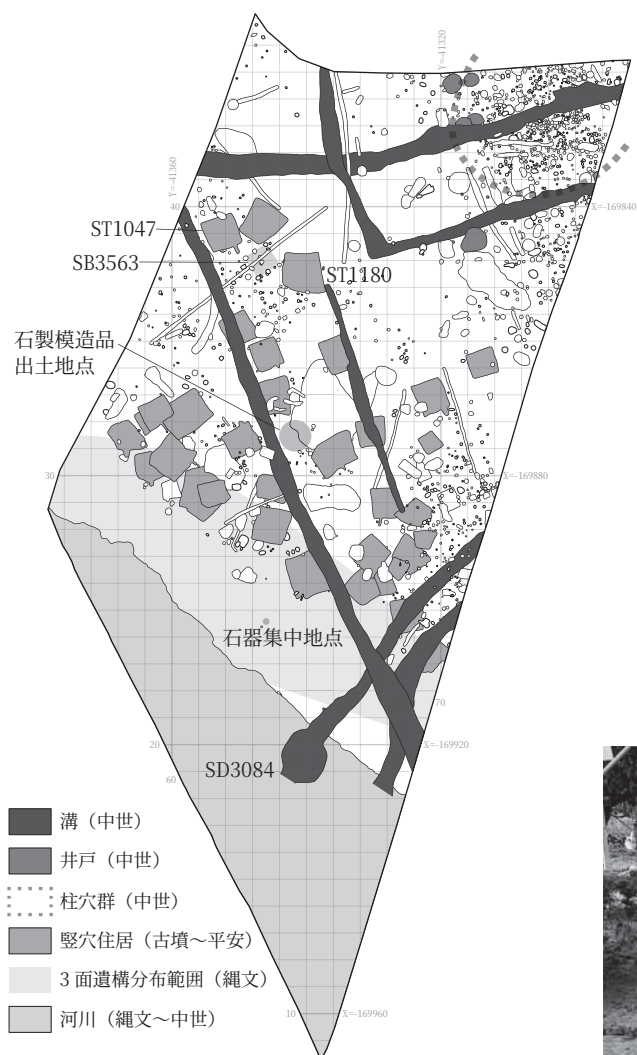


図2 A区2面遺構配置図 (1/1,000)



写真3 B区1面完掘状況 (上が北)



写真4 A区基本層序 (東から)



写真5 A区2面調査状況 (南西から)



写真6 SK2218 板碑出土状況（南西から）



写真10 SB3563 掘立柱建物（西から）

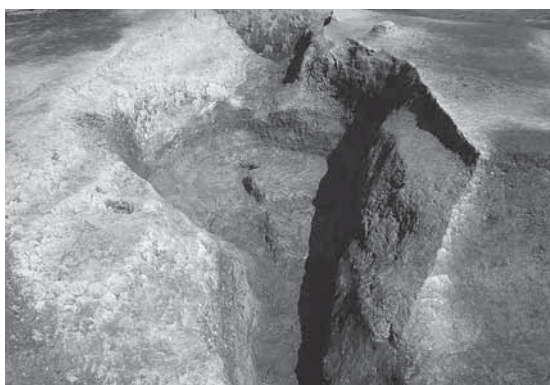


写真7 SD3084 溝と河川跡の接続部（南西から）

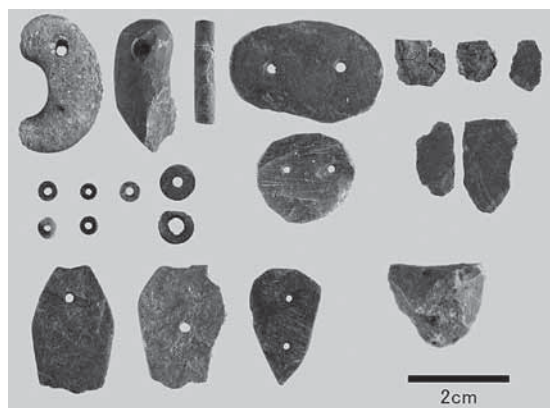


写真11 勾玉・管玉・白玉・石製模造品



写真8 A区2面 竪穴住居重複状況（西から）

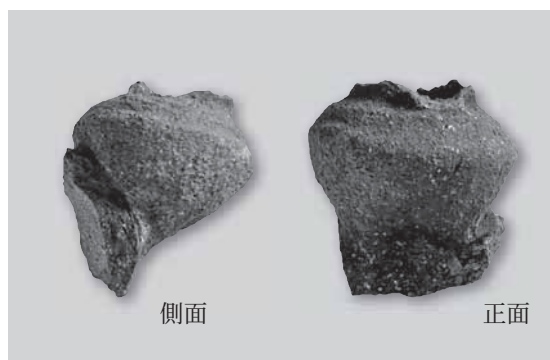


写真12 ST1180 出土子持須恵器（原寸大）



写真9 ST1047 竪穴住居カマド周辺（東から）



写真13 A区3面 石器集中地点（南から）

せみた 蟬田遺跡

遺跡番号 208-151

調査回数 第1次

所在地 山形県村山市西郷

北緯・東経 38度29分45秒・140度22分13秒

調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所

起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）

調査面積 6,000 m²

受託期間 平成24年4月6日～平成25年3月29日

現地調査 平成24年5月22日～11月30日

調査担当者 齊藤主税（現場責任者）・庄司昭一・吉田満

調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山東根土地改良区・村山市教育委員会・
山形県教育庁村山教育事務所

遺跡種別 集落跡

時代 奈良時代・平安時代・近現代

遺構 掘立柱建物跡・柱列・河川跡・溝跡・土坑・柱穴

遺物 土師器・須恵器・縄文土器・陶磁器・石製品・木製品・金属製品・種子（文化財認定箱数：121箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

蟬田遺跡は村山市名取西郷地区に所在する。遺跡の西側には、最上川と蟬田川が蛇行しながら流れる。周辺の地形は沖積地で水田が広がる。また、遺跡南西地区にあるうきぬま浮沼という地名の通り、地盤が沼のように緩い場所に遺跡が立地している。

東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に伴い、工事に係る約6,000 m²（南北100 m×東西60 m）について調査を行った。



図1 調査概要図（縮尺任意）

遺構と遺物

遺構は掘立柱建物跡・柱列・河川跡・溝跡・土坑・柱穴等で平安時代の遺構が主体で、遺物も同時期の遺物が多く出土した。僅かに縄文時代・奈良時代・近世の遺物も出土している。

掘立柱建物跡は、柱間2間×2間の総柱建物跡1棟(SB70)、2間×2間の側柱建物跡(SB26・SB84)と想定される2棟の計3棟が検出された。柱穴の規模・柱列の軸線共に違いがあり、時期差があると想定される。SB26の柱穴の掘り方から白い火山灰が検出された。これは青森県と秋田県の県境にある十和田火山が噴火した際(西暦915年)の火山灰の可能性があり、本建物跡が西暦915年以降に建てられたことが想定される。

柱列は2列(SA18・SA83)確認された。SA18はSB26の西側に隣接し、柱列の軸線もほぼ同じだが、柱穴の平面形・柱間に若干違いがみられる。SB26に伴う施設かは不明である。SA83はさらに西側にあり、南北方向に並ぶ6基の柱穴から構成される。直径約50cmの柱穴が約1.6mの間隔で規則的に並んでいる。柱穴の規模・間隔から推測する限り、柵のような施設が考えられる。

河川跡は東西方向に流れるSG6と南北方向に流れるSG50の2条確認された。調査区東側で隣接し、共に調査区外へと続いている。SG6は幅約5～8m、深さは最深部で約2mの大きな河川跡で、東から西へ流れている。土層断面を観察すると、十和田火山灰と考えられる堆積と、それより新しい流路の存在が確認できた。つまり、915年以降も流れていたことがわかる。また、砂層からは土師器・須恵器等の土器と多種の木製品が多く出土した。僅かに川底から縄文時代の土器・石器も出土している。SG50は北から南へ流れている。SG6と同時期に流れていたかは定かではないが、最終の流路ではSG6の方が長く流れていたことがわかる。出土遺物はSG6に比べ極端に少ない。

土器は土師器の出土量が多く、須恵器は少量である。その中でも完形の土師器杯の出土数が多いことが特筆される。また、土師器杯の体部に「定」と墨書される土器(写真7)や、底部に網代の痕跡が残る土器(写真8)も確認されている。河川跡確認面では僅かに灰釉陶器も出土している。

木製品は、齋串・人形・鳥形等の形代(写真9)、荷札状木製品、篋・柄・鋏先・横槌等の農具、横櫛、檜扇、下駄、木器、曲物、木錘、端部が焦げ付いた棒状・板状木製品等が多種出土している。その中でも、形代の出土は県内でも希少で特筆される遺物である。それらは主に水辺で行われる「祓い」という祭祀儀式に用いられる道具である。穢れや罪を水に祓い流す目的で使用されたとされている。

SG6の年代は、奈良時代の遺物が含まれているが、主に平安時代前期頃(9世紀～10世紀前葉)と想定される。

溝跡は平安時代と近世～近代の2時期ある。SD3からは平安時代頃の土師器・須恵器等の土器、SD69からは近世の陶磁器と現代のガラス製品等が出土している。

土坑は15基ほど確認された。調査区北東側に、南北約3～4m×東西約1.5mの規模の土坑が3基並んで検出され、大量の炭化物・火山灰・土器片が伴う(写真3)。他にも炭や焼土が多量に混入する土坑が調査区北東部分に多く確認された(写真5)。近接するSG6から火を付ける付木や焼痕のある木製品が出土することから、「火」を取り扱う何らかの行為が執り行われたことが考えられる。また、須恵器大甕が意図的に埋設された可能性がある土坑(写真4)もSG6周辺で検出された。

まとめ

今回の調査では、奈良・平安時代と近世～近代の遺構・遺物が確認された。比較的、生活に直接関連する住居跡等の遺構が少ないことや立地等から推測する限り、少なくとも「居住」を目的とした場所(集落)ではなく、違う目的で利用されたと考えられる。SG6から形代等が出土したことで、祭祀行為に関する場所と想定される。

遺物は奈良・平安時代の土器や木製品等がコンテナで約120箱以上となった。SG6出土遺物は、総数の2/3以上を占める。ほぼ完形の土器や多量の木製品が見つかり、その中でも県内では希少な齋串・人形・鳥形・檜扇等の祭祀遺物(木製品)が特筆される。また、河川跡も含め多くの遺構から、十和田火山灰と思われる堆積が確認され、火山灰が降灰する前後に遺跡が営まれていたことがわかる。



写真1 SG6完掘状況(西から)



写真2 SG6土層断面(西から)

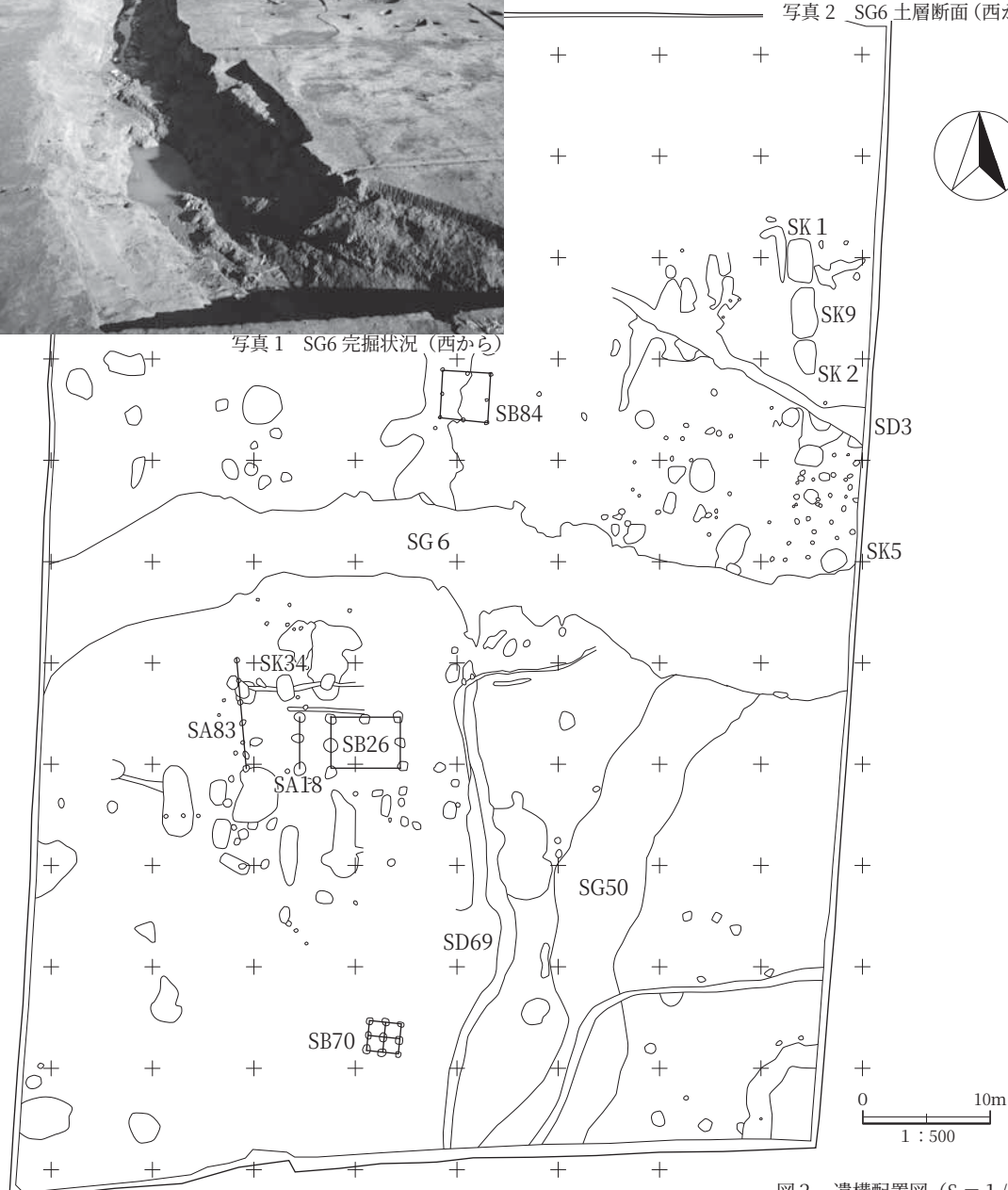


図2 遺構配置図 (S = 1/500)



写真3 SK9 遺物出土状況（東から）



写真4 SK34 須恵器甕出土状況（北から）

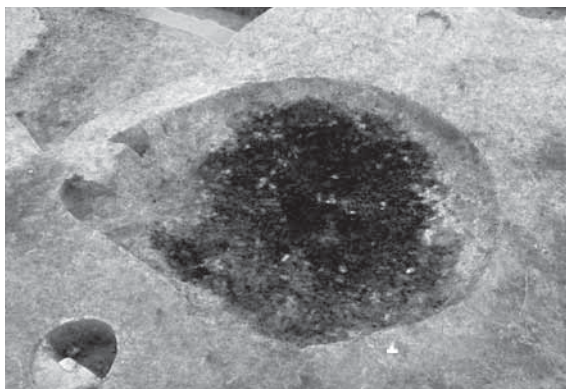


写真5 SK5 炭化物検出状況（南から）



写真6 SA18・SB26 完掘状況（北から）

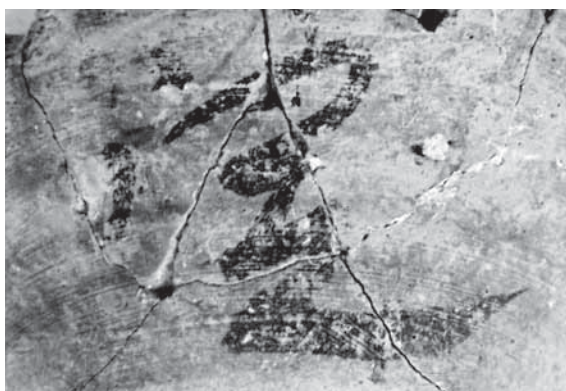


写真7 墨書土器「定」-土師器坏体部



写真8 網代痕-土師器坏底部

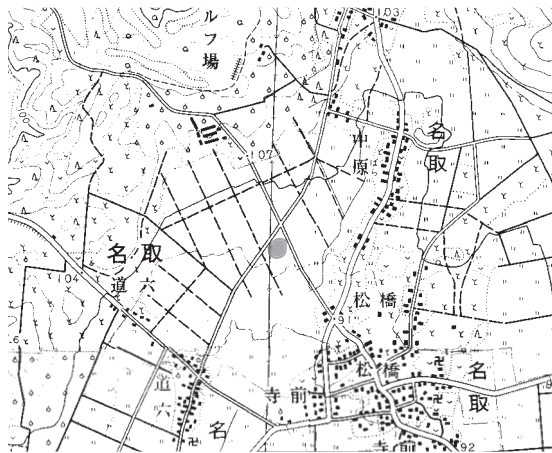


写真9 出土木製品（人形 / 鳥形）

たむかい 田向 2 遺跡 (第 2 次)

遺跡番号 208-127
調査回数 第 2 次
所在地 村山市名取字田向
北緯・東経 38 度 30 分 18 秒・140 度 22 分 12 秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道 (東根～尾花沢間)
調査面積 2,300 m²
受託期間 平成 24 年 4 月 6 日～平成 25 年 3 月 29 日
現地調査 平成 24 年 5 月 23 日～8 月 10 日
調査担当者 菅原哲文 (現場責任者)・安部将平
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山東根土地改良区・村山市教育委員会・
村山教育事務所

遺跡種別 集落跡
時代 平安時代
遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱穴
遺物 土師器・須恵器・陶磁器 (文化財認定箱数: 5 箱)



遺跡位置図 (1:25,000)

調査の概要

田向 2 遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地との境にある、河島山段丘の南麓につながる低地部に立地する。平安時代の集落跡と考えられる遺跡である。東北中央自動車道 (東根～尾花沢間) に伴う発掘調査で、平成 22 年度に第 1 次調査 2,500 m²を実施した。今年度の第 2 次調査では、第 1 次調査区 (1・2 区) に隣接する約 2300 m²を対象とした 3・4・5 区を設定し、5 月中旬から 8 月上旬にかけて調査を行った。

遺構と遺物

調査区は、戦前に行われた開墾や昭和 41～43 年に行われた圃場整備により、攪乱・削平された部分は認められたが、平安時代を中心とする遺構・遺物を検出した。

3 区は、掘立柱建物跡が 4 棟、土坑、柱穴などを検出した。SB25 掘立柱建物跡は、間取りが桁行 3 間、梁行 2 間、総長 7m × 4.8m となる。SB36 掘立柱建物跡は、間取りが桁行 3 間、梁行 3 間の総柱建物と考えられる (写真 1)。東西 8m、南北 8.2m、柱の間尺は 2.5～2.7m を測る。また、SB25・36 は南北の主軸がほぼ揃っていることから、同時期に存在していた可能性が高いと考えられる。土坑は、SK53・54などを検出した。両土坑は 3 区南東隅に位置し、円形で直径約 75～100cm、深さ約 40cm である。覆土は廃棄によって人為的に堆積した様子が認められ、土師器がまとまって出土した。特に、SK54 からは、完形の土師器坏が出土している (写真 2)。

その他、遺構出土ではないが、近世の陶器播鉢、肥前産の磁器碗なども出土している。

4 区は、溝跡、土坑などを検出した。SD60 溝跡は、幅 0.2～1.2m、長さ約 5m、深さ 5～40cm を測る。遺物がまとまって廃棄されており、土師器 (坏・皿・甕)、黒

色土器、被熱した礫が出土している（写真3）。また、SD60 から出土した土師器壺・皿は、口径に対して底径が半分以下で、器高が低い特徴をもつものが中心であり、これらは10世紀代の所産と考えられる。県内では、同時期と考えられる資料の出土例は多くはない。

5区は、調査区3・4区の間を通る農道を6m×21mの範囲で掘削した地区である。この5区からは、竪穴住居跡1棟（ST68）、溝跡などを検出した。ST68は、4.0m×6.5mの長方形を呈する竪穴住居跡である（写真4）。ST68に付属する施設は、住居南辺に構築されるカマド（EL79）、住居内壁面に沿う周溝（ED83）、貯蔵穴と考えられる土坑（EK84）などを検出した。遺物は、床面からは黒色土器壺、カマド付近からは、土師器甕や須恵器甕などが出土している。

まとめ

当遺跡は、掘立柱建物跡と竪穴住居跡から構成される平安時代を中心とした集落跡である。掘立柱建物跡は、建物の軸線が異なる2つのグループが認められ、時期差が想定される。溝跡や土坑群からは、県内では出土例が

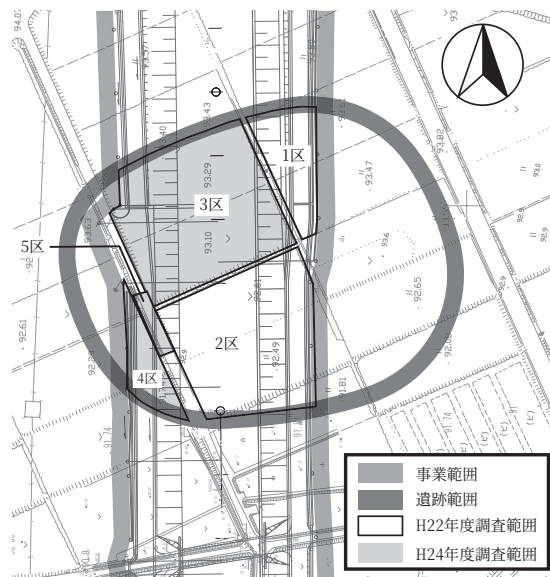


図1 調査区概要図（1：3,000）

少ない10世紀代の土師器がまとめて出土した。村山地方の10世紀代（平安時代末期）の集落跡を解明する上で、良好な資料と言える。



写真1 3区 SB36 完掘状況（東から）
※人が立っている所が柱穴の跡



写真2 3区 SK54 遺物出土状況（北西から）



写真3 4区 SD60 遺物出土状況（東から）



写真4 5区 ST68 完掘状況（北西から）

清水西遺跡

遺跡番号 208-158
所在地 山形県村山市大字名取字清水西
北緯・東経 38度51分35秒・140度37分10秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）
調査面積 2,800 m²
受託期間 平成24年4月6日～平成25年3月29日
現地調査 平成24年5月23日～11月13日
調査担当者 植松暁彦（現場責任者）・尾形知哉
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所・山形県教育委員会
遺跡種別 包含層・集落跡
時代 旧石器時代・縄文時代・平安時代
遺構 土坑・谷跡（縄文時代・平安時代）
遺物 石器・縄文土器・土師器・須恵器（文化財認定箱数：22箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

清水西遺跡は、山形盆地北端の河島山丘陵北の、平野部から比高差約40mの小丘の山頂に立地する。今調査は、東北中央自動車道（東根～尾花沢）にかかる名取地区の発掘として、平成23年に県教育委員会の試掘調査により遺跡の存在が確認され、今年本調査を行った。

調査では、山頂部の表土が薄いことから手堀りによる表土除去を行い、調査区西・南側に古代の隠れ谷（SG1）の存在から一部重機なども用いた。その後、上層（III

層上位の直上面）の遺構検出・精査に努め、縄文時代や平安時代の遺構・遺物が単発的に確認した。

次に下層の旧石器時代を調査区東側を中心に、山頂部や斜面部では深さ20～40cmの深さで石器が出土した。山頂部の石器が集中する範囲は移植ベラ、分布の薄い斜面部は角スコップなどを用いて、石器の出土層位を確認するため土層ベルトを残し掘り下げた。石器は、層位や位置を記録し、石器群のまとまりであるブロック群の成り立ちを詳細に調査した。層序は、上から順にI層が黒土の現表土、II層が黒砂（縄文・平安時代）、III層上位が黄色砂の肘折火山灰（約1万年前）、III層中・下位が黄色土（旧石器時代の火山灰等）で石器が多く出土する。

遺構と遺物

上層（平安時代・縄文時代）

平安時代：小土坑と谷跡などから須恵器坏や土師器甕が出土した。概ね9世紀前半（1200年前）と考えられる。

縄文時代：表土や小判型の土坑から縄文土器や石器が出土した。土器の微隆起線状の文様から、県内でも数少ない関東地方の野島式併行期の早期後葉（約6,000年前）と推測された。他に黒曜石製の石鎌や頁岩製の石ベラ、一般に集落遺跡で出土する凹石が多く出土した。



写真1 調査区全景（北から。写真奥が村山平野）

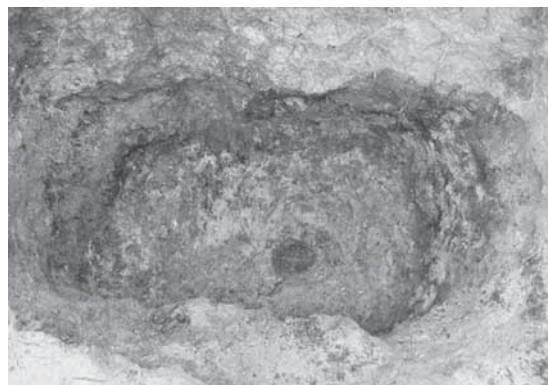


写真2 SK201土坑(落とし穴)完掘状況(南から)



写真3 出土した縄文土器

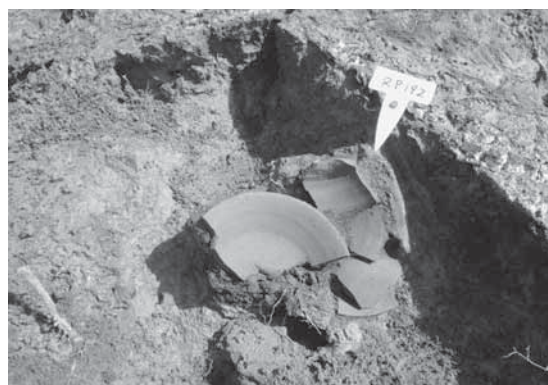


写真4 SP9ピットの須恵器の土器の出土状況(南から)

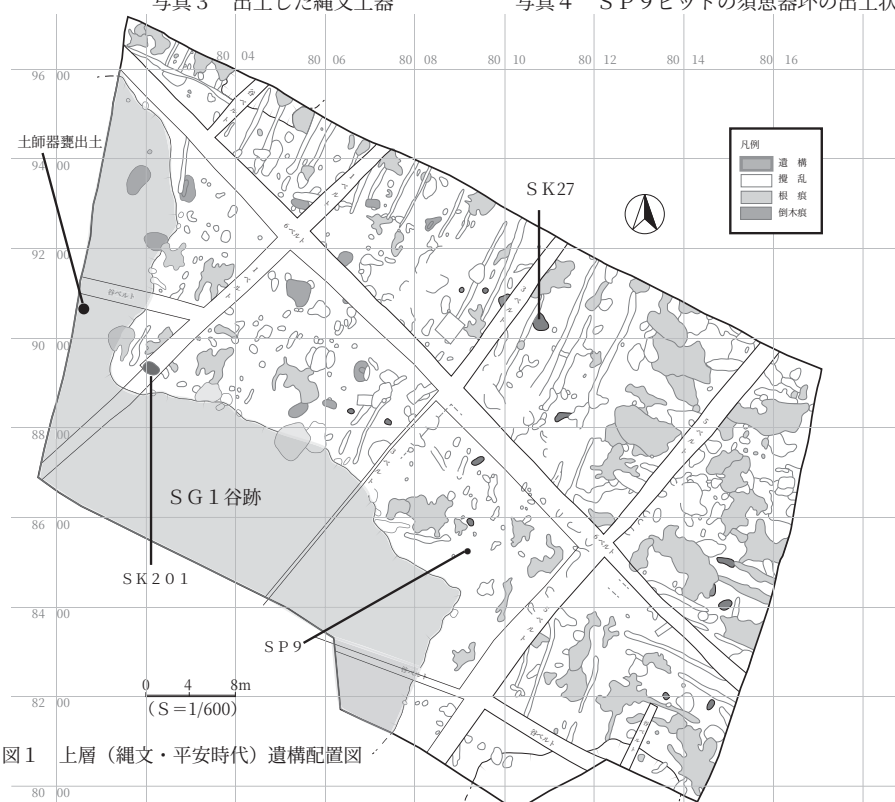


図1 上層（縄文・平安時代）遺構配置図

下層（旧石器時代）

旧石器時代の石器は、主に調査区東側で発見された。石器は、山頂部に直径 15 ～ 20 m の円形状の範囲で集中域があり、斜面部でも単発的に出土する。

出土層位は、Ⅲ層上位から出土し始め、Ⅲ層中位で石刃やナイフ形石器の大形の石器群が安定して出土し、Ⅲ層下位では剥片や碎片など小形の石器が多く出土した。

石器の石材は、県内で多く採取される頁岩が大半で、他に鉄石英や黒曜石などが若干認められる。

石器の種類は、主に狩りや加工具として使われた道具と、その道具を作る際に生じる石器のカケラである大小の剥片・碎片、その残核（石核）などがある。

道具となる石器では、表土出土ながら当該期と考えられる木材の加工用で刃部などを磨いた局部磨製石斧、切り出しナイフに似る台形石器、小形の矩形石器の端部に二次加工を施したものなどが少量出土した。また、縦に長く鋭い刃部をもつ石刃や、それを素材として基部に刃潰し加工を施したナイフ形石器も多数出土し、幅広厚手の形態から後期旧石器時代前半期の中でもやや新しい時期（約 3 万年前）のものと考えられる。

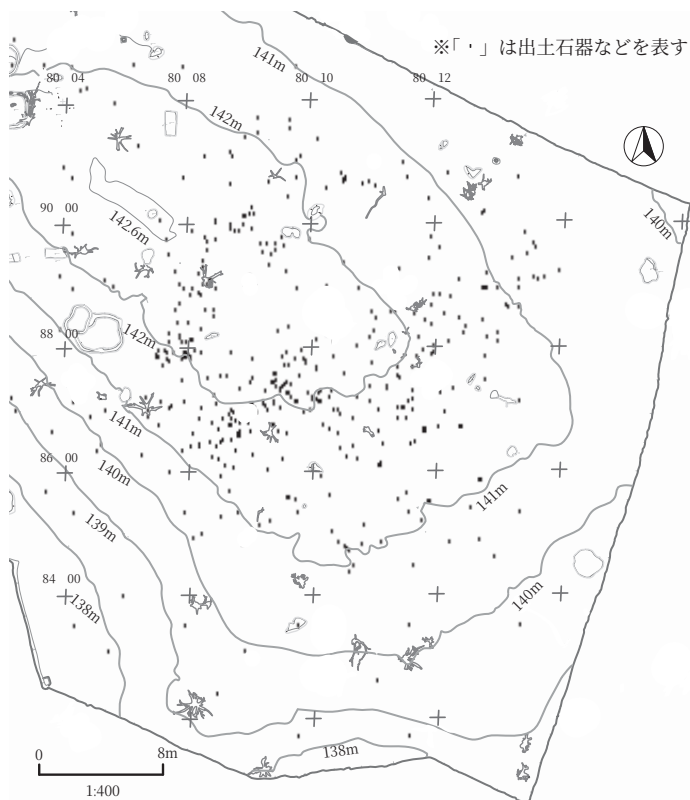


図2 下層（旧石器時代）の遺物平面図と標等高線

まとめ

本遺跡の上層は、最も新しい平安時代（約 1,200 年前）の土坑や谷跡、縄文時代早期（約 6,000 年前）の落とし穴などが単発的に確認され、キャンプ地などに断続的に利用されていたことが分かった。

下層の旧石器時代の石器群は、県内でも数少ない後期旧石器時代でも最古段階の一群と考えられる。後期旧石器時代前半期（約 3 万～3 万 5 千年前）特有の局部磨製石斧（県内初出）、台形石器、ナイフ形石器の 3 器種が、県内で初めてそろって出土した。また、今回の面的な調査により、500 点以上の石器が狭小な地形に制約を受けながらも、幾つかのまとまり（ブロック）をもって出土し、当時の石器製作などの場の利用がうかがえる。

本遺跡の南・東の眼下には、氷河時代には湿地帯や湖水だった村山平野が一望できる。ナイフ形石器や石刃など道具類やその素材が多く、石器製作にかかる剥片などが少ないという石器組成から、本遺跡は遊動生活をして旧石器人の狩りの際の拠点であったと考えられる。

今回の調査により、隣県の出土資料との比較が可能となり、当該期の貴重な研究資料になるものと思われる。



写真5 ナイフ形石器の精査状況（東から）



写真6 同上出土状況と層位（東から）



写真7 下層（旧石器時代）山頂の石器出土状況（西から）



写真8 下層（旧石器時代）の精査状況（東から）



写真9 出土石器のまとめり（ブロック）状況（東から）



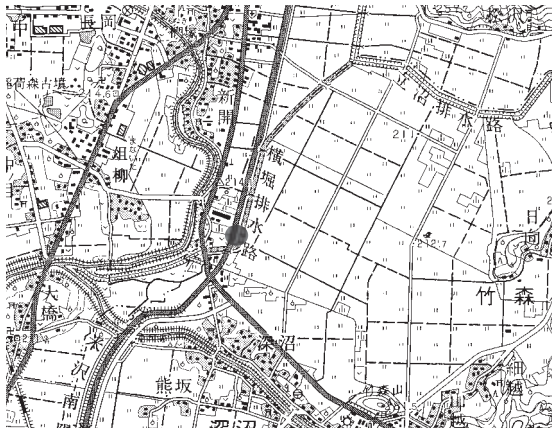
写真10 出土したナイフ形石器・石刃



写真11 出土した局部磨製石斧（左）と台形石器（右）

おんだし 押出遺跡（第5次）

遺跡番号 381-313
調査回数 第5次
所在地 山形県東置賜郡高畠町大字深沼字押出
北緯・東経 38度1分47秒・140度10分16秒
調査委託者 山形県教育委員会
起回事業 農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所 国営かんがい排水事業（米沢平野二期）
調査面積 525 m²
受託期間 平成24年6月1日～平成25年3月31日
現地調査 平成24年10月15日～12月20日
調査担当者 水戸部秀樹（現場責任者）・大場正善・伊藤大介・岩崎恒平
調査協力 高畠町教育委員会 農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所
遺跡種別 集落跡
時代 縄文時代
遺構 炭化物集中地点・石器集中地点・窪地・打ち込み柱・柱穴
遺物 縄文土器・石器・石製品・木製品・漆器・彩漆土器・クッキー状炭化物・種子・骨（文化財認定箱数：172箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

押出遺跡の発見は、1971年に沼尻堀の掘削後の排土から土器や石器が拾い上げられたことが契機となった。遺跡は^{おおやち}大谷地と呼ばれる湿地帯に位置しており、国道13号建設工事を起因として、1985年から3カ年におよぶ発掘調査が実施され、大きな成果が得られた。地下2m下に特殊な構造をもつ住居群、通常の遺跡では残りにくい有機質遺物、^{さいしつ}彩漆土器や^{もくたい}木胎漆器などを始めとする貴重な遺構・遺物の数々が発見され、その重要性は

約1,100点の出土品が国指定重要文化財になったことからもうかがえる。国営かんがい排水事業の一環として計画された沼尻堀の改修工事にもない、昨年度実施した第4次調査においても住居4棟、窪地のほか、縄文土器、石器、木製品などが多数発見された。今年度の第5次調査はこれに継続するものである。

遺構と遺物

これまでに、第1～3次調査では住居跡39棟、集石遺構1基が検出され（図1・写真4）、昨年度の第4次調査でも堀の西岸部から盛土をもつ住居跡4棟と多数の遺物が検出された（図1・写真1・2）。住居1・2は大きさは違うが構造は同じである。盛土の下に転ばし^{ねだ}根太とよばれる丸太材を縦横に敷き詰めており、これは柔らかな地盤に住居を建てるための工夫と考えられる（写真1・2）。盛土には砂や粘土が交互に積み重ねられ（写真2）、盛土の周囲には壁柱と考えられる多数の柱が打ち込まれていた（写真1）。このことから、住居1・2は、15号住居跡（写真3）と同様、敷き詰められた^{ねだ}転ばし根太の周囲を、打ち込み柱の柱列が楕円形に巡る構造であったと考えられる。この構造を持つ住居は図2・写真4のように復元されている。

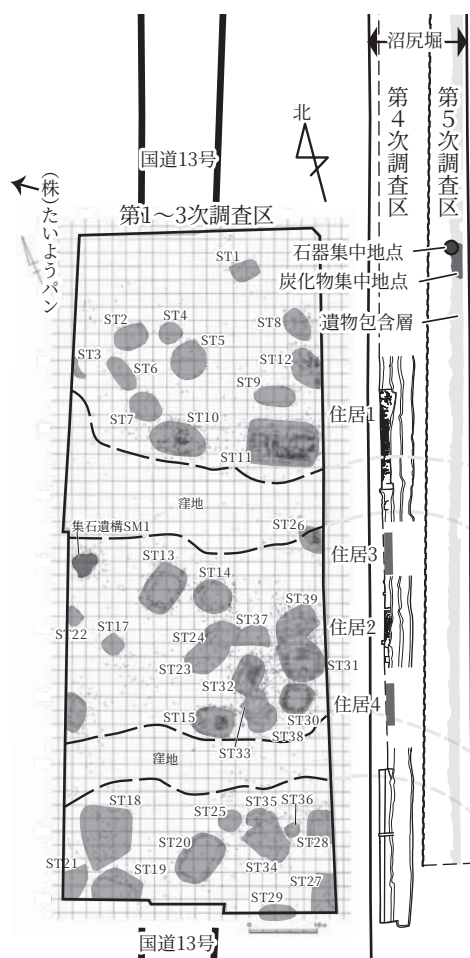


図1 調査区概要図 (1/1,000)



写真1 住居1 (第4次調査) 検出状況 (北東から)



写真2 住居1 (第4次調査) の盛土断面 (南西から)

今回の第5次調査では、調査区となった沼尻堀東側の堀底は遺跡の下まで掘削されており、ほぼ全て失われていたが、東岸部の斜面に位置する幅約1mの部分から、炭化物集中地点 (写真8)、石器集中地点 (写真9)、窪地が検出された (図1)。炭化物集中地点の範囲は南北約5mであり、その北側に石器集中地点が含まれる。住居跡は検出されなかった。

遺跡全体が厚さ約30～80cmの遺物包含層 (写真5) に覆われており、その中から遺物が出土した (写真6・

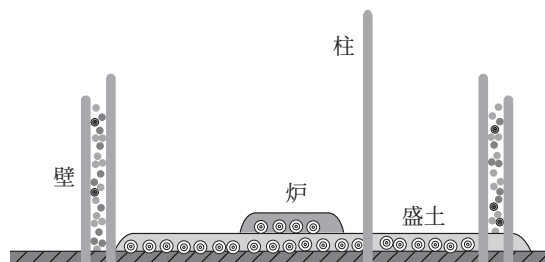


図2 住居下部構造模式図 (文献1より)



写真3 15号住居跡(第3次調査)(東から:文献1より)



写真4 20号住居跡(第2次調査)復元模型(文献1より)



写真5 遺物包含層検出状況(南西から)



写真6 遺物包含層出土の土器(西から)



写真7 遺物包含層出土の彩漆土器(西から)

7)。特に、第1～4次調査でも検出されている窪地の延長部から多く出土しており、この窪地は廃棄スペースとして利用されていた可能性がある。

遺物は縄文土器、石器、石製品、木製品などが出土した。土器は東北地方南部の土器型式である、粘土紐を貼り付けた曲線的な文様などが特徴の大木4式期のものと、爪型の工具で線を引いたり連続した点を打つ文様が特徴の新潟県の刈羽式に類するものが出土しており、人やモノの交流がうかがえる。また、彩漆土器は赤漆が塗られた

小型の鉢が1点出土した(写真7)。

石器・石製品は、石鏃、押出型ポイント、石匙、石錘、磨製石斧、石皿、玦状耳飾りなどが出土した。

押出型ポイント(写真10)は本遺跡で特徴的な石器であり、湿地に群生するヨシの刈り取りなどに使用されたと考えられる。玦状耳飾り(写真11)は軟玉製で、大変貴重な装飾品である。磨製石斧(写真10・11)は大型・小型のものが出土しており、それぞれ、木の伐採、細部加工などに使い分けがなされたと考えられる。

木製品は、皿状木製品やへら状木製品(写真12)が出土した。へら状木製品には石器による丁寧な加工痕が見られた。先端は矢印状に成形され、末端には持ち手と考えられる部位が作り出されていた。これらの他には、食料となったクルミの殻が大量に見つかった。

また、発掘調査時に炭化物集中地点から採取した炭を調査後に選別したところ、クッキー状炭化物(写真13)が発見された。クッキー状炭化物は堅果類を加工・調理した可能性がある、渦巻文を施した植物質炭化物で、1986年の第2次調査でも出土している。



写真8 炭化物集中地点(南から)



写真9 石器集中地点(西から)



写真10 左から大型石鏃、押出型ポイント(2点)、大型磨製石斧



写真11 左から塊状耳飾り、小型磨製石斧



写真12 ヘラ状木製品出土状況(西から)



写真13 クッキー状炭化物

まとめ

今回の発掘調査では、これまでで最も東側の調査区が設定された。住居跡は見つからず、遺物の廃棄スペースが広がっていることから、本調査区は集落の居住域から外れた場所だと考えられる。

これまでに見つかった遺構や出土品から、当時の押出遺跡の様子は図3のように想像されている。今後、当時の人々の生活をより明らかにしていくためには、湿地に適応した住居や石器などの出土品を手がかりとし、人々が積極的に湿地へと進出していった可能性を含め、当時の気候や湿地で得られる様々な資源などを広く検討していく必要がある。



図3 ある日の押出ムラ(文献1より)

引用文献 文献1 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
2007 『押出遺跡』

2. 普及・啓発・研究等業務

(1) 研修等

①全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣

ア 総会

期 日 平成24年6月21日～6月22日
会 場 千葉県千葉市（ポートプラザちば）
派遣職員 専務理事 三浦秋夫、総務課長補佐 須賀井新人

イ コンピュータ等研究委員会

期 日 平成24年7月19日～7月20日
会 場 茨城県水戸市（公益財団法人茨城県教育財団）
派遣職員 総務課長補佐 須賀井新人

ウ 研修会

期 日 平成24年11月8日～11月9日
会 場 富山県富山市（富山県民会館）
派遣職員 考古主幹 伊藤邦弘

エ ブロック活動

北海道・東北地区会議

期 日 平成24年10月18日～10月19日
会 場 福島県郡山市（郡山市民文化センター）
派遣職員 調査課長 斉藤敏行、総務課長補佐 須賀井新人

②埋蔵文化財担当者専門研修への派遣

ア 保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）過程

期 日 平成24年10月11日～10月19日
会 場 奈良文化財研究所
派遣職員 主任調査研究員 齋藤 健

イ 文化財写真課程

期 日 平成24年12月4日～12月14日
会 場 奈良文化財研究所
派遣職員 調査研究員 大場正善

ウ 報告書作成過程

期 日 平成24年12月14日～12月21日
会 場 奈良文化財研究所
派遣職員 調査研究員 渡辺和行

(2) 普及啓発

①普及啓発事業実行委員

企画情報室：向田明夫									
センター公開事業			ふるさと考古学講座				研修講座		
子どもミュージアム	センター参観デー	発掘調査速報会	遺跡から見た上山の歴史	遺跡を掘ってみよう	古代人のおしゃれ工房	バスで遺跡を見に行こう	市町村文化財担当者研修		
向田明夫	渡辺和行	菅原哲文	須賀井新人	高桑 登	水戸部秀樹	齋藤 健	植松暁彦	齊藤主税	
後藤枝里子	菊池玄輝	草野潤平	尾形知哉	市川光紀	小林圭一	氏家信行	川崎康永	大場正善	
五十嵐萌	江波 大	渡邊安奈	東海林弘和	後藤枝里子	原田英明	庄司昭一	小野健二	天本昌希	
	吉田 満		板橋 龍	山田和史	小笠原伊之	五十嵐萌	山木 巧	高橋 敏	
	濱田 純		高柳俊輔	伊藤大介	長谷部寛	安部将平	佐藤智幸	齋藤和機	
	岩崎恒平								
	高木 茜								
	山田めぐみ								

②センター公開事業

ア 「子どもミュージアム」

やまがたアートライン推進事業の「夏休み子どもミュージアムめぐり」の一環として、児童・生徒の夏季休業中に山形県内の遺跡から見つかった出土品を展示した。

期 間 平成24年 7月23日(月)～8月22日(水)

会 場 (公財)山形県埋蔵文化財センター

内 容 展示会：「ビーちゃんの生まれた縄文時代へタイムスリップ！！」

入場者数 87名

イ 山形県埋蔵文化財センター参観デー やまがた埋文祭り2012

センターを会場に、日ごろの業務の様子を再現したり、考古学の面白さを体験を通して紹介した。

期 日 平成24年 9月30日(日)

会 場 (公財)山形県埋蔵文化財センター

内 容 考古学体験：整理作業体験、特別収蔵室見学、石器作り実演
体験コーナー：勾玉作り、ビーちゃんクイズスタンプラリー

入場者数 約500名



スタンプラリー



トレース体験



昔風衣装で記念写真



「縄文の女神（レプリカ）」展



復元作業体験



石器作り実演

ウ 「平成24年度発掘調査速報会」

センターが平成24年度に発掘調査を行った遺跡のうち7遺跡の調査成果の速報会を行った。

期 日 平成24年12月16日(日)
 会 場 村山市総合文化複合施設 甌葉プラザ
 内 容 報告会：調査状況の写真をプロジェクターで紹介し、また出土品の展示も実施した。
 入場者数 約250名



調査遺跡の発表



出土品の展示・解説



③ふるさと考古学講座

ア 遺跡を掘ってみよう

期 日 平成24年6月3日(日)
 会 場 八反遺跡(東根市)
 内 容 遺跡の発掘体験
 参加者数 33名



イ 古代人のおしゃれ工房

期 日 平成24年8月11日(土)・12日(日)
 会 場 上山城
 内 容 まが玉作り体験・アンギン編み体験・弓矢体験・石器製作実演
 参加者数 44名(まが玉作り・アンギン編みのみ)



ウ バスで遺跡を見に行こう

期 日 平成24年10月13日(土)
 会 場 菅沢古墳群・大之越古墳・史跡嶋遺跡・西沼田遺跡公園・蔵増宮田遺跡 等
 内 容 遺跡・史跡や資料館をバスで巡る体験
 参加者数 29名



④研修講座

ア 市町村埋蔵文化財担当者研修

期 日 平成24年5月11日(金)・6月15日(金)
会 場 山形県埋蔵文化財センター・蟬田遺跡(本年度発掘調査現場)
内 容 発掘現場における実地研修を通して、市町村文化財担当者の埋蔵文化財に関する理解を深めると共に、発掘調査技術の向上を図る。
参加者数 延べ70名



⑤外部展示

「古代の祭祀―鶴岡市行司免遺跡・山形市今塚遺跡・遊佐町上高田遺跡―」展

期 日 平成24年6月1日～9月23日(休館日 毎週月曜日及び国民の祝日)
会 場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
内 容 「行司免遺跡」「今塚遺跡」「上高田遺跡」の古代祭祀に関する発掘資料の紹介(奈良平安時代の墨書土器、木簡及びその他の木製品、木棺墓、調査に関わる写真パネル等の展示)

日本一「さくらんぼ」祭り『縄文の女神(レプリカ)』展示

期 日 平成24年6月23日～6月24日
会 場 文翔館3階ギャラリー
内 容 祭りに協賛し、『縄文の女神(レプリカ)』を展示し、広く一般に国宝指定を紹介(『縄文の女神(レプリカ)』、西ノ前遺跡発掘調査紹介の写真パネル、遺跡及び遺物解説パネルの展示)

「西ノ前遺跡―『縄文の女神』がうまれたムラー」

期 日 平成24年12月28日～1月31日
会 場 山形空港2階特設ギャラリー
内 容 『縄文の女神』に対する興味をもっと広げてもらうと共に、土偶と一緒に出土した遺物を通して、西ノ前遺跡に対する理解を深めてもらう。(『縄文の女神(レプリカ)』、その他の土偶片、土器と、調査に関わる写真パネル等の展示)

「古墳時代のくらし」展

期 日 平成25年1月15日～2月15日(年中無休)
会 場 山形県身体障がい者保養所 東紅苑
内 容 古墳時代の人々のくらしのようすを示す服部遺跡・藤治屋敷遺跡等の出土品を紹介(土師器、木製品、まが玉、管玉、展示品に関わるパネル等の展示)

⑥学校への協力

No.	派遣校・依頼者名	派遣職員名		実 施 日	実 施 内 容
1	高島町立屋代小学校 校長 島津正道	向田明夫 川崎康永	後藤枝里子 江波 大	2012年4月16日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
2	天童市立蔵増小学校 校長 熊澤篤夫	向田明夫 小野健二	庄司昭一	2012年4月17日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・弓矢体験・石器で野菜切り・クルミ割り
3	河北町立北谷地小学校 校長 八矢好幸	五十嵐萌	植松暁彦	2012年4月18日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験
4	尾花沢市立高橋小学校 校長 矢口広道	向田明夫	大場正善	2012年4月19日	4・5・6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験・石器で野菜切り
5	東根市立東根中部小学校 校長 竹村健一	五十嵐萌 齋藤主税	後藤枝里子 江波 大	2012年4月20日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・火起こし・弓矢体験・クルミ割り
6	高島町立糠野日小学校 校長 小林宏一郎	向田明夫 小笠原伊之	菅原哲文	2012年4月23日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 縄文服体験・クルミ割り・火起こし
7	最上町立富沢小学校 校長 阿部敏彦	五十嵐萌	江波 大	2012年4月24日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう クルミ割り・石器で野菜切り・弓矢体験
8	遊佐町立遊佐小学校 校長 田中 泰	後藤枝里子 山木 巧	大場正善	2012年4月25日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・火起こし
9	山形市立第一小学校 校長 白鳥樹一郎	向田明夫 吉田 満	水戸部秀樹	2012年4月26日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・火起こし
10	東根市立大森小学校 校長 元木正史	五十嵐萌 長谷部寛	後藤枝里子 草野潤平	2012年4月27日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・火起こし
11	寒河江市立幸生小学校 校長 真石由美子	後藤枝里子	尾形知哉	2012年5月1日	5・6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 縄文服体験・弓矢体験・火起こし
12	遊佐町立藤岡小学校 校長 小松恒彦	向田明夫	五十嵐萌	2012年5月2日	5・6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験・クルミ割り
13	酒田市立浜田小学校 校長 池田公夫	五十嵐萌 菊池玄輝	水戸部秀樹	2012年5月7日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
14	天童市立長岡小学校 校長 大泉 徹	向田明夫 安部将平	渡辺和行 岩崎恒平	2012年5月8日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう まが玉作り
15	南陽市立宮内小学校 校長 小林繁治	五十嵐萌 伊藤大介	後藤枝里子 佐藤智幸	2012年5月9日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・クルミ割り・弓矢体験
16	大蔵村立大蔵小学校 校長 高橋正彦	後藤枝里子	水戸部秀樹	2012年5月10日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
17	酒田市立宮野浦小学校 校長 佐藤茂穂	向田明夫 齋藤 健	山田和史	2012年5月11日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
18	新庄市立北辰小学校 校長 齋藤 宏	大場正善	齋藤主税	2012年5月15日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう
19	朝日町立大谷小学校 校長 長岡 昇	向田明夫	濱田 純	2012年5月17日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 縄文服体験・弓矢体験・縄文クッキー
20	寒河江市立西根小学校 校長 石塚直樹	後藤枝里子 伊藤大介	五十嵐萌	2012年5月18日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・クルミ割り・弓矢体験
21	東根市立東郷小学校 校長 大坪伸二	後藤枝里子	渡辺和行	2012年5月22日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・縄文クッキー
22	河北町立谷地中部小学校 校長 横山 稔	後藤枝里子 菊池玄輝	五十嵐萌 渡邊安奈	2012年5月29日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 縄文食を作ろう（クルミ割り・縄文クッキー）
23	大石町立大石北小学校 校長 板垣 修	向田明夫	五十嵐萌	2012年6月13日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験
24	鮭川村立鮭川小学校 校長 須藤信一	向田明夫 後藤枝里子	五十嵐萌	2012年7月6日	6年社会科 「大昔の人々のくらし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・火起こし

⑦来所者

ア. 見学・研修等

No	来 所 者	期 日	人数	内 容
1	舟形焼わかあゆ薫風窯	2012年4月17日	1	施設見学
2	山形県立山形聾学校	2012年5月15日	3	施設見学
3	埼玉県民	2012年5月18日	2	施設見学
4	上山市宮生公民館女性学級『ほたるの会』	2012年6月11日	10	施設見学・体験学習（アンギン編み）
5	上山市教育委員会（初任者・10年経験者研修会）	2012年6月14日	16	施設見学・体験学習（火起こし）
6	山形県立上山高等養護学校 1年生	2012年6月18日～29日	7	職場体験
7	上山市内中学校 2年生	2012年7月3日～5日	3	職場体験
8	南陽市教育委員会スポーツ文化課（写真研修）	2012年7月9日、10日	4	施設利用（写真スタジオ）
9	山形県地域史研究協議会	2012年7月16日	25	遺跡見学（八反遺跡2次）
10	うきたむ風土記の丘考古資料館	2012年8月7日	3	職場体験（馳上遺跡・西谷地b遺跡）
11	山形県立米沢興譲館高等学校	2012年8月9日	12	施設見学・施設利用
12	山形県立米沢女子短期大学 日本史学科	2012年8月20日～31日	2	職場体験（馳上遺跡・西谷地b遺跡）
13	山形県教育庁文化財保護推進課	2012年8月23日	1	職場体験（山形城三の丸跡11次）
14	飯豊町地域雇用創造推進協議会	2012年9月6日	2	施設見学
15	南陽市教育委員会スポーツ文化課（写真研修）	2012年9月10日、11日	6	施設利用（写真スタジオ）
16	南陽市教育委員会スポーツ文化課（実測研修）	2012年9月12日～14日	6	施設利用（整理室）
17	南陽市教育委員会スポーツ文化課（実測研修）	2012年9月25日、26日	2	施設利用（整理室）
18	天童市立蔵増小学校	2012年9月26日	130	遺跡見学（蔵増宮田遺跡）
19	山形市民	2012年10月11日	1	施設見学
20	山形市立第七小学校	2012年10月11日	89	遺跡見学（山形城三の丸跡11次）
21	山形南ロータリークラブ	2012年10月16日	32	施設見学・施設利用
22	村山特別支援学校 高等部 1年生	2012年10月17日～24日	2	職場体験
23	山形市立第一小学校	2012年11月2日	40	施設利用
24	山形市民	2012年11月16日	10	施設見学
25	東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科	2012年11月15日	34	施設見学・施設利用
26	山形市立第九中学校	2012年11月20日	19	施設見学・施設利用
27	仙台市縄文の森広場職員等	2012年11月22日	15	遺跡見学（押出遺跡5次）
28	山形県立米沢女子短期大学 日本史学科	2012年11月29日	60	遺跡見学（押出遺跡5次）
29	中山地区公民館高齢者いきがい教室	2013年2月20日	21	施設見学・施設利用
30	中山地区民対象 埋文センター見学会	2013年2月26日～28日	77	施設見学
31	大手前大学総合文化学部 2年生	2013年3月5日	1	施設見学

イ. 図書閲覧

No.	来所者	期 日	閲覧目的
1	東北芸工大学准教授	2012年5月10日、6月5日、7月11日、10月19日	研究のため
2	高畠町教育委員会	2012年7月2日	報告書作成のため
3	上山市民	2012年7月17日	学習のため
4	奈良大学学生	2012年8月1日	卒業論文のため
5	山形県教育庁文化財保護推進課	2012年8月10日	報告書作成のため
6	明治大学学生	2012年8月22日、10月30日	卒業論文のため
7	東北芸術工科大学学生 A	2012年10月9日	卒業論文のため
8	東北芸術工科大学学生 B	2012年10月24日	卒業論文のため
9	山形大学准教授	2013年2月19日	データベース作成のため

ウ. 資料調査

No.	来所者	期 日	対象遺跡
1	山形県教育庁文化財保護推進課	2012年5月2日	西ノ前遺跡、水木田遺跡
2	東北芸術工科大学学生 C	2012年5月28日、30日、 7月2日、11日、12日、 8月9日、10月15日、 11月5日～8日、12日、14日	砂子田遺跡
3	東北芸術工科大学学生 D	2012年6月8日、22日、29日、 8月31日、 9月4日、11日、13日、14日、18日、 10月18日、11月12日～16日	山居遺跡
4	帝京大学学生	2012年9月4日	三条遺跡
5	山形県文化財保護審議会	2012年9月5日	宮の前遺跡、西町田下遺跡
6	(公財) 徳島県埋蔵文化財センター	2012年10月5日	蔵山遺跡
7	札幌国際大学教授	2012年10月12日	升川遺跡、下餅山遺跡、お花山古墳

⑧調査説明会

	市町村	遺跡名	開催日	遺跡種別	参加者数
1	山形市	山形城三の丸跡 第10次	2012年7月21日	城館跡	80
2	村山市	田向2遺跡 第2次	2012年7月25日	集落跡	30
3	米沢市	馳上遺跡・西谷地b遺跡	2012年8月11日	集落跡	40
4	村山市	森の原遺跡 第3次	2012年9月11日	集落跡	20
5	天童市	蔵増宮田遺跡	2012年9月22日	集落跡	80
6	村山市	清水西遺跡	2012年10月21日	集落跡	80
7	東根市	八反遺跡 第2次	2012年10月27日	集落跡	100
8	村山市	蟬田遺跡	2012年11月11日	集落跡	90
9	高畠町	押出遺跡 第5次	2012年12月2日	集落跡	60

⑨職員派遣等

No.	派遣職員名	依頼者名	派遣場所	年月日	内容
1	高桑 登	山形県立 うきたむ風土記の丘考古資料館	山形県立うきたむ風土 記の丘考古資料館	2012年5月20日	第20回企画展第2回展示委員会
2	高桑 登	寒河江市教育委員会	寒河江市文化センター	2012年5月25日	慈恩寺上の寺遺跡の検討会での指導
3	菅原哲文	金山町公民館教学課	金山町教育文化資料館	2012年6月20日	平成24年度歴史学講座の講師
4	齋藤主税 向田明夫	舟形町立長沢小学校	舟形町立長沢小学校	2012年6月1日	社会科歴史体験学習の講師
5	齋藤主税	舟形町立舟形小学校	舟形町立舟形小学校	2012年6月4日	社会科歴史体験学習の講師
6	齋藤主税	舟形町立富長小学校	舟形町立富長小学校	2012年6月5日	社会科歴史体験学習の講師
7	齋藤主税	舟形町立堀内小学校	舟形町立堀内小学校	2012年6月5日	社会科歴史体験学習の講師
8	高桑 登	山形県立 うきたむ風土記の丘考古資料館	山形県立うきたむ風土 記の丘考古資料館	2012年6月16日	第20回企画展第3回展示委員会
9	菅原哲文	南陽市教育委員会	南陽市埋蔵文化財分室	2012年6月19日	出土遺物の鑑定
10	向田明夫 山田和史 濱田 純	鶴岡市立大山小学校	鶴岡市立大山小学校	2012年6月26日	社会科歴史体験学習の講師
11	水戸部秀樹	山形県立米沢興譲館高等学校	山形県立米沢興譲館高 等学校	2012年7月6日	異分野融合サイエンス ～文化財と科学～の講師
12	高桑 登	山形県地域史研究協議会	八反遺跡第2次発掘調 査事務所	2012年7月16日	第38回総会・研究大会の講師
13	向田明夫 五十嵐萌 高橋 敏 後藤枝里子	山形市千歳コミュニティセンター	山形市千歳コミュニ ティセンター	2012年7月26日 8月2日	歴史体験学習の講師
14	植松暁彦 向田明夫	西置賜地区現職教育協議会	飯豊町「あ～す」	2012年7月27日	社会科専門部会の講師
15	向田明夫 五十嵐萌	鶴岡市教育委員会	鶴岡市アートフォーラム	2012年7月31日	夏休み企画「縄文体験」の講師
16	伊藤邦弘 向田明夫 五十嵐萌	みはらしの丘ミュージアムパーク 管理運営企業体	蔵王みはらしの丘 ミュージアムパーク 「はらっぱ館」	2012年8月8日	縄文時代体験イベントの講師
17	黒坂雅人 水戸部秀樹	山形県教育庁文化財保護推進課	山形県最上地区	2012年8月18日	最上の縄文遺跡めぐりの講師
18	黒坂雅人	上山市教育委員会	上山市体育文化センター	2012年9月8日	上山ゆうがく塾第1回講座の講師
19	向田明夫 五十嵐萌	山形県朝日少年自然の家	山形県朝日少年自然の家	2012年9月9日	朝少丸ごと縄文村の講師
20	齋藤主税	最上地区小学校長会	舟形町中央公民館	2012年9月13日	最上地区小学校長会研修会の講師
21	庄司昭一	山形県立山形南高等学校	山形県立山形南高等学校	2012年10月3日	平成24年度 社会人・OBによる職業講話の講師
22	黒坂雅人	舟形町教育委員会	舟形町長者原 (新田裏遺跡)	2012年10月10日	試掘調査の指導
23	黒坂雅人	山辺町立作谷沢小・中学校	山辺町立作谷沢 小・中学校	2012年10月19日	山辺町立作谷沢小・中学校 PTA教育講演会の講師
24	伊藤邦弘	中山町教育委員会	中山勤労文化センター	2012年11月26日	中山町文化財保護審議委員会
25	向田明夫 庄司昭一 後藤枝里子	東根市立東根第二中学校	東根市立東根第二中学校	2012年10月27日	文化体験講座の講師
26	菊池玄輝 山田和史	長瀬郷土史研究会	東根市長瀬公民館	2012年10月27日 28日	沼袋遺跡の遺物展示及び解説
27	小林圭一	(公財) 埼玉県埋蔵文化財調査 事業団	埼玉県埋蔵文化財収蔵 施設	2012年11月21日	職員研修の講師
28	植松暁彦	山形県立博物館	山形県立博物館	2012年12月15日	平成24年度考古学講座の講師
29	水戸部秀樹 草野潤平	山形県立 うきたむ風土記の丘考古資料館	山形県立うきたむ風土 記の丘考古資料館	2013年2月17日	2012年山形の考古資料検討会の講師
30	小林圭一	東北芸術工科大学	東北芸術工科大学	2013年2月18日 19日	第2回全体研究会参加
31	天本昌希	山形市南部公民館	山形市南部公民館	2013年2月22日	南部郷土史講座の講師
32	小林圭一 大場正善	山形県立博物館	—	2013年2月27日	企画展図録原稿執筆

⑩資料貸出

No.	貸出先	借用目的	貸出期間	資料名	数量
1	北海道開拓記念館	北海道開拓記念館40周年記念事業 「北の土偶～縄文の祈りと心」への展示	2012年2月22日～ 5月18日	縄文の女神レプリカ	1
2	高島町立屋代小学校	授業での学習教材として	2012年4月16日～ 4月20日	向河原遺跡（炭化米等）	3
3	東根市立大富小学校	授業での学習教材として	2012年4月27日～ 5月1日	小林遺跡、砂子田遺跡出土遺物	3箱
4	山形県立博物館	平成24年度企画展 「豊穣と祈り～縄文女神たちの宴と古墳 時代の想い～」への展示	2012年5月9日～ 9月20日	思い川A遺跡、山形西高遺跡、うぐいす沢遺跡、 高瀬山遺跡ほか出土遺物	214
5	岩手県立博物館	第63回企画展「土偶まんだら」への展示	2012年6月26日～ 8月31日	川口遺跡、宮の前遺跡、渡戸遺跡、 下叶水遺跡、釜淵C遺跡、中村A遺跡出土遺物、 縄文の女神レプリカ	10
6	山形市立第十中学校	授業での学習教材として	2012年7月17日～ 7月19日	砂子田遺跡、熊ノ前遺跡、百刈田遺跡、 川前2遺跡、高瀬山遺跡出土遺物	27
7	寒河江市教育委員会	寒河江市埋蔵文化財フェア 「山形県内の古代瓦」への展示	2012年8月1日～ 8月13日	オサヤズ窯跡、小松原窯跡、 泉森窯跡出土遺物	326
8	津南町教育委員会	津南町農と縄文の体験実習館「なじも ん」秋季企画展「三十稲場式土器文化の 世界」への展示	2012年8月22日～ 12月上旬	山居遺跡、立泉川遺跡出土遺物	12
9	岩宿博物館	第54回企画展「人が動く、時代も動く－ 東日本の細石器文化を追う－」への展示	2012年8月22日～ 12月21日	高瀬山遺跡出土遺物	1
10	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館	企画展中世の山形 －そこにお城がある理由－への展示	2012年8月24日～ 12月14日	大橋遺跡、堤屋敷遺跡、小田島城跡、 亀ヶ崎城跡、荒川2遺跡出土遺物	205
11	長井市教育委員会	長井市古代の丘資料館企画展示 「編む・織る」の文化史への展示	2012年8月27日～ 11月16日	熊ノ前遺跡、泥部遺跡、原の内A遺跡、 作野遺跡、物見台遺跡ほか出土遺物	133
12	山形県立博物館	平成24年度企画展山形県立博物館特別 展「出羽国公立1300年」への展示	2012年9月20日～ 12月20日	後田遺跡、生石2遺跡、下長橋遺跡、 藤島城跡、上高田遺跡ほか出土遺物	173
13	舟形町教育委員会	舟形町歴史民俗資料館 西ノ前遺跡展 への展示	2012年10月2日～ 10月16日	西ノ前遺跡出土遺物	18
14	東沢まつり実行委員 会	東沢まつり文化祭への展示	2012年11月1日～ 11月5日	新山遺跡、熊ノ前遺跡、関沢遺跡出土遺物	5
15	山形県立博物館	考古学講座「弥生時代のやまがた」の資 料として	2012年11月16日～ 11月19日	百刈田遺跡出土遺物	4
16	東北芸術工科大学	授業での学習教材として	2012年11月29日～ 2013年1月7日	お仲間林遺跡出土遺物	2箱

⑪資料掲載許可

No.	貸出先	借用目的	資料名	数量
1	朝日新聞社	朝日新聞デジタル記事『土偶 山形県西ノ前遺 跡出土』として掲載のため	西ノ前遺跡 巻頭図版2・3・4、図版5、他土偶写真	8
2	さくらんぼテレビジョン	スーパーニュース～山形県版～で放送するため	西ノ前遺跡、縄文の女神関連写真	3
3	東京書籍	学校向けWEB配信教材 「問題データベース中学校社会」に掲載のため	梵天塚遺跡 図版29	1
4	舟形町	「西ノ前遺跡土偶里帰り展」 展示パネル作成の資料とするため	西ノ前遺跡 巻頭図版4・5	3
5	やまがた新聞社	記事「堂の前遺跡」として掲載のため	堂の前遺跡 口絵1、PL1、図版1・12	4
6	舟形町教育委員会	テレビ出演時の資料として	西ノ前遺跡発掘調査説明会の写真データ	8
7	長井市教育委員会	平野地区文化財研究会勉強会での資料とするた め	小豆澤館跡 図版1・2・4・7	8
8	山形県立博物館	平成24年度企画展図録等掲載のため	お花山古墳群、上原古墳、 去手呂古墳出土遺物写真等	28
9	山形県立博物館	平成24年度特別展図録等掲載のため	生石2遺跡、大橋遺跡、藤島遺跡、 今塚遺跡ほか出土遺物写真	75
10	羽鳥書店	MIHO MUSEUM特別展図録 『土偶・コスモス』掲載のため	百刈田遺跡 壺形土器展開写真	1
11	上山市教育委員会	平成24年度上山ゆうがく塾広報用に使用する ため	縄文の女神 画像データ	1
12	山形県立うきたむ風土記の丘 考古資料館	第20回企画展図録 『中世やまがたの城館跡』掲載のため	堤屋敷遺跡、小田島城跡、亀ヶ崎城跡、 荒川2遺跡ほか出土遺物写真	191
13	長瀬公民館	文化祭の報告、周知のため	沼袋遺跡出土遺物写真等	25
14	酒田市立資料館	第178回企画展「出羽国設置1300年記念展」の 展示資料作成のため	泉森窯跡、山海窯跡群、 俵田遺跡ほか出土遺物写真等	57
15	鶴岡市郷土資料館	企画展『史料で見る庄内の地震』 展示資料作成のため	矢馳A遺跡 写真図版67	1

⑫出版物

ア．普及・業務報告

書名	発行年月日
埋文やまがた第49号	2012年12月15日
埋文やまがた第50号	2013年2月15日

イ．調査説明会資料

書名	発行年月日
山形城三の丸跡第10次	2012年7月21日
田向2遺跡 第2次	2012年7月25日
馳上遺跡・西谷地b遺跡	2012年8月11日
森の原遺跡 第3次	2012年9月11日
蔵増宮田遺跡	2012年9月22日
清水西遺跡	2012年10月21日
八反遺跡 第2次	2012年10月27日
蟬田遺跡	2012年11月11日
押出遺跡 第5次	2012年12月2日

ウ．調査報告書

シリーズNo.	書名	発行年月日
206	山形城三の丸跡第10次発掘調査報告書	2013年3月31日
207	北原2遺跡第1・2次、北原4遺跡発掘調査報告書	〃
208	稲荷山館跡第3次発掘調査報告書	〃

エ．発掘調査報告会資料

資料名	発行年月日
平成24年度発掘調査速報会	2012年12月16日

オ．その他

資料名	発行年月日
平成23年度 年報	2012年5月24日

⑬ホームページ

主な項目と内容は以下のとおりです。

発掘調査遺跡一覧	発掘調査遺跡や整理事業中の遺跡の紹介
発掘調査速報	調査期間中、遺跡の状況を毎週更新して紹介
イベント情報	ふるさと考古学講座、調査説明会、外部展示、各種イベント情報の提供
センター刊行物案内	調査報告書、広報誌などの刊行物の紹介
学校教育への協力	出前授業の紹介、埋蔵文化財を活かした授業のアイデアなどの提供とその状況など
埋文やまがた	広報誌「埋文やまがた」を紹介するとともに、これまでに刊行したバックナンバーの閲覧
センター概要	センターの紹介や、情報公開制度に基づいた、センター情報の提供

(3) 情報処理

収蔵図書データベース 新収蔵図書 2,034冊のデータ入力実施 (File Maker Pro使用)

(4) 調査研究発表

高畠町押出遺跡第5次発掘調査出土のクッキー状炭化物

—縄文時代前期の“クッキー”に迫るための良好な資料—

大場正善

押出遺跡と堆積環境 押出遺跡は、かつての白竜湖の湖岸にあった縄文時代前期、約5,000年前の集落跡だ。遺跡は、気候変動にともなう白竜湖の拡大と収縮とともに、湖沼の堆積環境で特徴的な泥炭・腐炭が堆積することによって、埋没していった。その湖沼堆積層中では、豊富な地下水に満たされていたことから、無酸素状態になり、有機質を分解するバクテリアの繁殖が抑えられた。その結果、遺跡には、植物遺存体と木製品、漆製品、動物依存体、骨角器などの、豊富な有機質資料が残された。

発掘調査とクッキー状炭化物 1985年～1987年、国道13号線建設工事にともなう行われた押出遺跡の第1次～第3次発掘調査では、39棟の打ち込み柱の住居跡と1基の集石遺構とともに、多量の有機質資料が発見された（山形県教委1990）。有機質資料の中には、全国的に珍しい、クッキー状炭化物が61点もあったのである。その後、2011年～2012年に行われた、沼尻堀の改修工事にともなう第4次・第5次発掘調査でも、クッキー状炭化物の出土が期待された。そして、このたび、2012年11～12月にかけて行われた、第5次において、ついに発見されたのである。

第4次・第5次調査の概要 その第5次の調査区は、沼尻堀の東岸、長さ約200m、幅約1mとなる。第5次にたいして第4次は、第5次の対岸、沼尻堀の西岸の調査であり、第5次と同様の範囲で行われた（山埋文2013）。なお、第4次と第5次の調査区の間、すなわち改修前の沼尻堀の範囲は、遺物包含層・遺構確認面よりも1m近く深く削平されている。第4次では、2棟の転ばし根太敷き・盛土成形の住居跡が確認された（山埋文2012）。第5次では、多量の遺物が出土した窪地跡、数10基の打ち込み杭、1基の石器集中部（SX112）、そして2カ所の炭化物集中部（SX111・113）が確認された（本書PP.〇第〇図を参照）。その炭化物集中部

SX111より、クッキー状炭化物が発見されたのである。

SX111 SX111は、調査区の北端、ちょうど遺構・遺物の拡がりの端に位置する。炭化物は、約1m×5mの範囲に、密度に濃淡があるものの、面的に分布する。炭化物には、多量の本炭のほか（樹種は、現在分析中）、炭化したクリの子葉が認められた。調査では、SX111の炭化物と土壌をすべて回収し、水洗別作業を行った。調査終了後、水洗別した資料を点検したところ、本炭や炭化クリとは異なる炭化した塑性素材の人工物、すなわち“クッキー”と考えられる炭化物が確認された。

炭化 “クッキー”とともに、樹木やクリは、すべて炭化し、一定程度の形を留めている。またこれらの炭化物は、消し炭のように軟質でなく、一定程度の硬さを有している。つまりそれらのことは、蒸し焼きにされたために、酸素供給が止められ、揮発性の低い固形の炭素分に置き換わったこと示している。また本炭は、その形状から、枝が多く、そのほとんどが2cm大に分断していた。その出土状況からは、元の樹木や枝の形状を留めてない、“バラバラ”の状態と言える。つまりその場で燃やしていない、または燃やした後にその場が乱されたかである。

SX112・被熱石器資料 一方で、SX111に重複するように、300点以上の頁岩製石器資料が密集するSX112が存在する（写真1）。SX112の石器資料は、ほとんどにヒビやはじけ、赤色や黒色といった変色、煤状の付着物など、焼かれたときに残る被熱痕跡が認められた。ちなみに、珪酸分が多い頁岩の石片を直接火に放り込めば、石片は激しく砕けはじけ、飛び散り、原形を留めなくなるほどに崩れてしまう。しかし、SX112の石器資料は、被熱痕跡が認められるものの、一定程度原形を留めているものが多い。つまり焼かれた時に高温でなく、さらにははじけ散る前に被熱が終わった可能性が高い。石器資料は本炭と違って、50cm程度の狭い範囲に分布している。

その範囲の中心下部には、微細なチップが密集する。

考えられる分布の原因 したがって、これらの事実からは、次のことが考えられる。樹木からは、その場で焼かれたというよりも、他の場所で焼かれのちに、SX111の範囲に廃棄された。SX112の石器資料からも、他の場所で割られたのちにSX111の上に廃棄された。石器資料が廃棄された時点では、SX111はまだ燃焼が続いていたため、石器資料に被熱痕跡が残された。その直後に、何らかの理由によって、蒸し焼きされたのちに燃焼が終わった。クリと“クッキー”は、木炭とともに廃棄され、蒸し焼きによって炭化した。石器資料が密集している事実からは、石器資料を投入したあとは、その場が乱されていない、といった可能性が今のところ考えられる。なお、今後の整理でその妥当性については、またはほかの可能性について検討していくことになる。

発見されたクッキー状炭化物 さて、そのSX111から発見されたクッキー状炭化物は、815点（ただし、破片としての点数：写真2）であり、過去に発見された点数・量を凌いでいる。全国的にみても、その数と量はかなり

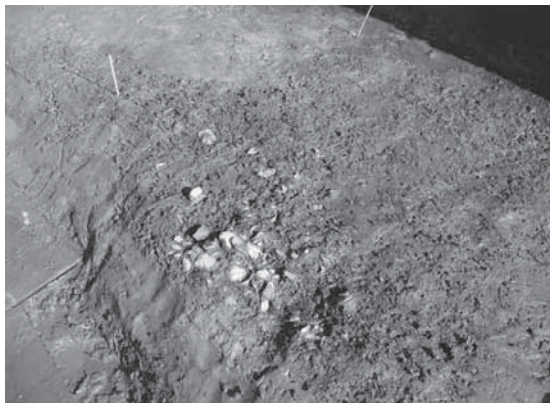


写真1 SX111とSX112（南西から）



写真2 SX111出土のクッキー状炭化物の一部

のものである。まだ水洗別作業を行っていない土壌サンプルがあることから、さらに増える可能性もある。クッキー状炭化物は、扁平なものや、窪みや円、あるいは弧を沈線で施したもの（写真3）、そして「だま」状のもの（写真4）がある。中には、断面形状が上面と下面が緻密で、中間に空隙がある三層構造を呈したもののや、指先の痕跡と考えられるものが残ったものもある。遺跡からは、大量のクリの子葉・皮やオニグルミの殻が出土していることから、“クッキー”の素材には、クリやクルミが用いられた可能性が考えられる。他の可食植物も利用されたかもしれない。

展望 今後、炭素・窒素同位体分析などの“クッキー”に用いられた素材の分析（国木田ほか2010など）や、クッキー状炭化物表面に残る工具や指先などの製作痕跡、CTスキャンによる内部構造（国木田ほか 同掲）、土器表面に残る付着物のや石皿の表面の残存デンプン粒、焼成場所の特定など、“クッキー”の製作技術に関する分析を行い、押出遺跡において“クッキー”がどのように作られていたのかの追究が待たれる。その上で、今回発見されたクッキー状炭化物は、量と質ともに、良好な資料と言えよう。

※参考文献については、紙面の都合により割愛した。



写真3 紋様があるクッキー状炭化物（S=80%）



写真4 「だま」状のクッキー状炭化物（S=80%）

西海渚遺跡と西田遺跡の墓壙群について

小林 圭一

1. はじめに

西海渚遺跡（山形県村山市所在）と西田遺跡（岩手県紫波郡紫波町所在）は、集落の中心に共同墓地を配した環状集落の典型として著名である。いずれも縄文時代中期中葉の集落跡で、大木式土器分布圏に属しており、特に西田遺跡は定型的な集落構成から「縄文モデル村」と称され、縄文社会を考える上で最も好適な事例として、しばしば研究の俎上に載せられてきた遺跡である。一方西海渚遺跡は、縦長の建物を放射状に配置した集落構成から、「羽越パターン」の象徴として研究者の注目を集めてきたが、報告書の分析が不十分なため、検討の機会に恵まれてこなかったのが実情である。本稿では西海渚遺跡集落の紹介を通して西田遺跡墓壙群との対比を試み、縄文時代中期における社会構造の一端を垣間見てみたい。

2. 山形県西海渚遺跡の集落構成

西海渚遺跡は、尾花沢盆地の南西端を流下する富並川沿いの河成段丘上に立地する。集落は遺構が希薄な中心エリアから外周に向かって、墓壙群→土坑群→大型竪穴住居群の4重の同心円で構成されており、一部未調査区域を残すものの、その広がり直径約120mの環状を呈している（図1）。集落中央の直径15m～17mの範囲は遺構密度が希薄で、その外側の内径15～17m、外径30～35mの範囲には約150基の墓壙が環状に集中する。さらに墓壙群の外環部から幅10～15m付近には土坑の夥しい集中が見られ、集落空間の外周に当たる内径約80m、外径約120mの環状の範囲には、50棟以上の竪穴住居跡が集中的に分布している。

集落構成の主体となる大型竪穴住居跡は、長軸10～15m、幅3.5～4mの長方形ないしは楕円形の長大な

平面形で、少なくとも26棟を確認することができる。いずれも個々のプラン上での建て替えが頻繁に認められるのに対し、大型住居同士の重複は稀で、住居長軸線が放射状に配列されている。またこの区域には、直径6～7mの円形または楕円形プランの竪穴住居跡が少なくとも20棟検出されており、その多くは長方形大型竪穴住居跡を壊して構築されている。環状集落の形成は中期中葉大木8b式前半の大型竪穴住居の構築に始まり、大木8b式後半の円形・楕円形竪穴住居の構築を経て、集落構造に働いていた規制が崩れ始める大木9式前半に終焉を迎えたというような消長を辿っており、共同墓地を取り囲む集落構成は既に形成時にレイアウトされていたと考えられる。

墓壙群 西海渚遺跡で検出された墓壙は、長径1.5～1.8m、短径1m程の楕円形あるいは小判形の平面形を呈しており、底面は平坦に作出され、底面の周囲には幅10～20cmの溝を巡らせた例が多く見られる。検出面からの掘り込みは一般に浅く、遺物の出土は稀であるが、SM426から手形付土製品が出土している。墓壙同士は重複が著しく、正確な数量をカウントすることは困難であるが、分布状況から5～7単位の小群に分割される（図2）。即ち東群と西群に大きく二分され、さらに東群は2単位の小群（A・B群）、西群は3単位の小群（C・D・F群）に区分することが可能であろう。A群は25基以上、B群は30基以上、C群は32基以上、D群は16基以上、E群は39基以上で、墓壙の合計は142基以上となり、東群は55基以上、西群は87基以上と不均衡が生じている。

西海渚遺跡の墓壙は長軸方向に対する一定の規則性が弱く、放射状に並んだり円周方向を向いたものが混在するが、SM426を含むA群では、長軸方向に求心性をもって放射状に並ぶ例が多く認められる。長期にわたって

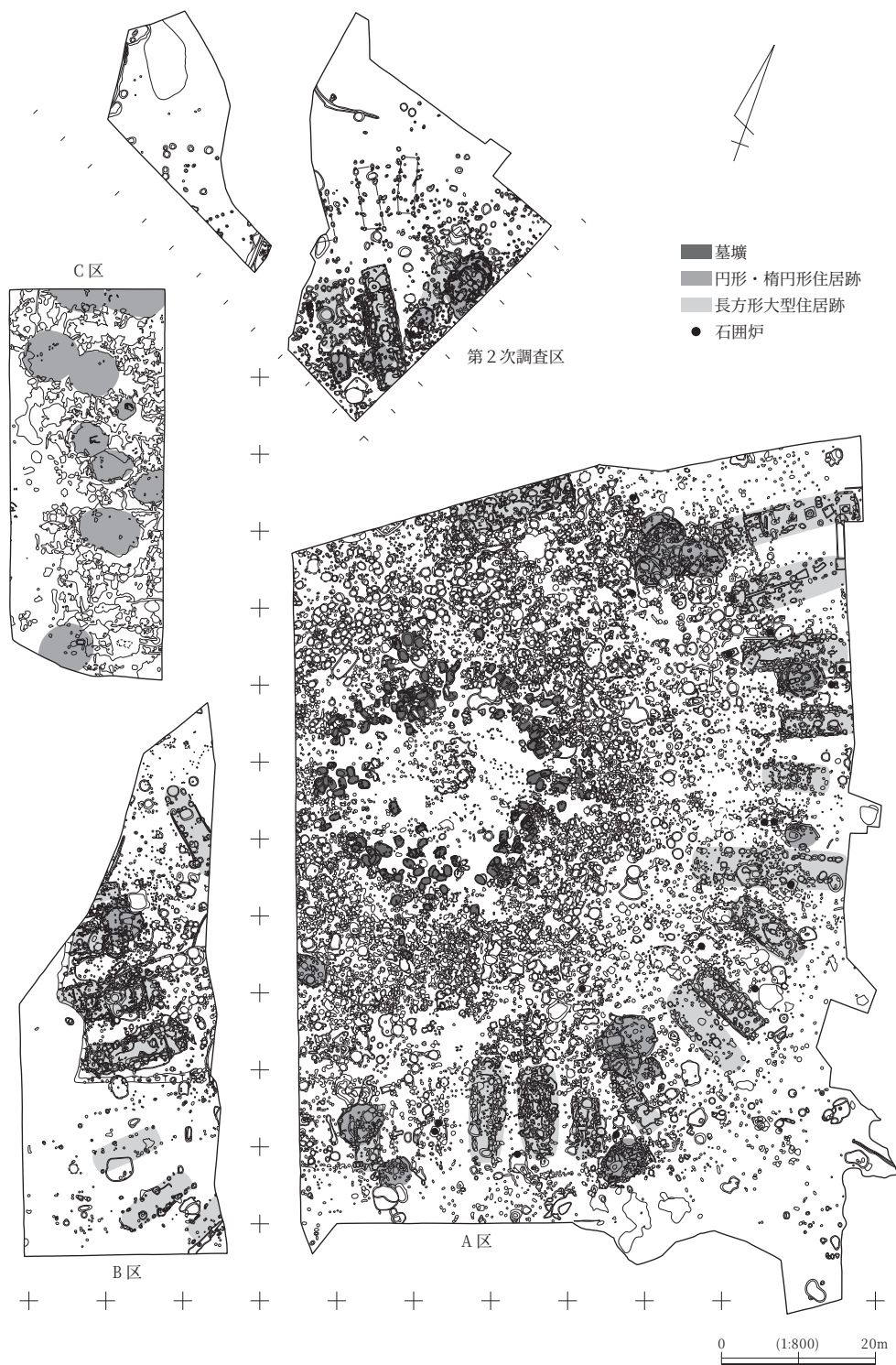


図1 西海湖遺跡の集落構成

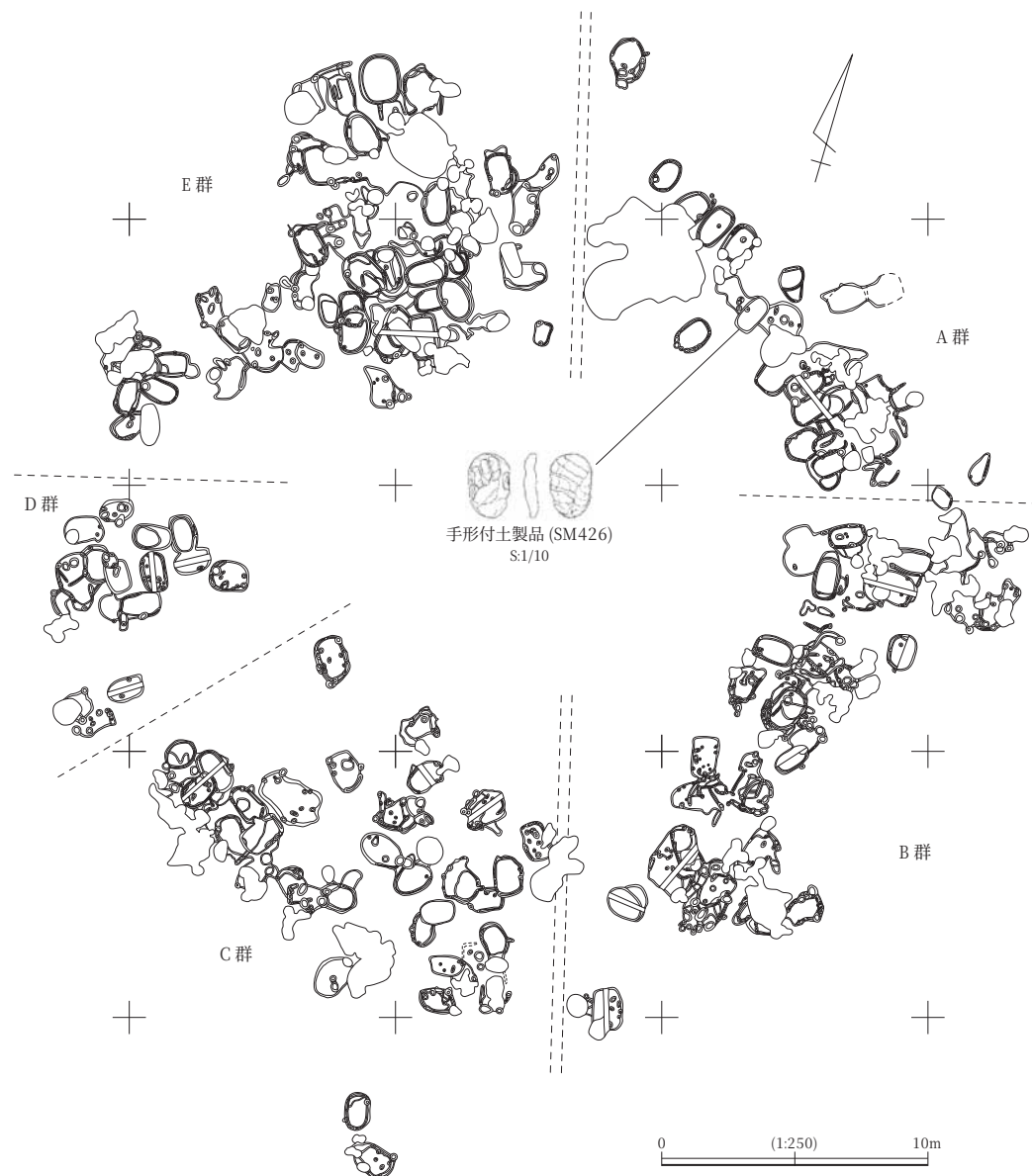


図2 西海淵遺跡墓壇群配置図

一定の場所に埋葬が繰り返されたことが、多数の墓壇が重複して切り合う結果となっており、埋葬小群が数世代にわたり踏襲されていたことが暗示される。しかし墓壇群で抽出された分節単位と大型竪穴住居群との間には、明確な対応関係を指摘することはできない。

3. 岩手県西田遺跡の集落構成

西田遺跡は北上盆地の北部、大木式土器分布圏と円筒式土器分布圏の接触地域に当たる岩手県紫波町南端

の独立丘陵上に立地している（図3）。同遺跡では竪穴住居 35 棟（大木 8a 式期 14 棟・同 8b 式期 18 棟）、墓壇 192 基、柱穴状土坑約 1,450 基（掘立柱建物 53 棟）、貯蔵穴 129 基が検出されたが、集落は墓壇群と掘立柱建物群の同心円状の構成を基本として、内帯（墓壇群）→墓壇群→掘立柱建物群→竪穴住居群・貯蔵穴群の 4 重の同心円で構成される（図4）。東・西側の住居群の様相は明確でないが、集落は直径 120 m の円周で収束しており、中央の直径 30 m 内には墓壇が求心性をもって

放射状に並び、その外周の直径 35 ～ 60 m の範囲には掘立柱建物群、さらに外周には貯蔵穴群と竪穴住居群が混在している。集落の形成は前期末葉大木 6 式に始まるが、中期中葉大木 8a 式期には上記した環状集落としての完成された姿を示しており、続く大木 8b 式期には住居が集落の内側に迫り出し、掘立柱建物群や貯蔵穴群を壊すように構築され、集落構成に働いていた規制が崩れ始め、同式をもって終焉を迎えたというような消長を辿っている。

墓壇群 西田遺跡で検出された墓壇は 192 基を数え、遺跡の中心に占地している。東西にやや長い環状を呈し、外径 28 ～ 31 m、内径 12 ～ 19 m の範囲に 178 基の墓壇が集中して配されており、墓域中心部の内帯には 14 基の墓壇が北側と南側の 2 列に配列されている（図 5）。墓壇は殆どが小判形を呈しており、長軸方向を墓域の中心部に向けて放射状に並んでいる。その長軸方向には一定の纏まりが見られ、方位によって環状帯の 178 基の墓壇は 8 単位の小群（A ～ H 群）に区分される。小群は全貌が明確でない A 群を除くと、13 ～ 32 基の墓壇で構成されており、内帯に占地する墓壇も長軸方向で対応関係が指摘される。小群内では墓壇同士が重複するものの整然と配列されており、隣接する埋葬区とは余り重複せず、埋葬区の形成には厳格な区分原理が存していたと推定される。墓壇が求心性を有していることは、埋葬頭位の方向を規制していたことを示しており、頭位が集落の外側または内側のいずれかを向いていたことになろう。

墓壇の底面は舟底形ないし平底を呈しており、平面形の長軸は 1.2 ～ 1.4 m が半数近くを占め、1.5 m 以上は 27 基に過ぎない。検出面からの深さは 10 ～ 30 cm と浅く、覆土は殆どが単層からなっている。墓壇から出土した副葬品は G 群の GF561 ピットからヒスイ製大珠が出土したのみで、副葬品から墓壇の構築時期を特定することはできないが、遺構検出面上からは大木 6 ～ 8b 式土器が出土し、その内の 9 割が大木 8a 式土器で占められることから、墓壇の造営時期は大木 8a 式期と推定されている。しかし後続する大木 8b 式の住居も墓域を取り囲むように主軸方向を集落の中心に向けており、炉も中央寄りに片寄って構築される傾向にある。このことは大木 8b 式期においても墓域が維持され、環状の規制を受

けていたことを示していると言えるであろう。環状構成は大木 8a ～ 8b 式にかけて形成・維持されており、墓壇も同じ時間幅で構築されていた可能性も否定できない。

掘立柱建物群 掘立柱建物は墓壇群の外環部にほぼ接するように、10 ～ 15 m 幅の環状帯で構成される。柱穴は柱痕が明瞭に観察され、掘方は直径 50 ～ 70 cm、深さ 55 ～ 75 cm が一般的で、4 ～ 9 基の柱穴を一つの単位として、方形ないしは亀甲形となる柱穴列で構成されており、長辺長が 3 ～ 8 m の掘立柱状の構造物であったと推定されている。柱穴同士の重複は顕著であるが、形状・規模・深さに柱穴列毎の規格性が認められ、想定される掘立柱建物の総数は 53 棟を数える。

掘立柱建物は長軸ないしは短軸方向に厳格な規格性が看取され、数棟単位で纏まりを有することから、a ～ j 群までの 10 群に区分することが可能である。それらは墓壇群の埋葬小群に対応しており、予め分割された区画の集合体としての様相を呈している。一つの墓壇群のブロックに対し、二つの掘立柱建物の小群が対応することになり、調査区外を含めると 16 の小群で構成された可能性が考えられる。1 小群当たり 3 ～ 9 棟で構成され、8 群からなる墓壇群の埋葬小群に対応させると、掘立柱建物は 10 棟以上が一つの単位となる。構築時期については、遺構検出面上や柱穴内から出土した遺物が大木 8a 式土器で占められ、また柱穴が大木 8b 式期の住居跡に切られていることから、墓壇群と同様に大木 8a 式期に形成されたと考えられている。

4. 両遺跡の墓壇群の比較

西海淵遺跡と西田遺跡の墓壇群を概観したが、前者では少なくとも 5 単位、後者では 8 単位の埋葬小群が抽出できる。埋葬区画は集落形成時に既に設定されており、その集合体としての様相をそれぞれ窺わせるが、居住域がその規制をどれだけ受けていたのか明確にすることはできない。但し大型竪穴住居群や掘立柱建物群の構築が終了した後も、居住区画内に住居が繰り返し構築されており、同一の出自集団による居住区画が踏襲され、その間も墓域は営まれていたと考えられる。環状集落では通常全体を大きく二分する構造（二大群の構造）が認められる（谷口 2005：90 頁）。西海淵遺跡では墓壇群が東



图3 岩手県西田遺跡全体図



図4 岩手県西田遺跡の集落構成



図5 岩手県西田遺跡の墓壙群・掘立柱建物群配置図

表1 西海淵・西田遺跡の墓壇群の比較

	西海淵遺跡	西田遺跡
時 期	大木8b式期主体 (大木8b～9式)	大木8a式期主体 (大木8a～8b式)
総 数	約150基 (142基以上)	192基 (内帯:14基／外帯178基)
規 模	外径:30～35m 内径:15～17m	外径:28～31m 内径:12～19m
形 状	楕円形・小判形 長軸:1.5～1.8m	小判形 長軸:1.2m～1.4m
底 面	平底／底面に周溝	平底・舟底形
特 徴	重複顕著 求心性希薄	重複僅少 求心性顕著
小群数	5単位?	8単位
副葬品	手形付土製品	ヒスイ製大珠

西に二分され、西田遺跡では内帯の墓壇群が南北に二分される。しかし前者では大型竪穴住居群を明確に二分することが叶わず、後者ではその外環の墓壇群の埋葬小群が合致しない。「二大群の構造」原理を集落全体に適合させるには、なお検討を要すると思われる。

西海淵遺跡の墓壇は、埋葬小群内での重複が著しい。それに対し西田遺跡では重複が見られるものの、整然と配列される。墓域の形成期間は前者が長く、後者が短かった可能性も否めないが、前者は埋葬頭位の規制が緩く、後者には規制が強く作用していたと考えられる。しかし西海淵遺跡の一部の小群（A群）にも求心性は認められる。両遺跡で埋葬小群が抽出されるということは、死者がその集落の中に安置され、死後も集団の一部として祀られていたことを意味しており、埋葬小群が血縁原理によって組織された出自集団であった可能性が指示される（谷口 2005：108 頁）。また両遺跡では副葬品の僅少さが共通する。西海淵遺跡は手形付土製品、西田遺跡はヒスイ製大珠がそれぞれ1点出土したのみである。150～200基の墓壇が検出されたにもかかわらず、特別な施設も存在せず、墓壇自体に差異は見出せない。後・晩期に比べると、社会の階層化が進展していなかった可能性も考えられる。但し西田遺跡の内帯の在り方は、被葬者に対する特別な配慮が窺える。

西海淵遺跡の墓壇は楕円形や小判形で、底面は平底を呈し、周溝を巡らした例が多く認められる。壁面に木材

の板を張り付けた木棺墓であった可能性が考えられる。それに対し西田遺跡では小判形で、底面が舟底を呈する例が多い。また西海淵遺跡の墓壇の長軸は1.5m以上、西田遺跡では1.5m以下が多数を占めることから、前者では伸展葬、後者では屈葬が優勢であった可能性も考えられる。

西田遺跡の掘立柱建物群は、中期中葉としては特殊な遺構となっている。その性格は配列状況から、墓壇群と密接な対応関係が暗示される。直接共伴した遺物がなく、火の使用痕跡も殆ど認められないことから、「^{もがりのみや}殯宮」のような埋葬儀礼に関連した施設であったと想定されている。しかし神聖な共同の食料貯蔵施設と捉える見解や、大型柱穴の建物を一時的な施設と見なすことに否定的な意見も提出されている。その性格は未明のままであるが、東北北部の後期前半の環状列石の外環部に見られる掘立柱建物群は、西田遺跡の掘立柱建物群が継承されたものと理解するべきであろう。

集落の内部に空間的な分節構造が確認され、埋葬小群が存在し維持されていたことは、血縁関係を基軸として墓域が営まれていたと推定され、両遺跡は共同墓地・祭祀場としての機能を持った特殊な遺跡であったと評価することができる。両遺跡とも定住性の高い遺跡のため、石鏃等の狩猟具の出土量は少なく、磨石・凹石・石皿等の植物質食料の調理具類が多く出土している。また集落内には貯蔵施設であるフラスコ状土坑も多く形成されており、集落において植物質食料の調理・加工が活発に行われていた様相を窺うことができる。上記から、植物質食料に大きく依存した生業活動が、中期社会の存立基盤になっていたと推定され、両遺跡は通年居住された集落であると共に、一定期間周囲の遺跡から集住し、共同作業や祭祀が執り行われていた可能性が指摘される。

引用文献

- 小林圭一 2012 「富並川流域における縄文時代の遺跡動態—西海淵・川口・宮の前遺跡の検討を通して—」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的综合研究 研究成果報告書Ⅰ』 pp.125—198 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』 学生社

古墳周縁域の交流について

—太平洋側の動向と山形県域の特質—

草野潤平

I はじめに

本誌の「調査遺跡の概要」で紹介しているとおり、2012年に実施された東根市八反遺跡^{はつたん}の発掘調査において、平安時代の竪穴住居跡覆土から東北地方3例目(他2例は宮城県)となる子持須恵器が出土した。口縁部を欠く子壺1点であるため詳細な時期比定は難しく、おおむね6世紀代の所産と捉えるよりほかはないが、当該遺物の中心地である西日本から遠く離れた古墳周縁域での出土という事実は注目すべき点である。近隣には小円墳2基からなる村山市河島山古墳群がある程度で、卓越した有力古墳を認めがたく、製作地(窯跡)・供給先(古墳)の問題のみならず、このような特殊な遺物がもたらされた背景について今後検討を深める必要がある。

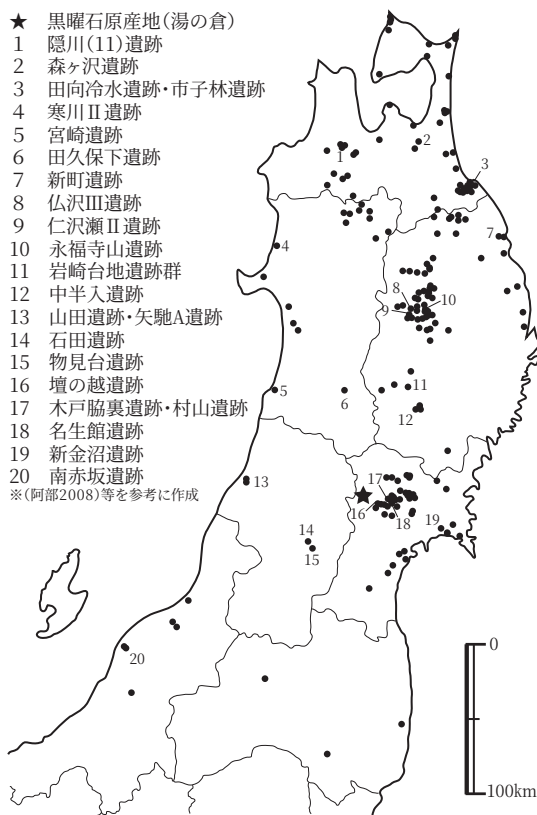
小稿では如上のような課題に取り組むためのひとつの前提として、山形県域を中心とする古墳時代の交流関係について私見を整理しておきたい。

II 古墳北縁世界における南北交流の東西差

3世紀中葉頃に成立した古墳文化は急速に全国各地へ広がるが、一部例外を除き宮城県大崎平野・山形県山形盆地・庄内平野を北限として、これより北側の青森・岩手・秋田県域では北海道から南下した統縄文文化の強い影響下にある社会が展開する。ただし両文化の境界は一本線で区分できるものではなく、互いの文化を特徴づける考古資料の重層的な分布域が漸進的に変移し、南北双方で複雑に入り込む広範囲の「境界領域」をなしている(藤沢 2001・2007)。このことは、統縄文文化を特徴づける遺構・遺物の広がりに着目したとき、八戸市・盛岡市・大崎市周辺を核とする分布の粗密が認められ、北へいくほど濃密になるような単純な分布でないことから窺うことができる(第1図)。また近年では、東北北部にもたらされた古墳文化の遺構・遺物が従来の認識よ

り拡大・増加する傾向にあり、青森県八戸市田向冷水遺跡^{たむかいびやみず}や岩手県奥州市中半入遺跡^{なかはんに入}のように古墳文化の遺構・遺物を主体とする拠点的な遺跡が一定数見られることから、東北北部については古墳・統縄文両文化が時間的・地域的に多様なあり方で共存し続けた社会と捉え直す見方も示されている(菊地 2012)。このように周縁域としての東北地方の古墳文化にアプローチするうえで、統縄文文化の広域拡散以来生起する東北北部との関係性が極めて重要な視点となることは言うまでもない。

しかし古墳時代併行期における東北地方の南北交流については、日本海側の当該遺跡数が少ないため、太平洋側の考古資料にもとづいて語られることが多い。わずか



第1図 本州島の統縄文文化関連遺跡(古墳時代併行期)

な資料ではあるが、袋状・柱穴状ピットをもつ土坑墓から土師器や鉄器が出土した秋田県能代市寒川^{さむかわ}Ⅱ遺跡・横手市田久保下遺跡や、黒曜石製石器が出土した山形県鶴岡市矢馳^{やばせ}A遺跡・中山町物見台遺跡、続縄文土器が出土した鶴岡市山田遺跡・寒河江市石田遺跡などが挙げられるので、日本海側でも南北交流が展開したこと自体は確かである。これら日本海側の遺跡は、6世紀代を中心とする時期に属するもので太平洋側の盛期とずれがあり、また宮城県加美町壇の越遺跡や岩手県奥州市中半入遺跡のような交流の結節点となる遺跡を認めたいという相違点もあることから、南北交流の内容が東北地方の東西で異なる可能性が指摘されている（菊地前掲）。

以上のような南北交流の状況を念頭に置き、東北北部以外の地域との交流関係から山形県域の動向をおさえることにする。以下、南北交流が活発に展開した5世紀以降を取り上げる。

Ⅲ 渡来系文化の流入と展開

5世紀代の東北地方において、カマド付き住居や朝鮮半島系土器、鍛冶関係資料、算盤玉形紡錘車、馬関係資料といった渡来系文物は、福島県中通り地域から仙台・大崎平野へ至る古東山道ルート沿いを中心に分布している（第2図）。そのあり方は遺跡が連続的に繋がるのではなく、福島県郡山市や宮城県仙台市など飛び地的に拠点をおさえ、その拠点を中心に周辺地域に広がりながら北へ進んでいった状況が推察されている（亀田 2003）。また北部九州・吉備・畿内といった西日本と比べると量的に少なく変容したものが多いことや、分布密度が北上するにつれて希薄になることなどから、渡来人1世との直接的な交流というよりは畿内などの中継地を経た再移住と考えられる点が指摘された。すなわち東北進出を目論む畿内政権や関東地方の豪族との関わりをなかで渡来系文化を携えた集団が2次的に入っていったという見解である。このように把握されている大局的な動向を、東北地方における渡来系文化流入の基本的枠組みとして踏まえたうえで、日本海側の山形県域の状況を見てみよう。

5世紀後半～末葉の山形市大之越^{だいのこし}古墳には、鍛冶具の一種である鉄鉗^{かなはし}や初期の剣菱形杏葉、百濟ないし加耶地域からの舶載品とみられる特殊な鉄製単鳳環頭大刀（橋本 2011）などが副葬され、先進技術者集団を統べ

る新興首長といった被葬者像が想定される。南陽市松沢古墳群では、6世紀初頭前後の渡来系墳墓と目される2基の積石塚^{つみいしづか}が確認されており、とくに2号墳の埋葬施設は合掌形石室の可能性が考えられている。陶質土器としては、伝山形県内出土および新庄市東山グラウンド出土の有蓋高坏（新羅土器）や山形市東金井で出土したと伝えられる有蓋高坏（高霊地域加耶土器）、高畠町源福寺古墳群出土とされる脚付短頸壺（固城地域加耶土器）が挙げられ、いずれも6世紀前半頃に位置づけられる（定森 1993・2002・白井 2003）。これらの陶質土器は、すべて発掘調査による資料でないため出土状況が不詳であり、明確な位置づけが難しい。とはいえ、土器形態の特殊性から朝鮮半島産とほぼ確実視でき、初期須恵器の可能性が否定できない郡山市南山田1号墳出土の把手付短頸壺や白河市三森遺跡4号住居出土の平底鉢などとは一線を画す資料と言える。また軟質土器では中山町物見台遺跡SD15溝跡で移動式カマドが出土しており、共伴遺物からTK10型式期に位置づけられる。

以上のように山形県域では、庄内地方を除く内陸側に渡来系文物が点在している。これらのうち、唯一5世紀代に遡る大之越古墳例については、鍛冶工房が検出された仙台・郡山市周辺の諸遺跡や初期馬具が出土した角田市吉ノ内1号墳などの存在を勘案し、先述した太平洋側の流入ルートから分派してもたらされた蓋然性が高いと考えている。そのほかの文物（積石塚・陶質土器）については、同種のものを太平洋側で見出しがたく、時期も6世紀前半を中心としていることから、古東山道ルートの文化流入とは別の経緯でもたらされたと判断する方が妥当である。新潟県胎内市宮ノ入遺跡で上下交互透孔をもつ新羅系の無蓋高坏が出土している点を考え合わせると、日本海沿岸の物流が関係していると考えられる。そして日本海側において東北北部との交流が盛行するものちょうど同時期である点を踏まえると、両事象が一連の地域的動向である可能性も視野に入れる必要があろう。

Ⅳ 横穴式石室の伝播にみる地域間交流

続いて古墳時代後期、6世紀以降の交流関係に焦点を当てる。6世紀前半は東北地方全体で古墳築造が低調となる地域が多く、集落遺跡を含めて詳細不明の状況にあるが、6世紀後半以降になると墳墓造営が再び活況を呈

伝山形県内・伝東金井：定森秀夫1993「東北地方出土の陶質土器—日本列島における朝鮮半島系遺物の研究—」『朱雀』第6集
京都文化博物館

新庄市東山グラウンド：真室川町史編纂委員会1969『真室川町史』真室川町
物見台遺跡：阿部明彦1987『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書（2）』山形
県教育委員会

大之越古墳:橋本英将2011「大之越古墳出土の環頭大刀について」『出羽国
成立以前の山形』山形県立博物館

川崎利夫ほか1979『大之越古墳発掘調査報告書』山形県教育委員会

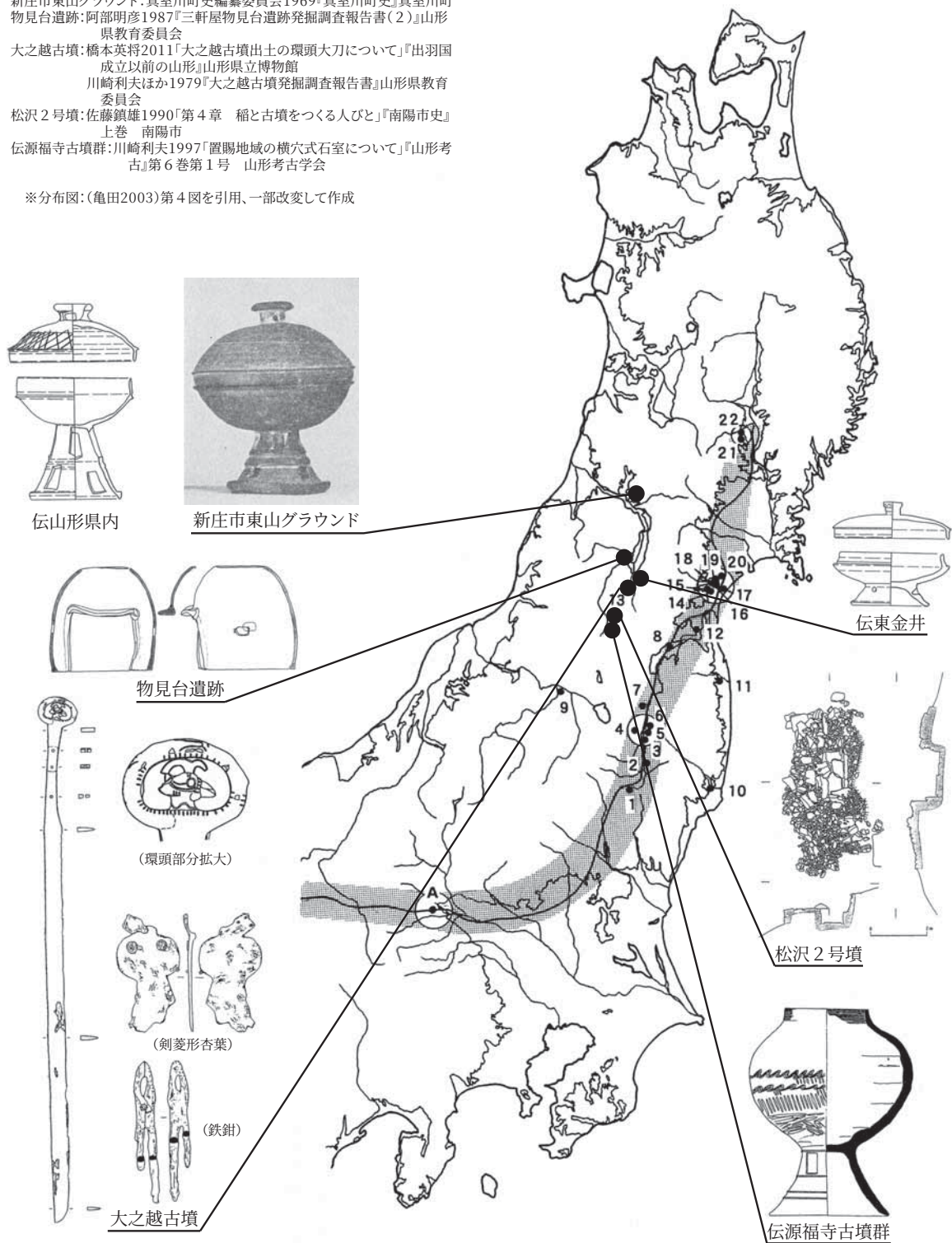
松沢2号墳：佐藤鎮雄1990「第4章 稲と古墳をつくる人びと」『南陽市史』
上巻 南陽市

伝源福寺古墳群：川崎利夫1997「置賜地域の横穴式石室について」『山形考古』第6巻第1号 山形考古学会

※分布図:(亀田2003)第4図を引用、一部改変して作成

●分布図内の番号を付した小ドットは5世紀代の事例

●物見台遺跡例は1/20、大之越古墳の大刀(全体)は1/10、大刀(環頭部)は1/3、松沢2号墳は1/200、その他は1/6



第2図 東北地方における朝鮮半島系資料の分布

する（菊地 2010）。とくに山形県域の場合、7 世紀前半を中心とする時期の遺物が極端に少なく集落の動向を把握しがたいため、ここでは墳墓の特徴から交流関係を探ることにする。南東北における後期古墳の特徴を同一の視点から比較検討するうえでは、山形・宮城・福島 の 3 県すべてに存在する横穴式石室が最適な材料のひとつと言えるだろう。現時点で把握されている事例による限り、山形県域における横穴式石室墳の出現時期は、いかに遡らせても 7 世紀前半～中葉よりも古く求めがたいので、先行する 6 世紀後半～7 世紀前半に位置づけられる福島・宮城県域の横穴式石室から検討してみたい。

第一に 6 世紀後半代の横穴式石室墳が複数営まれた浜通り北部を取り上げる。南相馬市真野 20 号墳・真野 24 号墳・横手 1 号墳・相馬市高松 1 号墳の 4 基が挙げられ、いずれも 20～30 m 程度の中小規模の前方後円墳である。真野 20 号墳は方形プラン石室、真野 24 号墳は T 字形石室、横手 1 号墳は大形一枚石を壁体とする切石組石室、高松 1 号墳は L 字形石室といったように、一見まとまりのない多面的な様相を呈する（第 3 図 2～5）。しかし真野 20 号墳の石積みは崩壊が著しく、見方によっては方形プランの石室墓坑に舌状にのびる斜行墓道が接続した地下式構造石室で、崩壊した石積みは石室側壁の構築材と墓坑内に充填された砂礫裏込め材が混ざったものとも捉えられる。この見方が妥当であるとすれば、同様の石室構造は小山市飯塚古墳群を代表例として栃木県南部に多数認められる（鈴木 1994）。真野 20 号墳石室が墳丘鞍部に位置し、舌状墓道を前方部に向けている点も、栃木県南部における小型前方後円墳の石室構築位置と共通性を見いだせる。墓坑プランの類似という点ではとくに T 字形石室の飯塚 37 号墳（第 3 図 1）の存在が目され、真野 20 号墳も T 字形ないしそれに近い平面形であった可能性が考えられる。このように理解すれば、片方の袖部の突出が小さい T 字形を呈する真野 24 号墳や、これと左右逆側を大きく突出させる高松 1 号墳が、真野 20 号墳と一連のものとして成立したと整理できよう。そして横手 1 号墳の切石組石室も、壬生町・栃木市吾妻古墳など栃木県南部に類例を求めることができ、浜通り北部と栃木県南部との間で数次にわたる影響関係があったものと結論づけられる。

なお 7 世紀前半～中葉に位置づけられる国見町森山 4

号墳・福島市甲塚 1 号墳（第 3 図 8・9）などの石室をみると、6 世紀後半の栃木県東南部で成立した「組み立て玄門」（大橋 1990・中村 1996）が採り入れられており（第 3 図 6・7）、中通り北部においても栃木県域との交流関係を確認することができる。

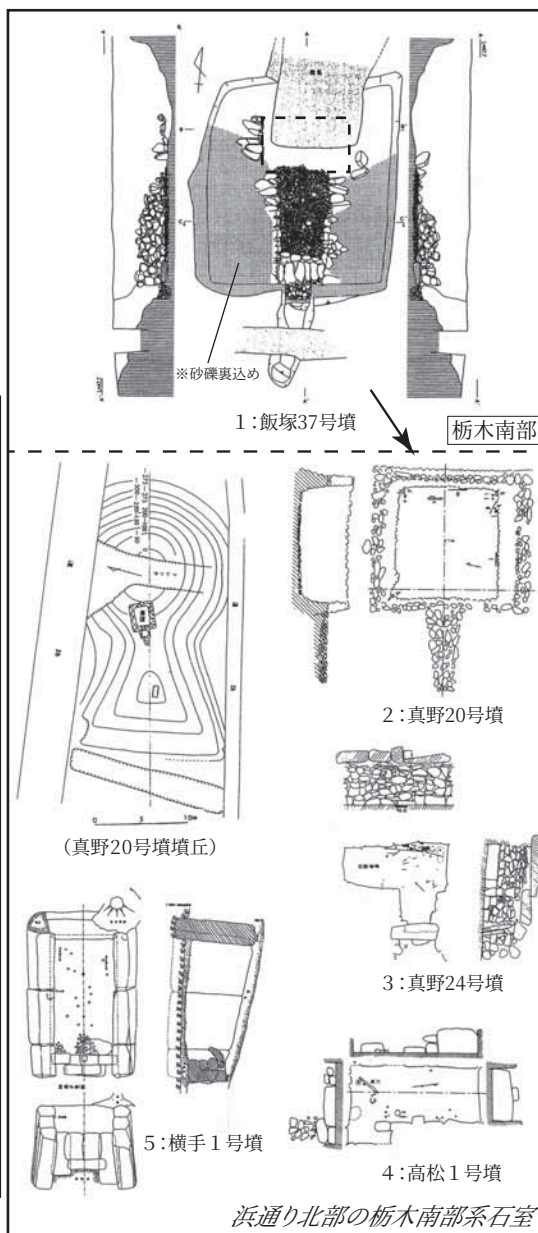
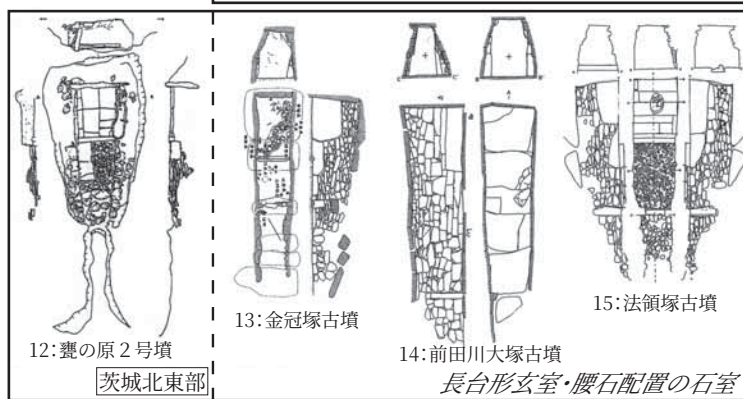
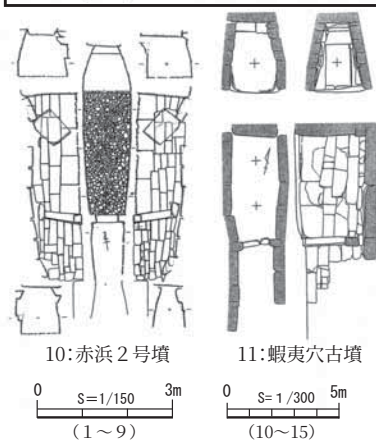
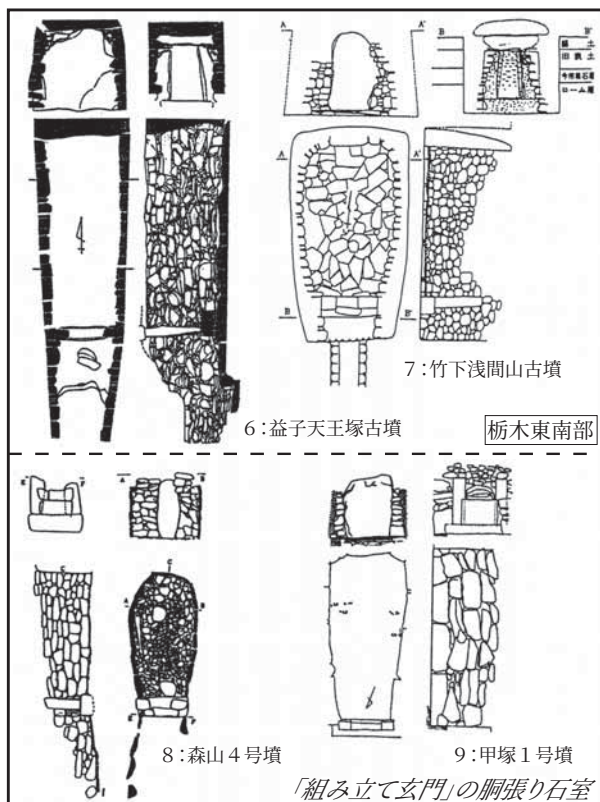
さらに既往の研究でしばしば指摘されてきた点として、浜通り南端に位置するいわき市金冠塚古墳（7 世紀初頭：第 3 図 13）と仙台市法領塚古墳（7 世紀前半：第 3 図 15）、および日立市甕の原 2 号墳（6 世紀末葉：第 3 図 12）など茨城県北東部に営まれた横穴式石室との近縁性が挙げられる。これらの石室は、①長台形の玄室プラン、②玄室内の間仕切り石・敷石の設置、③玄室奥半の腰石配置などの点で共通し、太平洋沿岸を中心に展開した交流関係として注目されている（古川 1996・横須賀 2007 ほか）。ただし同様の構造的特徴をもつ横穴式石室が中通り南部の須賀川市前田川大塚古墳（6 世紀末葉：第 3 図 14）にも採用されており、また上記の石室とは特徴が異なるが、茨城県高萩市赤浜 2 号墳と須賀川市蝦夷穴古墳（ともに 7 世紀前半：第 3 図 10・11）のような類似する石室構造の組み合わせも存在するので、太平洋沿岸のみならず古東山道ルートを含む交流関係と理解しておいた方がよいだろう。

このように福島県域を中心とする太平洋側の横穴式石室には、栃木県南部や茨城県北東部との交流関係のなかで成立したと考えられる事例が数多く存在する。これらは 5 世紀代の渡来系文化流入時に形成された古東山道ルートをベースに発展したものと推察される。

一方山形県の場合、現状で最も古い段階の石室として注目されるのは、2011・2012 年に調査が行われた米沢市戸塚山 175 号墳である。これまでは 7 世紀第 3 四半期の土器を伴う高畠町羽山古墳や安久津 2 号墳などが古手の横穴式石室として挙げられていたが（北野 2004 ほか）、これらの石室の玄門が立柱石であるのに対して戸塚山 175 号墳は多段積みで構築しており、より古相を示していると考えられる。そのほか羨道高より玄室高の方が高く前壁を有する点や、玄室四壁を持ち送る点などの特徴も見られ、これら諸属性を兼ね備えた事例となると 7 世紀中葉前後の福島県域、あるいは栃木・茨城県域には認めがたい。戸塚山 175 号墳の正式報告が未刊行であるため詳細な論証は別稿に譲りたいが、戸塚

図出典

飯塚37号墳: 鈴木一男1999『飯塚古墳群Ⅲ―遺構編―』小山市教育委員会
 真野20号墳・24号墳・高松1号墳: 福島県1964『福島県史』第6巻 資料編1
 横手1号墳: 渡部晴雄1960『横手古墳群第1号墳調査報告書』鹿島町教育委員会
 益子天王塚古墳: 大橋泰夫1990『下野における古墳時代後期の動向―横穴式石室の分析を通して―』『古代』第89号 早稲田大学考古学会
 竹下浅間山古墳: 常川秀夫1976『竹下浅間山古墳』宇都宮市教育委員会
 森山4号墳: 目黒吉明ほか1974『森山古墳群第1次調査報告』『国見町の文化財』第3集 国見町教育委員会
 甲塚1号墳: 福島市教育委員会1969『福島市史』第6巻 原始・古代・中世資料編
 赤浜2号墳: 諸星政得1972『茨城県高萩市赤浜古墳群』常総台地研究会
 蝦夷穴古墳・前田川大塚古墳: 福島雅儀1992『陸奥南部における古墳時代の終末』『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集
 甕の原2号墳: 佐藤政則1978『日立市六ツヶ塚遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会
 金冠塚古墳: 成田克俊・梅宮 茂1960『勿来市金冠塚古墳調査概報』『福島県文化財調査報告書』第8集 福島県教育委員会
 法領塚古墳: 氏家典和1972『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』仙台市教育委員会



第3図 福島・宮城県域の横穴式石室にみる地域間交流

山 175 号墳石室の類例としては宮城県色麻町色麻古墳群などをわずかに挙げることができる。色麻古墳群の河原石積石室は埼玉県域を中心とする関東中西部の石室構造に近似し、東北進出を目指す畿内政権の要請を受けて関東地方から移住した軍事的集団の墳墓とみる見解が提示されている（福島 1992 ほか）。戸塚山古墳群における横穴式石室の出現も同様の背景によるものと捉え、先に見た有力首長間の交流を示す福島・栃木・茨城県域の動向とは区別した方がよいだろう。筆者は以前、米沢盆地では先行首長墓を在地民編成の要として利用する戸塚山古墳群のあり方（土生田 2010）や、在地固有の論理にもとづいて前期以来脈々と造墓活動が展開した川西町下小松古墳群の様相など、在地性を温存するかたちで地方経営が進められた状況が窺える点を指摘したが（草野 2011）、この在地性の強さゆえ、太平洋側の古墳北限域と同様の東北経営策がとられたのではなかろうか。

V おわりに

小稿で確認したのは渡来系文物と横穴式石室という一部の文化要素に過ぎないが、どちらも太平洋側と異なる交流関係の展開が窺えた。5 世紀後半の山形盆地の古墳には太平洋側と共通する様相が認められるので、東西差をもって展開する 6 世紀以降の交流関係はひとつの変革的事象として評価することができよう。同じく 6 世紀代に比定される八反遺跡出土の子持須恵器も、こうした新たな交流関係の一端を示す資料なのかもしれない。

参考文献

- 阿部義平編 2008 「[特定研究] 北部日本における文化交流—統縄文期寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告〈上〉・〈下〉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 143 集・第 144 集 国立歴史民俗博物館
- 大橋泰夫 1990 「下野における古墳時代後期の動向—横穴式石室の分析を通して—」『古代』第 89 号 早稲田大学考古学会
- 亀田修一 2003 「陸奥の渡来人（予察）」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』平成 12 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））研究成果報告書 専修大学文学部
- 菊地芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大

学出版会

- 菊地芳朗 2012 「東北」土生田純之・亀田修一編『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社
- 北野博司 2004 「古代国家成立期における出羽内陸部への王権支配—置賜地域の横穴式石室墳—」『歴史遺産研究』No.2 東北芸術工科大学歴史遺産学科
- 草野潤平 2011 「山形県における中期・後期古墳群の特質」『やまがたの古墳時代—最上川流域のムラと古墳—』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 定森秀夫 1993 「東北地方出土の陶質土器—日本列島における朝鮮半島系遺物の研究—」『朱雀』第 6 集 京都文化博物館
- 定森秀夫 2002 「日本列島出土の高霊タイプ系・固城タイプ系陶質土器」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館
- 白井克也 2003 「日本における高霊地域加耶土器の出土傾向—日韓古墳編年の並行関係と暦年代—」『熊本古墳研究』創刊号 熊本古墳研究会
- 鈴木一男 1994 「砂礫裏込の横穴式石室—栃木県南部にみられる石室裏込の一樣相—」『小山市立博物館紀要』第 4 号 小山市立博物館
- 中村享史 1996 「鬼怒川東岸域の横穴式石室」『研究紀要』第 4 号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 橋本英将 2011 「大之越古墳出土の環頭大刀について」『出羽国成立以前の山形—山形と東北大学所蔵重要考古資料—』山形県立博物館
- 土生田純之 2010 「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第 65 集 九州古文化研究会
- 福島雅儀 1992 「陸奥南部における古墳時代の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集
- 藤沢 敦 2001 「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第 48 巻第 3 号 考古学研究会
- 藤沢 敦 2007 「倭と蝦夷と律令国家—考古学的文化の変移と国家・民族の境界—」『史林』第 90 巻 1 号 史学研究会
- 古川一明 1996 「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 横須賀倫達 2007 「勿来金冠塚古墳出土遺物の調査Ⅲ—装身具類・土器類・武器類（追加）と古墳の評価—」『福島県立博物館紀要』第 21 号 福島県立博物館

古代東北の火山噴火と遺跡からみた災害規模

—青森県十和田a広域火山灰を通して—

植松暁彦

1 はじめに

今年度調査の村山市清水西遺跡では、平安時代の9世紀代の遺物が散見された。一方、本遺跡に南接する清水遺跡1や松橋遺跡では、県内では数少ない10世紀初頭降下の十和田a広域火山灰（以下、十和田aと略す）の堆積が認められ、概ねその前後に遺跡が廃絶する。

本稿では本遺跡周辺の遺跡存続にも影響を与えてであろう十和田a降灰状況を整理し、当時の災害状況を探る。

2 十和田a火山灰の研究略史

十和田aは、近年の広域火山灰研究から青森・秋田県境にあり、過去数度火山噴火が確認される十和田火山（十和田湖南部の湖底）を噴出源とする。降灰範囲（分布）は、噴出源に近い東北部は明瞭だが、特に日本海側の東南部や南限は不明な点が多い（第1図。町田 2003）。

本県では、1980年代後半の遊佐町下長橋遺跡の発掘調査（渋谷 1989）で確認された火山灰の理化学分析の結果が十和田a由来とされて以降、発見が相次ぎ、分析（火山ガラス分析・火山ガラス屈折率）も進んでいる。

同報告書では、平安時代の史書『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日（現在の8月26日）の条「出羽国言上雨灰高二寸諸郷農桑枯損之由」（出羽国に火山灰が約6cm積り、諸村の桑畑に被害があった〔筆者訳〕）の記事を引き、出土土器の検討なども踏まえて、本遺跡の火山灰が十和田aにあたるとした。

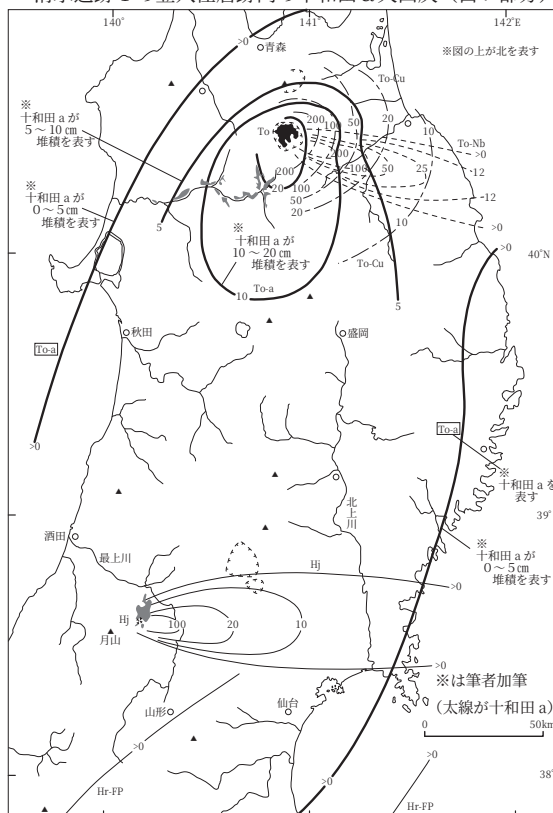
但し、一般に日本の火山灰（第1図。肘折尾花沢 [Hj]・十和田中取 [To-Cu]・十和田南部 [To-Nb] など）は、偏西風の影響から噴出源から東に広がることが知られる。十和田a噴出源から南で遠距離の本地域への降灰について渋谷氏は、十和田aの降灰が8月後半であれば、東北地方の北東方向に吹く太平洋側の「やませ」（日本海側の「だし」）と呼ばれる強風があり、その影響による東南北部への降下を推定した。

3 県内の十和田a火山灰の分布と堆積状況

本稿では、筆者が各遺跡報告書の本文や遺構の埋土の内容記載から火山灰があり、伴出土器の年代や理化学分



清水遺跡1の竪穴住居跡内の十和田a火山灰（白い部分）



第1図 火山灰の等層厚線図〔太線が十和田a〕（町田 2003）

析の成果から十和田aと考えられるものを抽出した。

結果、近年発掘の増加と共に資料数が増え、詳細は別稿に譲るが、概ね37遺跡114遺構ほどにのぼる（表1）。

一方、各遺跡内の遺構での十和田a出土状況は、全体に竪穴住居跡や井戸跡などの埋没期の凹地や、遺構の埋

表1 山形県の十和田a火山灰検出遺跡と主な遺構

本稿 番号	報告書 番号 *1	報告 書 年度	市町村	遺跡	遺構*2	層位	注記名	堆積状況*3	分類 *3	堆積 厚 (cm) *4	遺構(遺物) 主体時期 *5	十和 田a 分析 *5	備考 (報告書の火山灰記載等)
1	県140	1989	遊佐町	小深田	SK203 SK32・68・149・156・ 203・276・SD77	F7	火山灰	1・2次堆積か	A	5	10C前半		火山灰帯状に含む
							火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		
2	県141	1989	遊佐町	浮橋	SE11	F6	火山灰	1・2次堆積	A	2	10C前半		井戸枠内
					SE12・13		火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		
3	県145	1989	遊佐町	下長橋	SK27	F1	火山灰	1・2次堆積	A	2	10C前半		F1とF2の間層
					SK28	F3・4	火山灰	1・2次堆積	A	2	10C前半		F3底にほぼ純粋層
					SX979	F2	火山灰	1・2次堆積	A	6	10C前半		ほぼ純粋層
					SD91	F1	火山灰	1・2次堆積	A	6	10C前半	○	純粋層
					SD92	F1	火山灰	1・2次堆積	A	2	10C前半	○	純粋層
					SK22・26・35・SX980 a・988・989・1105・ SD67・78・86・87・ EU825・826・SB1		火山灰	ブロック・粒	B		10C前半	○	
4	県146	1989	酒田市	熊野田3次	SK1・2	F4	火山灰	粒	B		10C前半		
5	県165	1991	遊佐町	東田	SK22・373・384・ 733・SE1146・SD 33・50・SB2・9	F1	火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		
6	県184	1993	遊佐町	石田	SK46	F1	火山灰	1・2次堆積	A	6	10C前半		確認径1.2m。F2ブロック
					SK70	F1	火山灰	1・2次堆積か	A	4	10C前半		白色火山灰層。F4ブロック
					SD67	F1	火山灰	ブロック等	B		10C前半		
7	県185	1993	遊佐町	中田浦	SE15	F5	火山灰		B		9C後半		井戸枠内
8	県186	1993	遊佐町	木原	SK302	F4	火山灰	1・2次堆積	A	4	10C前半		
					SX617・938・977・S E30		火山灰	ブロック・粒	B	不明	10C前半		
9	8	1994	遊佐町	木原2次	SK18	F1	火山灰	1・2次堆積	A	8	10C前半		火山灰の均一層
					SK40	F1	火山灰	1・2次堆積	A	8	10C前半	○	火山灰の均一層
					SB6・SD122・SK43		火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		柱穴埋土
10	23	1995	遊佐町	大坪2次	SK25	F5	火山灰	1・2次堆積	A	2	10C前半		遺物年代と齟齬
					SK1590	F2	火山灰	1・2次堆積	A	1	10C前半		
					SG1	F4	火山灰	1・2次堆積	A	30	10C前半	○	1・2トレ。厚さ30～40cm
					SB15・16・17・19・ SK32・67・69・78・SD		火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		
11	24	1995	遊佐町	北目長田	SK6・16・661・670・S X64・SP615・624		火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		
12	24	1995	遊佐町	橋待	SE2	F1	火山灰	レンズ	B		10C前半		レンズ状
13	25	1995	遊佐町	上高田	SG6	F2・6・7	火山灰	固まり	B		10C前半		SG1・3と同河川
14	49	1997	鶴岡市	後田	SK61・264・359・SD 278		火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		2次堆積
15	50	1997	鶴岡市	塔の腰	SK316・378		火山灰	レンズ	A		10C前半	○	レンズ状。2次堆積か
16	56	1998	遊佐町	北目長田2次	SK250・458・SG10		火山灰	ブロック・粒	B		10C前半		
17	57	1998	遊佐町	上高田 2・3次	SG1	F7・8 F5・6・8 F19Y F4・5	火山灰 火山灰 斑状 火山灰	1・2次堆積 1・2次堆積 斑状 斑・ブロック	A A A A	25 20 8 10	10C前半 10C前半 10C前半 10C前半	○	厚さは下位F8層 厚さは下位F8層 底面火山灰互層。斑状 厚さはF4層
18	70	1999	河北町	四ツ塚	SE1465	F10・14	火山灰	1・2次堆積	A	6	10C前半	○	
19	78	2000	山形市	一ノ坪	SG17	Y	火山灰	粒か	B		9C後半	△	十和田aか白頭山
20	78	2000	山形市	梅ノ木	SU27	F1	火山灰	粒	B		6C～8C後		円墳周溝の最終埋没期
21	80	2000	寒河江市	高瀬山2期 2・3次	ST5032	F2	テフラ	1・2次堆積か	A	4	10C前半	○	多量に含む
						F2・3	テフラ	ブロック	B		10C前半	○	
22	100	2002	朝日町	沼向	SG	F2	火山灰	1・2次堆積	A	2	10C前半	○	低湿地
23	112	2003	天童市	蔵増押切	SG17	F3	火山灰	1・2次堆積	A	不明	10C前半	○	火山灰堆積・含む
24	市10	1994	天童市	西沼田	A区壁	Ⅲ	火山灰	ブロック	B				
25	121	2004	寒河江市	高瀬山1期	4区壁・SE377		火山灰	粒か	B		10C前半	○	
26	127	2004	中山町	達磨寺3次	ST117・317・SE481		火山灰		B		10C前半	○	
27	141	2005	山形市	向河原5・6次	ST545・SX1096		火山灰	斑状	B		10C前半	○	
28	146	2006	山形市	北向1次	ST159	EL	火山灰	1・2次堆積	A	1	10C前半	○	EL覆土にブロックでも含む
29	166	2008	金山町	太郎水野	9G壁	黒ボク	火山灰	粒か	B		10C前半	○	I層か
30	182	2010	鮭川村	下大曾根	SK58	F1・2	火山灰	1・2次堆積か	A	4	10C前半	○	30%混入。レンズ状堆積
					SK152	F2	火山灰	1・2次堆積か	A	13	10C前半	○	30%混入。レンズ状堆積
31	187	2010	鶴岡市	興屋川原	SE165・SG162	F1	火山灰	ブロック	B		10C前半		
32	195	2012	鶴岡市	行司免	SD4	F3	火山灰	1・2次堆積	A	5	10C前半	○	
					SD3	中層	火山灰	不明	B		10C前半	○	本文中に火山灰記載
33	196	2012	鶴岡市	矢馳A	SG833	F8	火山灰	1・2次堆積か	A	4	10C前半	○	F8は火山灰互層
					SE479	F4	火山灰	塊	B		9C後半	○	井戸枠材C14で8C後
34	整理中	2010	村山市	松橋	SE101	F2	火山灰	1・2次堆積	A	8	10C前半	未定	他に複数SEで検出
35	整理中	2011	村山市	清水1	ST1158	F1	火山灰	1・2次堆積	A	15	10C前半	未定	他に複数ST・SD検出
36	整理中	2011	村山市	清水2	SG	F1	火山灰	1・2次堆積	A	10	10C前半	未定	他に複数STで検出
37	整理中	2011	村山市	清水3	ST1048	F1	火山灰	粒・ブロック	B		10C前半	未定	

*1: 県数字は山形県教育委員会報告書番号、数字のみは(財)山形県埋蔵文化財センター報告書番号を表す。

本稿番号35～38は、現在整理中の遺跡で、現地説明会資料や担当者の御教示を得て、最も堆積の厚い遺構資料を参考として作成した。

*2: 火山灰を含む遺構は、報告書本文や遺構断面の土層注記などの「火山灰」表記から筆者が抽出した。

STは竪穴住居、SBは掘立柱建物跡、SEは井戸跡、SKは土坑、SDは溝跡、SXは落込み状遺構、SGは川跡を表す。数字は遺構番号。Fは層位。

*3: 「1・2次堆積」は筆者が本文や土層注記から火山灰を薄層で形成し降灰期と考えたもの(分類Aタイプ)、「粒・ブロック」などは火山灰を粒や塊、ブロック状に含む、降灰後と考えたもの(分類Bタイプ)。本稿本文参照。

*4: 堆積厚は報告書断面図などから筆者が計測した火山灰の堆積した厚さを表す。

*5: 遺構(遺物)年代は出土遺物から筆者が近年土器研究(植松1997・2008)等から報告書年代を修正。「○」は理化学分析を行い十和田aと判明したもの。

土中に含まれるものが多い。これらは、大別すると遺構の埋土内に、十和田 a が単層で層位的に堆積するもの（A タイプ）と、十和田 a を黒色埋土中に塊やブロック、粒で含み、土壌化したもの（B タイプ）に分けられる。

A タイプは、十和田 a 降下期に、遺構が開口し埋まる過程で降灰して堆積したもの（1 次堆積）と、降灰後に周辺から流れ込むなどして堆積したもの（2 次堆積）と考えられる。両者は、ほぼ純粋層で判別が難しく、少なくとも十和田 a 降下から間もない近接した時期（降下期）といえる。また、筆者が本文や遺構断面図などから計測した十和田 a 堆積層の厚さは、当時その遺跡への降灰量と全体として相関することが考えられる。

B タイプは、十和田 a 降灰以後の一定の時期幅（1・2 次堆積の土壌化）が想定され、少なくともその遺跡までは十和田 a が到達し、降灰範囲の一端が知れる。

結果、第 2 図の十和田 a の降下分布（B タイプ）では、庄内平野・新庄盆地・山形盆地に多く、南限は庄内平野南部（行司免遺跡）や山形盆地南部（北向遺跡）になる。

一方、十和田 a の堆積層（A タイプ）は、庄内平野北部（上高田・木原・下長橋遺跡など）や山形盆地北部（清水 1・松橋遺跡など）で単一層が 5 cm 以上と厚く、その南の庄内南部（行司免遺跡）や山形盆地南部（北向遺跡）では堆積が 5 cm 未満と薄く限定的である。

4 まとめ

十和田 a の日本海側南限は、新潟・福島県では判然とせず（春日 1999・鈴木 2005）、本県米沢盆地でも不明瞭である。全体では概ね庄内南部―山形盆地南部を結ぶライン（噴出源から約 250 km）と考えられる（第 2 図）。

十和田 a の降灰量は、一部川跡資料に、遺構の性格上過度な堆積（大坪・上高田）が見受けられるが、少なくとも県北部（庄内北部や山形盆地北部）までは、「扶桑略記」記事の約 6 cm 前後の十和田 a 堆積が遺跡状況からも見て取れる（第 2 図。筆者 5～10 cm 降灰推定線範囲）。これは、当時出羽国の中心であった出羽国府（酒田市城輪柵跡）周辺も、その域内の可能性があり、当時情報発信地と考えられる地域と記事の整合性もうかがえる。

そして、その南の県中部は噴出源から遠隔地のため、十和田 a の堆積が徐々に希薄になる傾向がある。

一方、東北全体でみれば、近年隣県で東北地方特有の城柵（秋田城・払田柵・胆沢城・多賀城など）の土器年

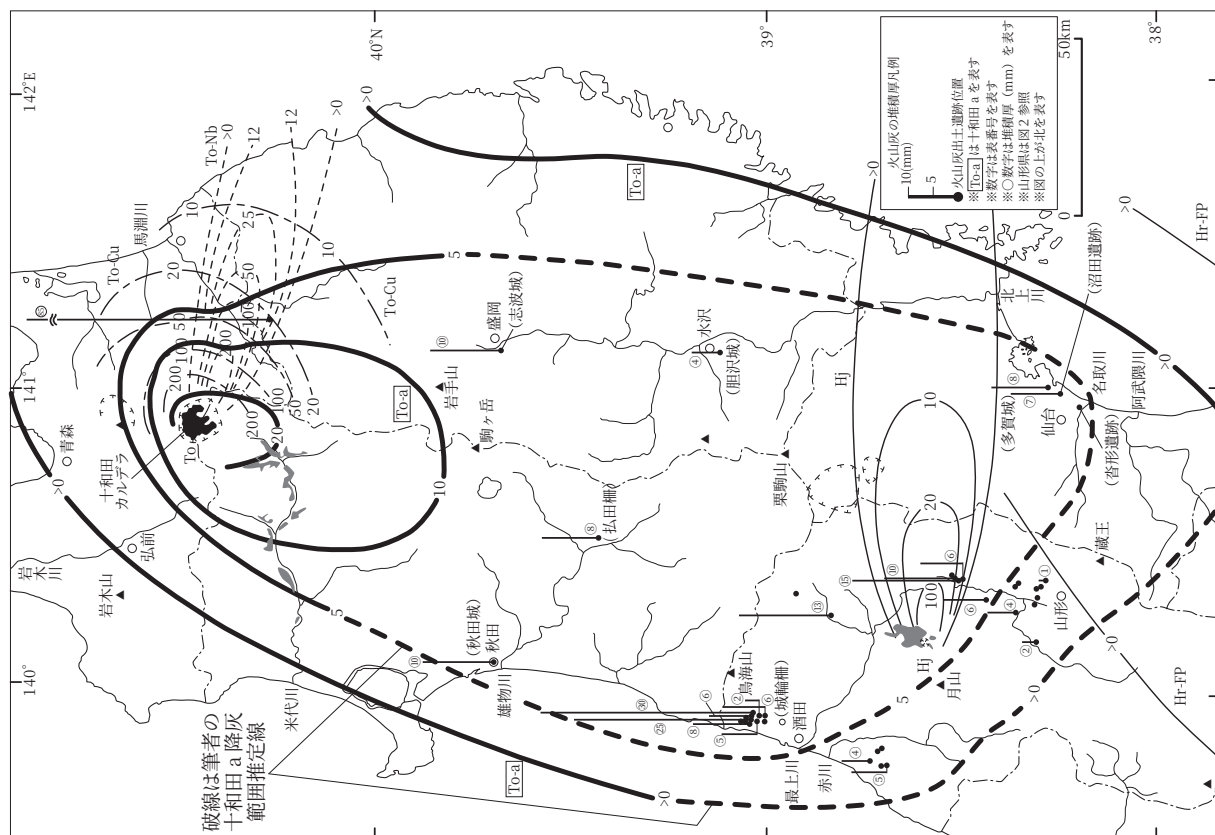
代の比定に、十和田 a を定点として使う動きがある（伊藤・井上 1997・植松 2008）。これら遺跡の遺構資料なども第 2 図と同様に筆者が断面図などから堆積厚を検討すれば、第 3 図の降灰状況がうかがえる。

これらからは、全体に噴出源から南に向かい降灰量が一定量あり、少なくとも隣県宮城県の仙台平野までは本県と同じく、10～5 cm 以下の十和田 a の堆積が確認され、その南で少なくなるようである。なお、一般集落でも近年資料が増加（中嶋 1997・高橋ほか 1998・能登 2001）し、詳細は別稿に譲るが、更に詳細な当時の降灰状況も把握できよう。

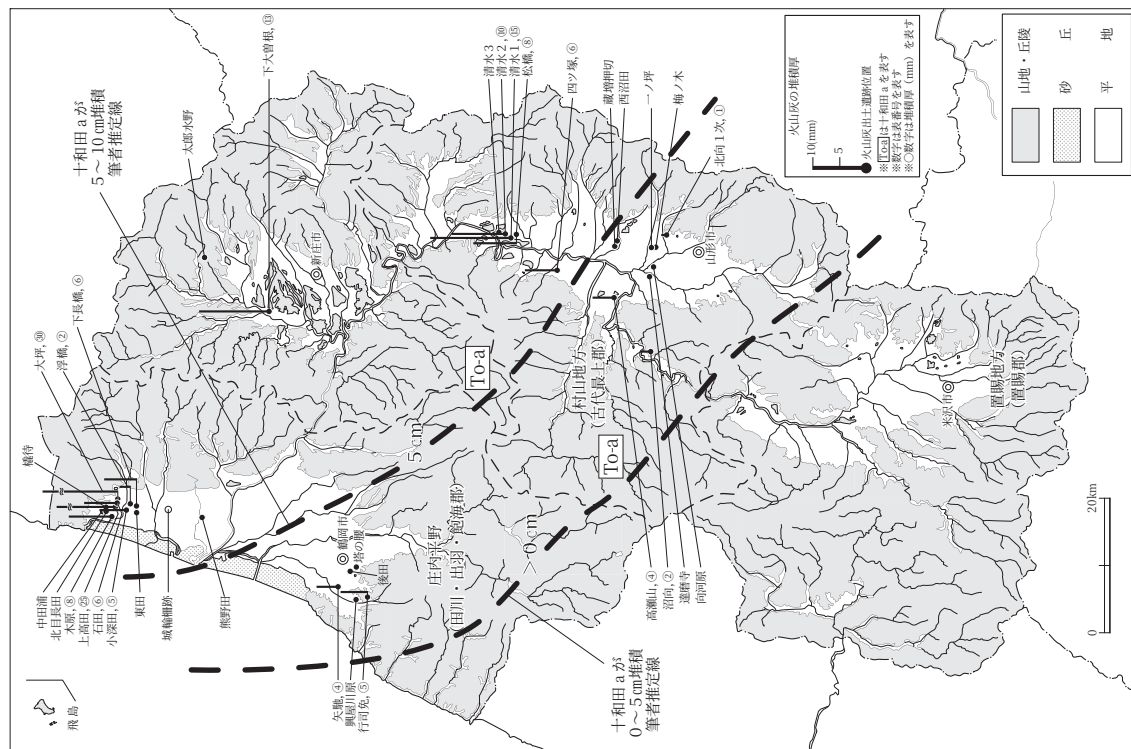
一昨年の東日本大震災では、本県の隣県が多大な被害を受けた。宮城県沿岸部では、今地震と同規模とされる弥生時代中期地震（西暦 100 年代頃）、貞観地震（869 年）の津波痕跡の上位に十和田 a（915 年）が堆積し、地震年代の根拠とされた（斎野 2010・柳沢 2011）。今後とも発掘で明らかになる古代の自然災害痕跡の知見を蓄積し、関連諸科学と連携し深化させていきたい。

引用・参考文献

- 伊藤武士 1997 「出羽における 10・11 世紀の土器様相」『北陸の 10・11 世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
- 伊藤邦弘・植松暁彦ほか 1996 『第 25 回古代東北城柵官衛検討会―山形県の官衛関連遺跡』古代東北城柵官衛検討会
- 井上雅孝 1997 「陸羽における 10・11 世紀の土器様相」『北陸の 10・11 世紀の土器様相』北陸古代土器研究会
- 植松暁彦 2008 「庄内平野北部の 10・11 世紀代の土器様相」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要第 5 号』（財）山形県埋蔵文化財センター
- 春日真美 1999 「古代」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 斎野裕彦 2010 『杏形遺跡発掘調査報告書』仙台市調査報告書第 363 集
- 渋谷孝雄 1989 『下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会
- 高橋 学ほか 1998 『第 24 回古代東北城柵官衛検討会―東北地方の古代集落（秋田県）―』古代東北城柵官衛検討会
- 鈴木 啓 2005 『福島県の遺跡』福島考古学会
- 町田洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会
- 中嶋友文 1997 「青森県内の平安時代の火山灰について」『研究紀要第 2 号』青森県埋蔵文化財センター
- 能登健ほか 2001 「十和田 a 火山灰による災害と復旧」『紀要 XVI』（財）岩手県文化振興事業団
- 柳沢和明 2011 「貞観地震・津波からの陸奥国府多賀城の復興」NPO ゲートシティ多賀城 HP
- なお、各遺跡の発掘報告書は、頁数の都合上、割愛した。



第3図 東北地方の十和田aの主な分布と堆積厚さ（町田2003に筆者加筆）



第2図 山形県内の十和田a広域火山灰の主な分布と堆積厚さ

埋文センターよ、もっと中学生もお得意様に！

～山形県の中学生の歴史教育における埋蔵文化財センターの役割～

川崎康永

I はじめに～センターの中学校教育協力の現状

公益財団法人山形県埋蔵文化財センターは、本来の業務である埋蔵文化財の発掘調査・整理作業・報告書刊行という業務のほかに、小学校・中学校・高等学校・大学などの教育活動に対してもさまざまな協力、支援をおこなっている。また、発掘体験やセンター参観デー（埋文まつり）等の「普及啓発活動」でも多くの児童・生徒・学生を受け入れている。しかし、「出前授業」に代表される、小学校の教育活動支援の充実ぶりに対し、中学校の教育活動へのかかわりは、非常に少ないように感じる。

平成24年度にセンターが実施した教育活動支援・普及啓発活動の状況を例にあげると、出前授業実施校数は小学校24校に対し中学校0校、発掘現場見学は小学校2校（山形七小＝山形城三の丸跡発掘現場、蔵増小＝蔵増宮田遺跡発掘現場）に対し中学校0校、センター見学は小学校0校に対し中学校は1校（山形九中）あったものの、発掘体験、子供ミュージアム、センター参観デー（埋文まつり）等に多数の小学生が参加しているのに対し、中学生は、センター参観デー（埋文まつり）やバスツアーに少数の参加をみる程度である。近年、キャリア教育の一環として上山市内の中学生の職場体験活動を受け入れているが、これも1校につき数名程度である。以上のように、小学校に比べ、中学校の教育活動に埋文センターがかかわる場面が少ないということは明らかである。

では、なぜこのような大きな差があるのか。その原因はいくつか考えられる。第一に、出前授業を申し込む中学校が小学校に対して非常に少ない点だが、①中学校では授業時数に比して学習内容が多く、カリキュラムに余裕がないこと。②教科担任制のため時間割の変更などの調整が難しいこと。③中学校は前年度に予定を決めにくく、出前授業の申し込み時期に間に合わないこと。④出前授業は古代（縄文時代など）にかかわる内容が主で、その実施時期（4～6月）と中学校の社会科のカリキュ

ラムが合致しない（県内の大半の中学校では地理・歴史並行の授業で、大多数は地理先習）こと。などが理由としてあげられる。第二に、センターの普及啓発活動各種行事に中学生の参加が少ない点については、土日や夏休み中も中学生は部活動の練習・大会や塾の講習会などがある。ということが主な理由として考えられよう。

このように小学校と中学校で、センターの教育活動支援やかかわりに大きな差があるのは、解決すべき大きな問題である。なぜなら、初めて歴史を体系的に学ぶ中学生こそ、「身近な本物」に触れることで歴史の魅力を感じることができる年代だからである。小学校の歴史学習は人物中心で、学習内容も焦点化されているため、遺跡や遺物・歴史の中の人々の暮らしに興味をもつことはあっても、それを歴史の流れの中でとらえたり関連づけて学ぶことは難しい。また、高校・大学進学など将来の進路を直接考えることになる中学生が、身近な遺跡や遺物に触れることで歴史に関心をもち、研究者の道に進むことも想定される。そこまでならずとも、ゆくゆくは地域の文化財に関心をもち、その調査・保存に理解を示し、文化財調査・保存活動の強力なサポーターとなることが期待できるのである。

II 埋蔵文化財センターが、中学校の教育活動に もっとかかわるために

1 社会科（歴史）の授業へのサポート

(1)「山形県版 歴史の資料」

山形県の中学校の歴史学習（授業）に、埋文センターの業績は既に大きく貢献している。県内のほとんどの中学校で、副読本として採用されている「歴史の資料」（発行 正進社）では、全国共通の内容の前に山形県にかかわる歴史資料が32ページ分挿入されている。内容は、山形県版表紙、本文（26ページ）、山形県関係（出身）の歴史上の人物（2ページ）、山形県のおもな史跡・遺跡

(2ページ)、山形県内の歴史関係施設・情報サイトHPアドレス一覧表となっており、本文は大きな時代ごとに年表(山形県関係)、写真・図表、解説が配置されている。編集は山形県社会科研究会(県内の現役中学校社会科教員から招集された編集委員)で、現在使用されているのは2002年(平成14年)に全面改訂されたものである。そ

の旧石器～古墳時代(4ページ分)には、山形県埋蔵文化財センター(前身の山形県埋蔵文化財緊急調査団、山形県教育委員会)が調査を担当した遺跡の資料(出土品や遺構、発掘状況等の写真)が15点掲載されている。(表-1)

表-1 「山形県版 歴史の資料」掲載の山形県埋蔵文化財センター関連資料一覧

No.	時代	遺跡名(市町村)	資料(写真)内容	写真提供(所蔵)	調査担当(報告書刊行)
1	旧石器	弓張平(西川町)	旧石器(晩期) 7点	県立博物館	県埋蔵文化財緊急調査団(県教育委員会)
2	〃	〃	発掘調査風景	埋蔵文化財センター	〃 (〃)
3	縄文	赤石(村山市)	縄文土器(早期)	県立博物館	〃 (〃)
4	〃	熊ノ前(山形市)	縄文土器(中期)	県立博物館	県教育委員会(県教育委員会)
5	〃	押出(高畠町)	彩漆土器	うきたむ考古資料館	県埋蔵文化財緊急調査団(県教育委員会)
6	〃	西ノ前(舟形町)	大型土偶出土状況3枚	埋蔵文化財センター	県埋蔵文化財緊急調査団(埋蔵文化財センター)
7	〃	〃	大型土偶復元前	〃	〃 (〃)
8	〃	〃	大型土偶復元後	県立博物館	〃 (〃)
9	弥生	生石(酒田市)	弥生土器	埋蔵文化財センター	県埋蔵文化財緊急調査団(県教育委員会)
10	〃	〃	炭化米8点	〃	〃 (〃)
11	古墳	お花山古墳(山形市)	管玉4点	うきたむ考古資料館	〃 (〃)
12	〃	〃	勾玉2点	〃	〃 (〃)
13	〃	〃	首飾り(復元)	〃	〃 (〃)
14	〃	〃	銅鏡	〃	〃 (〃)
15	〃	大之越古墳(山形市)	鉄製環頭大刀(全体・頭部1枚ずつ)	県立博物館	県教育委員会(県教育委員会)

しかし、これらの資料については、今後見直し・改善が必要な点もある。①奈良・平安時代以降の埋蔵文化財資料が、城輪柵跡(酒田市)発掘現場全景(酒田市教育委員会提供)、古銭(渡来銭)(致道博物館提供)の2点のみと非常に少ないこと。②現在使用されている資料集は、2000年(平成12年)7月から2002年(平成14年)2月かけて編集されたものであり、既に10年以上経過しているため、その間に新たに刊行された報告書に掲載された資料や、発掘調査によって発見された資料が入って

いない。しかし、資料集の改訂は、人的また予算的に頻繁にはできない状況であること。③県版巻末の「県内博物館・資料館、歴史関係情報提供サイト一覧」に、山形県埋蔵文化財センターが掲載されていない。現資料集が編集されていた当時、埋文センターは「専門の研究機関」で中学生には敷居が高いというイメージが強かった(現在も?)ことや、埋文センターのHP開設が2001年(平成13年)5月で、資料集の編集作業に間に合わなかったこと。等である。しかし、これらについては、次項から

述べるようなさまざまな手段・方策により補完していくことができる。

(2) 埋蔵文化財資料（実物、写真、図表など）の中学校への貸し出し、授業での活用

「山形県版 歴史の資料」に写真が掲載されている出土品（生石遺跡出土の弥生土器、炭化米など）の実物や関連資料（大型土偶と同じ西ノ前遺跡出土の遺物など）、写真資料などを中学校へ貸し出し、社会科（歴史）の授業で活用してもらえば、中学生の興味・関心を大いに引き出し、学習を充実させる効果がある。また、資料集に掲載されなかった資料（掲載候補から外れたもの、その後

の発掘調査で得られたもの）も貸し出し対象とすることにより、各中学校の学区近傍の資料も活用でき、最新の調査・研究成果を中学校の授業に生かすこともできる。

ただし、実物資料（出土品）を貸し出す場合は、その手続き、運搬、管理等の問題があり、次項で述べるように、センター職員も学校へ派遣して授業に協力する場合に限定されるかもしれない。また、膨大な写真資料から教材用に改めて選定・編集するのは容易でないが、過去に実施した出前授業で使用した画像資料を活用すれば、県内ある程度の地域の遺構・遺物（出土品）の写真資料を提供できるはずである。

○学習内容：「鎌倉時代と郡山～発表から郡山と鎌倉の関係を明らかにしよう」

○学習方法：鎌倉時代の郡山を5つのテーマにもとづいてグループ学習→グループごとに調べたことをまとめ、ポスターセッションで発表→自分のグループで調べたことと他のグループの発表を合わせ、わかったことを整理する

A 幕府の政治と郡山＝記録（文書資料）に残る、鎌倉幕府や御家人の動きから考察

B 郡山に残る地名・人名＝地域に集中して多い特定の姓や、関東と共通する地名から考察

C 義経にまつわる伝説＝地域の義経・静御前伝説から考察

D 荒井猫田遺跡から＝同遺跡から発掘された、特色ある遺構（街道と町並み）から考察

E 出土した遺物から＝同遺跡から出土した遺物の特徴（全国各地や中国の産物等）から考察

↓

☆グループで調べる段階および発表において、**荒井猫田遺跡**の発掘調査資料（実物（出土品）、写真、図表）を財団法人（現：公益財団法人）**郡山市文化・学び振興公社 文化財調査センター**（旧：財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団）が貸し出し、同センター職員がゲストティーチャーとして授業に協力。

※荒井猫田遺跡…郡山市安積町。1996年（平成8年）～2003年（平成15年）の8年間に17回にわたる調査がおこなわれ、8冊の報告書が刊行されている。遺跡北部が14世紀後半～16世紀の城館跡、南部が12世紀末～14世紀前半の街道（「奥の大道」と推定）を中心とした町跡で、授業に活用されたのは南部の街道と町跡の調査資料。

図－1 福島県郡山市文化財調査センターが郡山市立第六中学校社会科の授業に資料貸し出しとアシスタント（ゲスト）ティーチャーを派遣した例
2005年（平成17年）10月12日

(3) 埋文センター職員が、アシスタント（ゲスト）ティーチャーとして中学校の授業に参加し助言

近年、中学校では地域の専門家をアシスタント（ゲスト）ティーチャーとして招聘し、担当教師とともに授業の中で生徒の学習を支援する機会が多くなった。埋文センター職員も、そうしたアシスタント（ゲスト）ティーチャーとして実物資料（出土品）などともに中学校へ出向き、担当教師を補助して生徒の質問に答えたり、生徒

の調べ・まとめ活動を援助したりという支援活動をおこなうことができる。（図－1 写真－1）

しかし、このような活動をおこなう場合、「出前授業」以上に相手側（中学校）の授業担当者（教師）との間で入念な打ち合わせが必要になる。場合によっては、当日学校へ出向く職員と担当教師が、数度にわたって直接打ち合わせすることもある。中学校（教師）側も、事前に十分な教材研究と指導計画検討を要し、そうした部分

への援助も必要となる。このような事情をふまえると、中学校新学習指導要領（2008年（平成20年）告示 2012年（平成24年）度より完全実施）において中学校社会科の総授業時数（3年間）が385時間から350時間に削減された現在では、時数的にこうした授業を組むのが非常に難しくなっている。



写真－1 社会科の授業において、出土遺物について説明する中学生をサポートする郡山市文化財センター職員（郡山市立第六中学校）

2 選択授業、総合的な学習、文化祭へのサポート

（1）選択授業（選択社会科）へのサポート

選択授業は課題学習、補充的な学習や発展的な学習など、生徒の特性等に応じた多様な学習活動をおこなえる授業である。中学校旧学習指導要領では、中学校2・3学年において年間70時間（週2時間）設定することが可能であり、1時間は5教科（国語・社会・数学・理科・外国語）から、1時間は技能4教科（音楽・美術・保健体育・技術家庭）から開設する学校が多かった。その選択社会科においては、博物館等の協力を得て体験的な活動を取り入れた課題学習をおこなうこともあり（図－2）、そうした学習活動を埋文センターが支援することもできた。

しかし、中学校新学習指導要領（2008年（平成20年）告示、2012年（平成24年）度より完全実施）では、「選択教科」の扱いが、「開設するものとする」から「開設できるものとする」へ変わり、さらに授業時数は標準授業時数の枠外にカウントされることになり、「生徒の負担過重となることのないようにしなければならない」という但し書きまで付加された。これにより、ほとんどの中学校では選択教科を開設しない状況となり、センターが中学校の選択社会科を支援する機会はほとんど失われてしまった。

○学習内容：古代日本（縄文・弥生・古墳時代）の文化を探る

～縄文土器づくりなど、古代の人々の文化や技術を体感する～

○学習計画

4～7月 縄文土器についての学習 個人（グループ）研究テーマ設定

8～10月 縄文土器づくり実践（8月 10月） 個人（グループ）研究調査、実践

11～3月 縄文土器づくり・個人（グループ）研究の成果展示、発表（文化祭、研究レポート集）

↓

☆縄文土器についての学習および土器づくり実践では、県立うきたむ風土記の丘考古資料館所蔵の土器を観察したり、かたちづくりの指導・野焼きにおいて同資料館の全面的な協力を受ける。また、生徒の個人（グループ）研究においても、同資料館職員からアドバイスや材料の提供等を受ける。

図－2 埋蔵文化財を活用した選択社会科授業の例（2002年（平成14年）～2009年（平成21年））
～南陽市立梨郷中学校 高島町立第三中学校 川西町立第二中学校（いずれも3学年）

（2）総合的な学習、文化祭へのサポート

総合的な学習は、地域や学校、生徒の実態等に応じ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習で、探究的な学習、生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動をおこなうものである。

授業時数は、新学習指導要領でも年間50～70時間（週1.5～2時間）が確保され、学習内容としては、国際理解、情報・環境、福祉・健康（食育なども含む）、地域の歴史・伝統・文化・行事・生活習慣・産業・経済、職業や自己の将来にかかわる課題（キャリア教育を含む）等が

ある。学校によっては、文化祭をこの学習成果の発表や実践体験の場として位置づけることもある。

学習にあたっては、学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境を積極的に活用することが推奨されており、地域の人材や諸教育施設から外部講師をアドバイザーとして招聘することも増えている

山形県埋蔵文化財センターも、2012（平成24年）10月27日に東根市立第二中学校文化祭体験活動において、中学校1～3年生32名に勾玉作り、火起こし体験の指導をおこなう支援活動を実施した。（写真－2）

ただし「総合的な学習」は、毎年度、学年全体もしくは

学校全体で学習計画を作成するため、教科（社会科）のように、いつも埋蔵文化財センターが協力できるような学習内容になるとは限らない。また、小学校対象の「出前授業」と内容が重複しないような配慮も必要である。



写真－2 文化祭で火起こしを体験する中学生
（東根市立第二中学校）

3 校外学習、修学旅行の研修場所提供

昔	◇教師（旅行会社）が作成したプランで ◇学年・クラス単位の集団（数百～数十名）が ◇名所・旧蹟、大規模な各種施設等を見学する 団体観光旅行型
今	◇教師（旅行会社）が提示するリストをもとに、生徒が主体となってプランを作成し ◇班（グループ）単位（数名）が ◇名所・旧蹟、各種施設等見学に加え、<u>少人数でないと受け入れ不可能な各種施設見学や職業人との交流や体験学習もおこなう</u> 個人研修旅行型 （例）日本銀行支店見学（仙台）、笹蒲鉾工場見学・体験学習（仙台）、盲導犬訓練センター見学・体験（東京）、国際協力事業団見学・体験（東京）、江戸切子（ガラス細工）工場見学・体験（東京）、十条銀座商店街事務局見学・体験（東京）、…

図－3 中学校の校外学習（遠足、社会科見学）や修学旅行の変化

近年、中学校の校外学習（遠足、社会科見学）や修学旅行の形態が大きく変化している（図－3）。こうした個人研修旅行型のプランの中に、埋蔵文化財センターを見学・体験学習受け入れの場として提供することができる。これまでも受け入れてきた学校・学級単位の大規模な「見学」だけでなく、少人数のグループ単位の受け入れ態勢をつくり、周辺遺跡（中山城跡や掛入石、首塚等）めぐりをセットすれば、さらに充実したプランになろう。ま

た、条件の整った発掘現場であれば、地元の学校の見学だけでなく、他市町村や他県の学校の校外学習・修学旅行のグループ研修見学場所として提供することも考えられる。例えば、山形城三の丸跡発掘現場などであれば、公共交通機関の便も良く、霞城公園や最上義経歴史館、山形美術館、文翔館等を組み合わせた研修コースが組めるはずである。ただしこの場合、学校（県内外）への情報提供の方法・手段を工夫する必要がある（後述）。また、

発掘現場によっては研修に適さない場合もあり、どこをリストアップするか十分に検討する必要がある。一方でこうした情報は、なるべく早めに情報を提供しないと、学校の行事計画作成に間に合わなくなる。ほとんどの学校では秋（9～11月）実施の校外学習や修学旅行の場合、早ければ5～6月頃には準備を始めるからである。

4 進路学習、PTA行事・講演会への講師派遣

中学校の進路学習に対しては、既に山市「キャリアスタートウィーク」協力事業所として、毎年市内の中学校（上山北中、南中）生徒の職業体験活動を受け入れている。それに加え、最近の中学校でよく開催されるようになった「職業人講話」等の講演会へ講師を派遣することもできる。

また、ほとんどの中学校ではPTA活動の一つとして「学年PTA行事」（親子で体験活動をおこなうことも多い）や「PTA講演会」（親だけを対象とするものもあるが、親子で1時間程度の講演を聴く学校も多い）等の行事が組まれる。専門的な知識と豊富な経験をもつ埋文センター職員の中には、こうした行事の指導者や講師に適した人材がいる。

ただし、これらの場合、どんな講演ができる人があるのか、どんな体験活動の指導ができるのか、人材・活動リストを作成し、前述の校外学習と同様にその情報提供方法・手段について工夫する必要がある。

Ⅲ おわりに～センターの情報の整理・整備および発信方法・手段の再考

1 埋文センターが求められている情報

第一に、どんな遺跡の、どんな実物（遺物）、写真（遺構、調査状況、遺物）、図表（遺構図、遺物実測図等）資料があるのかという「学校で使える資料リスト」。第二に、どんな体験学習の指導者や、どんな講演ができる講師がいるのかという「学習プログラム、指導者・講師人材リスト」。第三に、そうした資料を借り出したり、人材派遣を要請したり、見学・体験学習を依頼するための手続きはどうしたらよいのかという「学校教育支援依頼マニュアル」。第四に、埋文センターではどんな仕事の見学や、どんな体験学習ができるのか、見学しやすい発掘現場はどこにあるかという「センター見学プログラム、見学可能

な発掘現場リスト」。などの情報を整理する必要がある。

また、授業で使える地域の歴史教材となる「授業で使える地域の歴史教材データベース」等は、前述のように、これまでに実施した出前授業で使用した資料（持参した遺物やプレゼン資料）をもとに、少しずつそれを補完していけば、容易に作成できる。

2 埋文センターの情報の発信方法・手段の再考

「学校で使える資料リスト」「学習プログラム、指導者・講師の人材リスト」「学校教育支援依頼マニュアル」は、県内各市町村教育委員会だけでなく、できれば県内全ての学校（小・中学校、高等学校）へ送付（直送）することが望ましい。また、「埋文やまがた」、センター各種イベントの案内に加え、「発掘調査速報会」資料や現地説明会資料、出前授業で使用したプレゼン資料などもできれば各学校へ送付（直送）したい。せめて掲載された発掘現場がある市町村所在の学校（小・中学校、高等学校）および出前授業を実施した学校と同じ市町村所在の学校（小・中学校、高等学校）へだけでも送付するべきと思う。

さらに、こうした資料や情報の発信手段としては、紙媒体の送付のみならず、希望する学校および教員を対象にメールマガジンを配信し、上記各リストや各種案内・刊行物を直送または電子送信したり、「授業で使える地域の歴史資料データベース」等は、メールで申し込み受付した学校（教員）へ資料データを添付して返信したり、センターHPからアクセスできるようにするという手段も考えられる。こうした資料は、教師が教材を作成するのに役立つなど、間接的ではあるが学校教育に大きく貢献する。

「センター見学プログラム、見学可能発掘現場リスト」を地方自治体の観光担当部署や旅行会社に提供することも検討したい。県内外を問わず、学校が修学旅行や校外研修活動をおこなう場合、目的地の自治体観光担当部署や旅行会社から、そうした情報を得る場合が多いからである。

中学校の学習活動に、埋文センターがより積極的にかわかることで、郷土の歴史・文化を尊重する豊かな心をもつ県民が増えていくことは間違いない。

埋文センターの皆さん、中学生も皆さんの「お得意様」であることを忘れずに。